

闘魂



東大サッカー部誌
創刊号



目次

巻頭言	新田純興	1
部誌創刊を契機に	部長 安東新午	2
監督雑感	監督 須賀敏孝	2
新春を迎えて	コーチ 高田宗昌	4
部誌"闘魂"	主将 安達二郎	5
東大蹴球部と私	五輪強化本部長 竹腰重丸	6
国際試合から学ぶ事	国際審判員 横山陽三	8
日本蹴球協会にもの申す	朝日新聞記者 中条一雄	10
ヨーロッパに遠征して	全日本チームコーチ 岡野俊一郎	12
東大サッカー部の歩み (創部前―昭和十年)	14
部史編纂の意義	14
創部前史	大正十一年卒 安達二郎	15
インターハイと東大蹴球部	大正十二年卒 新田純興	17
帝大蹴球団	大正十二年卒 野津謙	17
大正末期の写真	大正十二年卒 田中豊	18
山口高校蹴球部	大正十四年卒 武内邦次郎	19
十三会東大アズサ	昭和二年卒 木村康一	20
十三会L・B黄金時代	昭和四年卒 乗富丈夫	21
不滅の六連勝の陰に	22
あの日あの時あの試合	編集係	23
		26

帝大対高師（大正十四年朝日新聞）	26
東西王座決定戦（昭和五年朝日スポーツ）	27
東大L・B全日本選手権優勝物語（L・Bの沿革、戦評、メンバー紹介、全記録、優勝写真）	28
編集係	
選手権評、ロボット式試合 朝日スポーツ	31
リーグ戦 全記録 大正十一年―昭和十年	32
東大サッカー部部史年表（昭和十年まで）	44
関東大学リーグ上位十校の過去の歩み	45
インターハイ参加校一覧表	46
岸本英夫氏を悼む	48
新田 純 薫	
茂 森	47
ポールを作って四十年 ミクニ商店社長精田房次郎氏を訪ねる	52
森 絃 一	59
会社訪問 宝酒造を訪ねて	59
反省と出発	
今年度の抱負	61
新将主 石 光 豊	
昨年度練習記録	62
公式戦記録、戦評	67
前将主 安 達 二 郎	73
反省と回顧	
現状打開の方法と問題点	
第一部 部員の“生活と部員意識”に関する調査	76
第二部 座談会“どうしたら強くなるか”（野津、新田、竹腰、大内、須賀、岡野、高田氏と現役部員）	81
第三部 他校に学ぶ	90
京大サッカー部強化の方法と実践	90
コーチ 瀬 戸 進	
リーグ戦を終って	94
主将 時 森 日 出 二	

三部転落から一部昇格までの茨の道

日体大主将 梅内 巖 96

ハーフトタイム!

合宿所昨今

合宿所管理人 高橋 戒三 98

東大よ奮起しろ

正門前太田屋 太田 万造 99

ダックスから一言

ダックス主将 手塚 重郎 99

東大頑張れ

一女子中学生 渡辺 むつみ 101

先輩、OBのページ

茶道とサッカー

故大山政行氏御母堂 大山 徳子 102

オリンピック精神

昭和二年卒 中村 陽吉 103

頑張れば勝つだろう

三年卒 中島 健蔵 104

サッカー雑感

四年卒 安東 新午 106

一部復帰は可能か

十二年卒 大内 弘 108

現役生活十五年

三十二年卒 山本 修 109

古河電工サッカー部について

三十三年卒 小林 昭夫 112

入替戦雑感

三十八年卒 梅村 洋 114

一年後に思う事

三十八年卒 高橋 一修 115

御結婚おめでとうございます (昭和三十八年度)

編集係 116

現役、若い者のページ

マネジャー雑感

四年 宇尾 誠一 118

四年かかって学んだ事

二年 長田 綏男 120

新マネジャー雑感

三年 樋口 周嘉 121

サッカーに関する走り書き的総括

三年 川瀬 隆弘 122

帝大対高師（大正十四年朝日新聞）	26
東西王座決定戦（昭和五年朝日スポーツ）	27
東大L・B全日本選手権優勝物語（L・Bの沿革、戦評、メンバー紹介、全記録、優勝写真）	28
編集係	
選手権評、ロボット式試合 朝日スポーツ	31
リーグ戦 全記録 大正十一年―昭和十年	32
東大サッカー部部史年表（昭和十年まで）	44
関東大学リーグ上位十校の過去の歩み	45
インターハイ参加校一覧表	46
岸本英夫氏を悼む	47
新田 純 薫	48
ポールを作って四十年 ミクニ商店社長橋田房次郎氏を訪ねる	52
森 絃 一	59
会社訪問 宝酒造を訪ねて	61
反省と出発	62
今年度の抱負	62
新将主 石 光 豊	61
昨年度練習記録	67
公式戦記録、戦評	73
反省と回顧	73
前将主 安 達 二 郎	73
現状打開の方法と問題点	76
第一部 部員の「生活と部員意識」に関する調査	81
第二部 座談会「どうしたら強くなるか」（野津、新田、竹腰、大内、須賀、岡野、高田氏と現役部員）	81
第三部 他校に学ぶ	90
京大サッカー部強化の方法と実践	90
コーチ 瀬 戸 進	90
リーグ戦を終って	94
主将 時 森 日 出 二	94

遠い先を見らる目

微な音を聞く耳

茨の道を拓く魂（こころ）

加えるに

己を責めるの努力

東大蹴球部の人達は、いつも、全身に全霊を打ち込んで正しい道、新しい道、を切り開いて来た。

十一人集めるのがやっと、という時代に思い切って四校リーグの形を確立し、それを実行した。自分の学校にグラウンドも無いのに全国に呼び掛けて、高等学校選手権大会を決行した。

コレッジリーグ・大学連盟と歴史は変遷しても東大六年連続優勝の輝かしい偉業はいまだ誰れにも破られていない。東大第二軍であるL Bチームによって全日本選手権を獲得し、天皇杯の前身であるFA杯を手にして写真を仰ぐのも痛快だ。

毎年正月、霜を分け、氷を踏んで高校大会を運営した事は、満天下の青年を感激させ、幾多名選手を輩出し、日本の蹴球界に寄与した事正に計り知るべからずといつて過言でない。

こうした貴重な部史が、今日まで、一本にまとまっていなかったのは、寧ろ、不思議でさえあったが、時おり、機熟して、ここに、部誌が作製されたことは、洵に、洵に、喜ばしいことである。

然し、まだまだ、十分材料が揃ったという訳ではないので、横の連絡を密にして、もっと、完全な、面白い、ものに仕上げたいと願っている。

記録が残っているなら、それは、記憶よりも価値の高い資料であり、自慢話を披露してもらえらるなら、時代背景も知れて意義があり、批判、攻撃も亦、将来への発展上に欠かすことのできぬ鞭だと思われる。

どうか、此の一本を手はじめとして、部誌がいよいよ花やかな実のあるものに育ってゆくよう、大方皆々様の御協力を願いたい。

（昭三八、一一、一八）

新田純興

部誌創刊を契機にして

部長 安東新午

スポーツによって結ばれた友情は、クラスメートや職場での友人からでは何としても得難いものがあります。私もスポーツ（蹴球を始めダイビング、体操、陸上競技など）をやった事があるとゆうお蔭によって、今迄に与えられた恩恵は計り知れません。その恩返し的一端とゆうわけでもないが、昨今オリンピックの聖火リレーに使う器具や燃料については専門の立場から、あらゆる知恵をしぼってお手伝いする気持ちになり、何とか成功させ度いと念願している次第です。

さて、私は三一年のシーズンから、旧部員としては始めての部長をお引き受けしましたが、その年二部に落ちたまま、時代の流れや学制のせいとはゆうものの、一部へ復帰の壁は仲々に堅く、歴代監督やコーチの御指導、諸先輩の御支援、部員の努力にも拘らず、二部の上位に定着した格好で、何とも面目ない次第です。たまたま、今年の安達主将や宇尾主務の熱望により東大蹴球部誌を刊行する運びとなりました。日頃関心を持って戴きながら御多用のため、部員がお近づき出来ないうる先輩の方々との交流の場を持つとゆう意味でも非常に有益な企てと思います。技術的なこと、物心の面などを御協力願ひ、その盛り上りが一部へ復帰の突破口となれば望外の幸せです。

監督雑感

監督 須賀敏孝

○ 東大に家の近い事と、職業（自営）の關係で監督を引受けてより安達（兄）野沢、名越、梅村、安達（弟）君等諸代のキャプテン、その他の選手諸君と共に五年間、私は自分なりにやって来ましたが未だ念願の一部に上がれず、実に自己の指導力の不足と痛感させられて居ります。その間二回、二部で優勝は致しましたがのゝ何かもう一つ足りないのではなにかと感じて居るのです。願ひて然らば何が不足か、何故一部に上れぬのかと考えるのに、吾が学生諸君には、是が非でも二部で優勝し一部へ上がろうと云う一念に不足は有りはしまいか、技術的な問題よりも今の東大のサッカー部に必要なのは技術以前の問題にあると思ひます。この部に入つた以上はもつと厳しい部生活をやつて貰いたいと思ひます。サッカーを楽しく、学生々活の一部としてやつて行こうと云う所謂クラブ的な考えと申しましようか今様の体育学的な考え方が、諸君の心の隅に少しでも有つたならば部を退いて貰ひたいと捨て去るか又は、それが出来ないならば部を退いて貰ひたいと思ひます。尠くとも東大のサッカー部に入り四年間の選手生活を全うしようと考えている諸君であれば、その他にあれもやりたい、これもしたい等とは考えずに勉強とサッカー文に絞つて学生々活を送つても、自分の經驗を通してみても決して悔いは無

いと思います。

申すまでもなくサッカーは団体競技であります。チームとしての和が出来上っている時は心ず良い成績が揚っています。然しチームも一人一人の集合体ですから、諸君はもっと自分自身で自己を厳しく鍛えあげて強くなって下さい。そしてその集合体の一つにまともった時にこそ諸君の力^{アルファ}が生れ、必ずや強チームになり得ると確信して居ります。試合をするのは監督でもコーチでも無い、君等自身なのです。

「選手諸君よ、もっと自己に厳しくあれ」

然し私と共に選手生活を全うして去った諸君には満腹の敬意を表して居ります。

○ 木枯し吹くグラウンドに立ち選手諸君の練習を見るにつけても憶ばれるのは、正月元旦より始まるあのインターハイに備えて、筑波おろしの寒風吹きすさぶ水高のグラウンドでお互いの顔も判別出来ぬ程の暗さの中に、唯、ホイッスルの音の目を追ひ星空を眺めながらターン、インターバルを繰返し繰返し全身に汗を流した二十数年前の練習の数々です。その練習の良否は別問題として、競争の為に今は亡き先輩、後輩の元気な顔が、今も尙臉に浮び上って来て、旧制高校の、理論は別にした非合理的な良さと云うか、遅しさと云うか、一種独特な根性を培う練習振りを、これあるからこそ且つての東大は強かったのだと、常々独り合点している所で

す。然し昔の事を、こう懐しむ此の頃は、もう自分も年かな、などと苦笑しています。

○ 順序が逆になりましたが、先輩諸君に一寸申し上げます。

おひまがあたりでしたら、いや是非おひまを作られまして、この先輩等に拝顔の榮を贈りたく存じます。一諸にボールは蹴られなくとも、又直接お声は聞かれなくとも、多数お出で頂けましたら現役諸兄の良き励みになります事必定、目に見えぬ力を与えられます事でしょう、そしてその力こそ明日への源動力となるのだと思つて居ります。吾が伝統ある東大サッカー部を守り更に飛躍させる為にも是非共、現監督の立場より呉々も願申します。終りに私を助け又全面的な声援を惜しまずして下さい、安藤部長を始め諸先輩並びにコーチの方々に、この紙上を借りまして、厚く御礼申し上げます。
(昭和十九年卒)

昭和三十八年十二月

新春を迎えて

コーチ 高田 宗昌

昭和三十九年、タツ年のお正月である。

お正月ではあるが、大阪では早くも全国高校選手権大会が始まり、引き続き全日本選手権大会が行なわれる等々、球音は高い。

そのような中で、今年も「今年こそ」と考えている。昭和三十一年の十二月に二部へ転落して以来、迎えて八度目の「今年こそ」である。

「石の上にも三年」と云うが、日数を基準にするとその二倍以上にも及ぶ七年間「一部復帰」を念願としながら目的を果し得ないでいるのだから、コーチの名がうらめしい。

達磨大師は「三年とか七年とか数字を比較しても無意味ですよ。

一年一年の密度が違うのですよ。」とおさとしになるだろう。

大先輩ノコさんには「決心が甘いからだ」とお叱りを受けるだろう。

事実、私自身についても、毎年新春には「練習には少なくとも一週土日の二回は行こう」とか「合宿も顔を出そう」とか考えても、一年が終ってみると、せいぜいその半分位しか実行出来なかつた年の方が多し。

又、プレーヤーとして、或いは現役の選手と一諾に、フォーメーションを考える場合、サッカーのゲームが非常に複雑な場面の連続

で、攻め方、守り方、ボールのさばき方、ポジションのとり方がケース・バイ・ケースで異なってくるということにかまけて、問題に對するはっきりした回答が得られないままに、適当にということ、なんとなく一年が終つてしまふことが多かつた。

更に、それ等にもまして、キック・トラップ・ランニングをはじめとする基礎技術、基礎体力修得の徹底を欠くことも認めなくてはいけない。この基礎技術・体力の貧困は、気力の不足と併せ、私が学生であつた時から、先輩諸氏のひとしく指摘される所であつた。

* * * * *

新しい来年度のチームも、やはり同じ問題点を持つてスタートを切つた。

少なくとも問題点が何かということだけははっきりしている。要は一年の間にどれだけやり抜くかということである。どれだけ考え抜くかということである。

現在、我が蹴球部は五十人以上の部員を有している。部の隆盛を部員数で示すとすれば誠に御同慶に堪えないが、問題になるのは数ではなくて一人一人の力である。

タツ年は躍進の年と云われている。その上今年はオリンピックの年でもある。

「なんとなく」ムードを一新し、チームを盛り上げ、竜王の玉を得たいと思う。

* * * * *

安達君、宇尾君を中心に、部誌が発行されることになった。

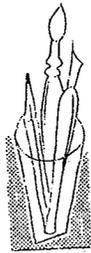
名簿の編集同様、なかなか大変な仕事であるが、先輩と現役の間が一片の報告書で片づけられ、次第に速くなりつゝある現在、非常に有意義な企画である。

同人雑誌によくありがちな、創刊号即ち廃刊号というようなことにならぬよう、編集委員の選任、予算の確保等、制度もすつきりして、この企画を育て、蹴球部の歴史を知るよすがとして、後輩に残していきたいと思う。

* * * * *

あれこれ考えて、ペンを握ったら、やはりサッカーのこと、東大のことを書いてしまった。自分ながら「俺はよほどサッカーが好きなんだナ」と思っている正月である。

(昭和三十四年卒
日本製粉(株)勤務)



部誌創刊

主将 安達 二郎

東大サッカー部はいかなる道を歩むべきか？

先輩や一部部員のように、外部から選手、コーチを補強してまで一部に復帰すべきなのか

多数現役部員のように、現在赦される最大限の努力を皆で力を合せて行い、最善を尽くし、たとえ一部に上れなくともそれで十分だと満足すべきなのか

今年の失敗の原因は正にこの考え方の違いに根本があるのだ。

このギャップは、サッカー経験のちがいにによるが、主に年代の相違が生むものである。しかもその年代の相違こそ、先輩後輩を意義あらしめるものである。

我々はこの知らなすぎる。今や伝説と化そうとしている先輩の偉業も、伝統を死守せんとする不屈の精神とサッカーへの情熱が成せた業なのだ。決してサッカー経験の違いだけで成せる業ではない。我々現役部員は素直にこの精神と情熱をその偉業の中から汲み取らねばならぬ。

他方先輩は我々現役部員について何を御存知だろうか。

受験地獄の為に役に立つ経験部員は一刻にも満たないという現実を御存知だろうか

下手は下手なりに一軍の者は病気になる者も出るくらい苦しい練

習をしているのを御存知だろうか

今の若い者はだめだ、と言って顔もお出しにならない先輩は我々にとっては所詮遠い人でしかない。

それでは、先輩も後輩も東大強化という目的に対し今可能を限りの精を出し、誠を尽くしているだろうか

後輩は先輩を、先輩は後輩を謙虚な気持ちで十分に理解しあい、その現状認識の元にはじめて東大強化の新しい方策が生れてくるのではないだろうか

我々若輩は先輩にとっては「不肖の子」であるかもしれない、しかしそうだからといって、それを放棄する事は、先輩自らがお創りになった輝しい伝統を、再び自らの手によってそれを一片の昔語りになり下らす一責を任ている事なのではないかと思う。

東大サッカー部は、先輩の部でも、現役の部でもない。先輩現役全員の部である。

リーグ戦が終り、四年間を回顧する時、あまりに自分の東大サッカー部の部員意識が低かった事を一番残念に思う。

唯迷惑をかけるだけだった僕の生活を反省し、後輩諸君に同じ轍を踏んでもらいたくない為に、先輩と現役部員の相互理解の場と資料の必要を痛感し、部誌発刊を思いたった。

編集にとりかかってから、種々の誤解や障壁があったが、諸先輩特に新田先輩の叱咤激励に勇気づけられ、どうやら一応形の整った

部誌ができるまでにこぎつけた。

先輩に許可無く僭越な振舞いですが、先輩と現役の接点・交点を作るという意図をお汲みになって、今後ますます充実するよう、末長くお見守り、御協力をお願い致します。

三十八年度主将

東大蹴球部と私

五輪強化本部長 竹腰 重丸

私は大正十四年医学部薬学科に入学したが、ついでゆけないので一年間在籍しただけで翌年には農学部農経科に移った。当時農学部は駒場にあったが、四月から十二月までは本郷の正門前に下宿して専ら御殿下グラウンドに通ったものである。

たまたま出席した講義の中で、LAWSON BULLDOG などという施肥の効果に關連する法則を聴いたりすると思いはチーム・プレーのバランスの問題に走ってしまったり、作物の生育条件の話をきくと、ゲームの解析 ゲーム構成要素の吟味 に心が向いてノートをとるのを忘れるなどということもあった。全く蹴球に憑かれた鬼で、サッカー狂と云われても致仕方ない状態であった。

そんな精神状態だったので時も場所もわきまえず理屈を並べたて

て先輩に迷惑をかけたし、三年目四年目は強引な主将として部員に
ずいぶん辛くあたった様に思う。また卒業して後も正式な監督・コ
ーチという様な役割でなかったにも拘らず、先輩風を吹かせて「憶
病でないとしたら責任観念がないぞ」と云った式の雑言を叩きつけ
て気のよい選手諸君を縮み上がらせた記憶がある。そんな悪罵を浴
びせられては後輩諸君は殴られるより辛かったであろうし、部の名
簿に載っている方々の中にも「とても貴方にはついてゆけません」
と申出て選手生活を打切った方もあった。

そういうひどいことばかりをしていたわけでもないが、とも角も、
先輩は「ノコは小供だから……」という様なことで許して下さっ
たし、同僚や後輩諸君は身につけた忍耐強さで鬼軍曹的なやり方に
も耐えて下さった。私が約四十年もの長い間に亘って「東大ア式蹴
球部」に関係していることができるのは全く皆様の寛容のおかげで
あって、他の大学だったら果してそんなに長い期間もったか否か甚
だ疑問で全く感謝に堪えない。

却説、現在の部の状態は如何ということとは屢々受ける質問である。
学制も社会環境も一変してしまった現在、昔の部と比較してものを
いうのは大へんむつかしい。部員諸君の中には昔の「帝大」と今の
部は何の関係もあり得ないと割切っているかに見える人もあり、昔
も今も似た様な人間のいる大学なのだから勝っていた時代にどうや
っていたかを追求すれば何か強くなる方法が見つかるかも知れない
と思っている者もある様に見受けられる。

そのどちらが正しい態度だと断定することは困難なことを思う。
しかしとも角練習に出る部員の数が五十人前後もあるのには誰しも
驚かざるをえないことと思う。それも駒場の教養学部からくるのは
時間ばかりでなく相当な経済的負担だと思ふ。私などのように他か
らみれば気狂じみた蹴球好きの人間から云わせれば馬鹿なことはい
ない計算高い現在の東大学生がこんなにも沢山練習に出てくるとい
う裏には（強かった時代でも練習には十六、七人と二十名しか出な
かった）蹴球をいし蹴球部の持つ何かが学生諸君をひきつけるのだ
と鼻高々といばる処である。しかし他面数の多いのは一つの力では
あるが勝敗という点からいえば代表チームの練習には技術的に不便
なところが起ってくるし、球拾いばかりしている諸君には伸びると
ころも伸び難いので歯がゆい思いが強いことだろう。「やれるだけ
やればよい——反則をしても勝て。」と云っては語弊があるが、今の東
大は勝負に対する執念がない。蹴球はスポーツで本質的に勝負を
離れるわけにはいかない。昔の高校応援団が唱和していたように
「勝った方がよい」ものであることも間違いない。どうしたらよ
いのか、御殿下で一諸に練習するとすれば四、五人の師範もできる
コーチが練習日の半分位の回数出れば、上達の度合はぐんと早まる
に相違ない。或は初心者には駒場で技術のフォームを身につける練習
をしたり、基礎的な身体づくりに主眼をおくように——これも指導
者が必要——するのも一方法であろう。いづれにせよ困難はあるが、
当面の目標、大学リーグ一部昇格には何か打開策を講じなければな

らなれと思われる。私はかくすべしと結論を出す立場にはないが、何らかの決定が見られたならば、はじめにさんげめいた口上を並べた手前もあり、且は年貢の納め時も近づいて来たので何かの役に立つことをしなければならぬ様に感ずる。東京オリンピックが終るまでは手が廻りかねるなどという事は、それこそ怠け者のたわ言にすぎないとの批難を覚悟しなければならぬだろうと思う。

(昭和四年卒)

国際試合から学ぶ事

国際審判員 横山陽三

戦后国際審判員をしている関係で指折り教える主として東南アジアであるが八回海外に出掛けているので多くの国際試合に接している。サッカーの試合のレフリーは試合を主裁するとルールブックに書いてあるが以前の我々の常識ではそれは笛を吹いたり旗をふったりしてルールブックにある反則をジャッジすることであると思っていたがそんなまよやましいものでないことがわかった。例えば一九六〇年に韓国で行われた第二回アジアカップの決勝リーグでは事実上の決勝戦となった韓国対イスラエルの試合で入場できない大群集が塀を乗り越えて浸入したためスタンドの上部から人波が崩れて

二十数名の重軽傷者を出した上フィールド内に数千の観衆が降りてタッチライン内までギッシリと詰った。この試合を挙行するか中止するかは審判の権限であるので私は主催国の韓国本部に命じて大観衆をタッチラインの外五米まで後退させなければ試合を開始しないと申し入れたところ韓国は軍隊と警官によってとにかく観衆を後退させた。しかしイスラエルはスタンド以外フィールドまで観衆の詰ったこの状態では我々外来チームは危険で安心して試合が行なわれているのではないと延期を主張し、韓国は又、今中止したらエキサイトしてはいる観衆が暴動を起すのでどんな処置でもするから中止しないでほしいと望んだので、私はタッチラインに沿って警官を配置することゝ、場内の観衆にタッチラインにこれ以上近寄らないで静粛に観戦することを場内放送で徹底させることの二つの条件で試合を開始した。

平素私は日本国内の試合に観衆の少いのを比べて諸外国の試合に観衆の多いことは選手にとって張合いがある点でうらやましいことだと思っているが、この場合は観衆が多すぎた。従って選手に刺激が強クエキサイトした試合となった。はげしい接触プレーがしばしば行なわれ一つのボールを争うとき必ずといってよい程一方はねとばされた。正規のシールドリングもあったがラフプレーでとばされた場合は笛が鳴ったあと倒れたプレーヤーが起き上りざまいきなり蹴ろうとしたりをぐろうとした。私はあわてゝもう一度笛を吹いて両方を引き分けたことが繰返された。又警官を配置したタッチラ

イン、ゴールラインも後から押される力で観衆の前線は押されてライン上に押し出されるので私は三度にわたって試合を停止して整理しなければならなかった。そのためこの試合のロスタイムの合計は二十分を越えたのである。試合は三対〇で韓国が勝ったが私は韓国へ群衆の整理と喧嘩の中裁に行ったようなものだった。このような状態は極端な例ではあるが国際試合では程度の差はあるがしばしば見られることである。昨年末これもソウルで行われた韓国対中国のオリンピック予選一回戦では試合は二対一で韓国が勝ったがあの頑健な韓国選手が三名負傷退場している。

十一月下旬であるのに雪の降る零下三度のコンディションであるので暖国香港から来た中国選手は順調には勝てずと見て幸運に拾った先取点を守るため相手を傷つけて人数を減らすような作戦をとり負傷者がたが結局決勝点は自陣ペナルティエリア内で故意に相手を蹴ったペナルティキックにより勝負がついた皮肉な結果となった。

私が何故この部報にこのような東大サッカー部に関係のないことを書いているのかと思われるかも知れないが実は私は近況を自己紹介する以外にも関係があるのです。数年前までの日本代表チームは前記のような緊迫した試合場の雰囲気にもまれて空まわりしたり、はげしい接触プレーにはねとばされ、そしてひるみ技術・戦術以前に試合に敗れるケースが多かったがクラマー・コーチの指導をうけてからたくましい基礎技術を身につけた上攻防の戦術を常識として教え込まれたので度々の外国遠征の武者修業の経験と相まち、試合

に對する自信をいだし、昨年はムルデカ大会でアジアの優位に立った上十月の東京国際スポーツ大会の折遂にヨーロッパ第二位の西ドイツナショナルチームに勝ったのである。その大会の引分になった対西ドイツの試合のレフリーをした折日本チームのスピード、技術戦術の著しい向上以上に痛切に感じたことは強い相手に対する気力の充実した激しい気迫であった。西ドイツ・Wがチャンスと見れば相手バックスのいる位置に再三猛烈なスピードと体重をかけた勢で衝突覚悟で真一文字に突込んでくるのに対し堂々正面からタックルしてつぶした気迫は従来にないものであった。少し以前の日本チームであればひるんで押し切られたか逃げ腰のタックルで相手の足だけ引っかけペナルティキックをとられたであろう。もっともはげしさ余ってラフプレーで相手を倒し日本人レフリーとして心ならずも目をつぶった場面もあったがはげしいプレーができないより男のスポーツといわれるサッカーでは或る程度故意でない限り或る程度必要なことではないかと思う。

さて毎週真面目に熱心に練習をしている東大の理設諸君よ、色々のハンデキャップを乗り越えて一生懸命努力されていることに敬意を表しているが試合振りは正直な話まだ食いたらないと思う。簡単に申し上げるとボールをチャンスに受けたとき逃げるように横ばいしないで西ドイツWのように相手をはねとばしても突込むこと。そしてそんな相手が突込んできたら日本バックスのように正面からくいとめること。この二つは今の技術でも勇氣と集中力があればで

きるのではなからうか。そしてもう一つはどこに動きどこにボールを送るべきか常に考えて慢然たるプレーをしないこと、これは日本代表チームが行っているのでより頭がよいはずの東大学生諸君にできないうことではないと思う。もし味方をよく見、相手をよく見てプレーしてなお不正確なパスになるのだったら改めて練習における技術の習得が必要であることを再認識するでしょう。

(昭和十六年卒)

日本蹴球協会への申す

朝日新聞東京本社運動部 中条 一雄

私は、サッカーを愛しています。日本のサッカーが、何時かはソ連やブラジルに完勝する日の来ることを心から祈っています。だが日本のサッカー界が今のままで果して正常な発展をとげることができるとは思いません。私は、大いなる危懼の念を抱いているのです。

たしかに、日本のサッカー界は、西ドイツのクラマー・コーチにより新しい目を開かれました。だがクラマー氏も、東京オリンピック後に、日本サッカー界が再びモトのモクアミになることを予言しています。第一線選手はたしかにレベルを向上しました。オリンピックでも相当やれそうです。だがはるかに遠い将来のことを考え

た場合、この東京オリンピックという絶好のチャンスに根本的に改革しておかなければならなかったことがあるはずです。

第一に専用グラウンドの建設です。芝生のグラウンドの必要性は協会の方々もよくご存知のことと思います。だが芝生の専用グラウンドをつくる義務のある人たちは一体だれでしたしょう。東京オリンピックを秩父宮ラグビー場でしか開けない才覚の無さ、怠惰は、日本サッカー界の将来を考える時、全く残念でなりません。ワシントン・ハイツ内に建設の話があった時、協会の方々には、全力をつくして努力したでしょう。また小石川サッカー場が大学リーグの全試合に使えない事実をよく考えてみたことがあるでしょう。

次に協会の問題です。現在の常務理事制はたしかに一見良い制度です。だが内情は定員も選出母体もなく、任期もあって無きが如き留任の連続です。いくら優秀な人でもボスの存在になることは明らかです。これでは協会の政策もマンネリズムになるのは当然です。新人の登用も出来ません。家族会議的な会も良い面がありません。だがオリンピックを迎え、天文学的に仕事が増大する折に、二、三の熱心な人ただけではさばき切れません。サッカー出身の有能な人材は、世間には沢山あります。だが中でもとくに四十才から五十才までの中間層ともいわれる方々がほとんど協会の仕事にソッポを向いている事実は、これまた残念でなりません。協会の仕事にちよっと手をつけ、すぐ嫌気をさして辞めていった人も多いこともよくご存知だと思います。その原因はどこにあるのでしょうか。きち

んとした組織をつくり、それぞれ責任を持たせて若い者を登用すべきです。選手選考までタッチしている現在の常務理事制度だけでもなんとかすべきでしょう。

私が、こんな嫌なことを申上げるのは、何も個人を中傷したり、イヤガラセが目的ではありません。日本のサッカー界の将来が、協会の方々の努力、勤勉さに直結しているからです。サッカーの将来を思うとき、私はどうしても苦情をいわざるを得ません。クラマー氏がよくいっているグラウンドをはじめボールの問題、試合形式、試合時間、指導者組織の問題、トレーニング・センターの問題など一日も早くもう少しすっきりした解決をしてほしいものです。

また指導書の発行もどんどんやって欲しいものです。お隣りの韓国の金容植さん（早大出）は美に六十冊もの指導書と翻訳を出しておられるそうです。日本では今まで、二、三しか本は出ていません。その点だけでも日本は遅れをとっています。この点でもわが指導者は怠けていたといえるでしょう。

協会の組織については、私は三権分立ではありませんが、運営、強化、資金の三つの柱にきちんと分けるべきだと思います。運営は純然たる協会の運営、強化は現在の強化本部がやっているように第一線選手の指導、普及科学研究、資金は、恒久的なお金づくりの組織です。そしてこの三つの柱はそれぞれ独立し互いに干渉し合うことなく、自主性を持つのです。運営や資金が、選手選考まで口を出すべきではありません。

そして各部門の下には、委員会をつくるのです。委員会をつくることには反対の人が多いようですが、私はそうは思いません。とくに外国とくらべてお金のない日本は、全国のサッカー・マンの熱意を一つにまとめる組織が必要です。小さな熱意も合わせれば、外国に負けぬものになるでしょう。委員会は熱意を集めるところです。例えばワシントン・ハイツの専用グラウンドの話があった時、「グラウンド建設委員会」というのもつくっていたらどうでしょう。サッカー出身の代議士だって五人や六人いますし、建築家、文部省や大蔵省の官吏だってサッカーをやっていた人がいます。それを委員にするのです。なぜあの時、色々な人たちの熱意を糾合するような形が出来なかつたかと悔やまれてなりません。

現在の常務理事の中には、ただ外国へ出掛けるだけが目的の人や、肩書きだけが目的の（そう思われても仕方ない）人たちがあまりにもたくさんいます。そんな方々はオリンピックまでにはやメロとはいっていません。だがオリンピックがすんだらサッサとやめて欲しいものです。私は極端なようですが、現在の人たちでは、日本のサッカー界はもうこれ以上発展するとは思っていません。むしろ進歩にマイナスの面が今までも多かつたようです。若い人たちにゆずるべきです。岡野君や浅見君で十分、サッカー界はやっていけます。岡野、浅見両君に対し、私は「君たちは幸福だ、将来サッカー界を指導していくのに、やってはいけない標本がいま目の前にたくさんあるのだから……」。今の指導者がやっていることさえやらなければいい」

といっているほどですから……。

(昭和二十八年卒)

ヨーロッパに遠征して

全日本チームコーチ 岡野俊一郎

私が初めて歐洲遠征に参加したのは丁度十年前になります。東大サッカー部の四年の時でした。それから一九六一年西独のクラマー氏に招かれ独りで二ヶ月程歐洲を歩き、更に本年(一九六三年)日本代表Aチームのコーチとして西独を中心に試合をして来ました。私の海外遠征経歴は上記以外に東南アジア、韓国等へ四回程行っていますが、サッカーを学ぶと云う点では矢張り歐洲遠征が一番効果的であったと思います。

十年前の生れて初めての、しかも日本サッカー界としても戦后初の歐洲遠征の時には本当に笑いが止らない珍談が一杯あります。

しかしこの雑誌では幾分でも現役諸君の参考になるようなことをお知せし度いと思えますので楽しい話にはぶかせて貰います。どうしてもその種の話が聞き度い人は私の家に遠慮なく遊びに来て下さい。

① スポーツマンというもの

歐洲ではスポーツマンと云われる人は決してタバコを喫いません。

これは何も一流の選手と云われる人達の場合だけでなく、普通のスポーツの好きな人、自分でスポーツを愉しむ人達でもそうです。オーストリーの山でスキーを愉しんでいる殆んどの人はいくとも山に在る間は決してタバコを口にしません。これはスポーツをする為に身体のコンドیشنを整える者の当然なすべきことと考えているからです。そして自分から進んでスポーツをやろうと思つた者の当然の義務として素直にこの考えを受け入れていきます。

それにひきかえ日本のスポーツマン、特に選手にならうとしている若い人達はどうでしょう。自分から進んで一つのスポーツを選び、その運動部に入れば「上手くなる、レギュラーになろう」と云うのは当然のことですし、その為には自分にとってマイナスになるようなことは決してしないと云うのが自然ではないでしょうか。そして自分で選んで部員となつた以上少々辛い練習等であつさり退部すると云うのは自分自身に対しても恥しいことではないでしょうか。

合理的な物の考え方、或いは自尊心とか自由と云つた問題と単に自分に一番都合の良い解釈で片づけることとは違ふことをもう一度良く考えて下さい。

② コーチについて

日本と歐洲(いや全世界と云つて良いかも知れませんが)とで又スポーツ界のあり方で最も違ふ点は日本のスポーツが学校を中心としたのに対して歐洲ではクラブが中心になつて発展したことです。これは今日日本のスポーツの進歩を阻害する最大の痛と云えます。

す。(しかし日本の社会的環境を考えると日本でクラブが成立する可能性は零と云えるでしょう。)

クラブであれば一人のヘッドコーチと数人のコーチが少年からナショナルチームの選手迄一貫した方針のもとに指導され、ヘッドコーチは絶対の存在です。学校中心の場合監督は居てもO・Bの総てがコーチの様な型になり、O・Bの協力が必ずしもチームにプラスにならないことがあります。

② 歐洲で或るチームのミーティングを見ましたがコーチが一言話し出すと瞬間に部屋の中は水をうった様にシーンと静かになり選手の間はコーチにそゝがれます。試合中或いはハーフタイムに於ける選手に対するアドバイスはコーチの重要な仕事であり、それは各個人に与えられるものであつても、チームの一員としての個人であつてチーム全員の大きな関連があるのです。

東大の場合でも試合を観ていると監督でないO・Bの人が選手に注意を与えたり、ひどい場合(最近特に多い傾向ですが)同僚の部員が外から声をかけていることが屢々あります。O・Bの中からお願いして忙しい時間をさいて監督をして下さっている以上、チームの中に於ける監督は絶対のものであるべきです。監督は春から秋のリーグ戦を眼指して一貫した方針のもとに練習、試合を行っているのですから、O・Bで何か気のついた人は直接選手に話さず先づ監督に話すべきですし、まして同じ部員が選手に注意を与えたり、ひどい時は文句を云つたりするなどと云うことは歐洲では全く考えら

れません。日本と歐洲では最初に書いた通り学校とクラブとその成立状況が異つては居ますが、監督、コーチのやり方としてチームの為にどちらが良いかは明かだと思ひます。O・Bの人達は監督がどういう風にしたいかと依頼した事(実際のコーチの問題であれ、経済的問題であれ)を全力を挙げて実現出来るよう努力するのが一番の協力ではないでしょうか。そして部員の人達は先づ自分が上達するように謙虚な気持ちで努力をすべきだと思ひます。

③ グランド試合について

歐洲に練習をしたり、試合をする度に思ひるのは日本のサッカーマンに芝生のグラウンドでボールを蹴らせ度いと思ひ、この様を何万と云う観集の前で試合をやらせ度いと云うことです。

東大の真白なユニホームを変え度いと云う考えが一時ありました。芝生のグラウンドでの試合は真白なユニホーム程素晴らしいユニホームはないと思ひます。日本でサッカーを盛んにし、観集を集め、芝生のグラウンドが出来ようになる度には誰が見ても面白い試合をするのが大切でしょう。クラマー氏の云う様なピンポンゲームでは観客は増えなないと思ひます。その為には矢張り基礎技術の確立が必要です。自分の思つてゐる処にボールを止められず、自分の狙つてゐる処にボールが蹴れなくてどんななフォーメーションが組めるでしょうか。東大の試合が見ていて一番面白いと云われる様に早くなつて欲しいものです。

④ サッカー熱について

余り面白くない話ばかりになりましたが最後に世界でサッカーが
どんなに盛んかと云うことの体験を一つ書いて置きます。

私が独りで歐洲を廻り、デユセルドルフからロンドンに着いた時
のことです。その頃ロンドン空港の税関は入国者にうるさいので有
名でした。しかし私のパスポートを見て税関吏が私に聞いたのは唯
一言「サッカーのコーチか」。「イエス」と答えた私にカバンも調
べず彼がやおら洋服の内ポケットからとり出して渡して呉れたのは
英国のプロサッカーの日程表でした。

(昭和三十一年卒)

東大サッカー部の歩み

(創部前—昭和十年)

部史編纂について

我々の先輩の足跡をたどる事は、現在の我々にとって、単に知識
としてだけでなく、その歴史の背後にある諸先輩の汗と泥にまみれ
た努力と情熱の跡とばしりを感じ、我々の最上の手本として、役
立つものである。

現在と比較するだけでなく、その歴史から何かを読みとり、東大

強化の一助となれば幸いである。

十二月十日過ぎにはじめて編集方針をたてたので何ぶんにも準備
期間がなく、まとめる事はできなかつたが、今年度はその資料を提
供するに止め、この資料を基にして将来は立派な部史が編集される
事を期待している。

尚、新田さんに御指示を仰ぎ、資料などもたくさんいただいた。
又リーグ戦記録は、東大新聞、朝日新聞、運動界(後楽園野球図書
館蔵書)で部員が手分けして調べたものです。

又、その他、田中豊氏(大正十二年)、野津謙氏(同年卒)、武
内邦次郎氏(大正十四年)、竹腰重丸氏(昭四年)、乗富丈夫氏(同
年)、野沢正雄氏(昭七年)、阿部鵬二氏(昭八年)、出浦清一
氏(同年)、三宅豊幸氏(同年)、島崎辰二氏(昭九年)に話を伺
ったり写真を提供していただいたりして、御協力していただいた。

この資料を元に昔の蹴球マンを訪ね、日本蹴球史の編纂の一助に
したいと新田さんが張り切っておられます。

もし何かの参考になりますような資料なり、御記憶がございましたら、どうぞ編集部まで御一報下さるようお願い致します。

連絡所は、文京区本富士町一 東京大学 運動会内サッカー部です
電話は八二二二二二の内線、運動会に申しつけ下さい。

編纂責任者 安達 二郎

東大蹴球部誕以前の事

大正十一年卒 新田 純 興

東大の名で公式に試合をした最初の記録は大正九年二月十一日（紀元節）朝日新聞社の後援、東京蹴球団の主催で行われた第三回関東蹴球大会の番外の一つとしてアストラ・クラブに三対〇で勝ったことに始まる。

私は野津さんと科は違いが同じ一年に籍を置く東大生、野津さんに引き出されて、その前年の一月から再びボールを蹴り始め、二月には内村、中松という野球黄金時代の夢まだ覚めぬ向凌の校庭にボールを樹てたばかり、しかも自分の母校の庭で八高出身者だけが東大を名乗って試合をやった事は大いに不満である。一高、三高、いや高校ではやらなかったが中学時代はフットボールをやったという東大生がまだまだ居るのだから、そうした運中を総動員して、名実ともに東大の蹴球チームとしたいという情熱が燃え上って来た。

しかし、一面、八高出身者だけで一つのクラブを作っていた事については当然ともいふべき基礎があったのだ。それは、かつては江田島の海軍兵学校に居り、八高へ転動して来たイギリス人教師が数年に亘って蹴球の指導をし、大正三年四月二日八高チームは高師校庭で対高師一対〇敗という試合をやり、大正七年四月の一日と三日に豊島師範校庭で対東京蹴球団に三対〇敗、対イギリス人チームに四対〇敗という試合をやった歴史をもっていた。従って数年に亘る

卒業生が、他校出身者をまじえずとも一つのチームを編成し、暁星中学の卒業生チームに勝つだけの力をもっていたのである。この辺の事情は、現在、明大商学部教授である大正七年度経済学士村瀬示路氏（久我山三十七五）について承知せられたい。

私たちは大正八年九月に大学に進み、九年四月には二年生になっており、新しい一年生には一高からも同志がたくさん入って来ている。東大内のすべてのフットボーラー大同団結の夢は、ラグビーの仲間とも共通するものがあるので、大いに進展していった。この大正九年の秋のことである。大日本体育協会では翌年五月上海で開催される第四回極東選手権競技大会には多数の選手を派遣することをきめ、岡部平太氏が蹴球担当の委員に指名された。岡部氏は「第三回芝浦当時に較べたら高等師範も強くはなった。然し、まだまだ、単独では中国、フィリピンに齒は立たない。優秀な選手を集めて合同訓練をし、相当な成績は上げさせたい。岡部はそのための費用の画策をするから、新田おまえは体協委員岡部としての仕事を手伝え。」と私に要望されたのである。

私は野津さんを全関東の一員として推挙しこれは難なく容れられた。マネジャーは東京蹴球団の山田午郎君が引き受けることになった。合同練習は私もつとめて見にゆき、他の東大の運中も引張っていった。

然し、この全関東と名づけられたチームは協会公認ではない。関東予選も経なければならず、全国予選もやらなくてはならぬ。

一般に予選を呼び掛けるとなると、その基準となる競技規則（大正六年極東体育協会の名で出したもの）は既に売り切れて手に入らない。私の第一の仕事は競技規則を検討改訂して大日本体育協会制定として発行することであった。F A発行のレフエリーズ・チャートを勉強し、体裁も整えて十年三月に出版させた。

こうした仕事は、今なお御健在の理事近藤茂吉氏の御指導に依るものであった。

大日本蹴球協会J F Aの創立は、この極東大会がすんで、その秋即ち、大正十年九月十日のことである。従って第一回理事会、発足祝賀の会にも顔を出し、早速の事業である全国優勝競技会（現在の呼び方なら第一回全日本蹴球選手権大会）の開催の手伝いもした。会場設営も審判運営も記録整理もプレーの方もと大童。

J F A会報第一号を見ると、関東東北地方を一区域とする東部予選会に参加したチームの筆頭に

東京帝国大学 代表者 野津謙 とあり、メンバーとして十四人の名が載っている。

新 田 純 興	杉 原 雄 吉	大 敏 次
大 村 紀 二	窪 田 重 耐	佐 分 利 一 武
田 中 豊	山 崎 一 三	佐 伯 道 夫
井 上 誠	米 谷 富 熙	岸 本 達 一
渡 辺 武	野 津 謙	

これが一高、三高、八高などの卒業生の大同団結で作った最初のチ

ームであった。

成績は第二回戦で、埼玉師範に1対0で惜敗している。まだ日本の蹴球は師範系全盛ともいへべき時代で東京蹴球団が第一回の覇者となりF Aカップを英国大使エリオット氏の手から山田午郎が受けたのであった。

此の会報第1号の巻末に役員・委員の名簿がついており、東大関係者を拾うと理事に高橋礼本、委員に小田切武昌、井上益雄、竹内恵太郎、水野重巳、野津謙、新田純興の名がみえる。

大正十一年の記録は雑誌「運動界」の四月号に高等師範の小沢丘氏が「専門学校蹴球リーグ戦」の標題で一文を掲げており、一月から二月にかけて日割をきめ高師、東大、早高、商大の四校が試合をし東大は第二位となっている。尚、小沢丘氏は高師の選手であったが一面剣道の達人で、現在は警視庁の師範である。剣道九段。

こうした記録がある以上現在の関東大学サッカーリーグ戦は大正十三年に始まるとの記録は改訂を要すると思うが、こうゆうふうに入伝わった原因は大正十一年度の全国優勝競技会の決勝が十二年に入ってから行われたためにリーグ戦を組む余裕がなかったことと十三年には多数の学校が集って規約を成文化した上でリーグ戦を始め、爾来ひきつづいて段々と隆盛の一途をたどった事にも依るものである。

私は工学部の冶金科を大正十一年三月に卒業、四月に三菱鉱業に

インターハイと東大蹴球部

大正十二年卒 野津 謙

入社、佐渡鉱山在勤を命ぜられたが、半年は大井町の研究所で勉強することが許され、こゝで本格的に本も読み実験も自分でやった。夜になると今でいうクラブ活動的なおつき合いに忙しく、それ迄十回近く連載していた「運動界」への「蹴球研究」も中絶させてしまったが、秋の全国優勝競技会の関東の予選会の笛は吹いて十一月三日（明治節）の夜、佐渡へ旅立った。

東大主催の全国高等学校蹴球選手権大会が始ったのは翌十二年正月からであり、卒業試験を目の前に控えて野津さんがほとんど一人でこの準備をしたのであった。野津さんの思ひ出話に、この時はじめて学業を放り出した。これは蹴球に対する自分の一番大きな決意だった、といっている。参加校は一高、七高、八高、水戸、松江、山口それに早稲田高等学院、明大予科の八校。竹腰さんは山口高校の選手として参加し大いに活躍したが早高の優勝で幕を閉じた。大正十四年一月に行われた第三回大会のプログラムをみると全十三校の選手の姓はボジションと共に表記されており、名の方は判らないけれど、山口の竹腰、八高の鈴木、高山、岸山。水戸の安東、中島、乗富。一高の河野、山路、奥野。松本の中島。浦和の細井。などはあの人だとアイデンティファイできる。

おゝ、つい資料をたのしんで体験談の域を外れてしまった。再び話を戻して此の時代はボールはミカド、靴は斎藤の時代であったというところで、私の話を終るとしよう。

(昭三八、九、一記)

私がサッカーをやりはじめたのは広島一中時代であった。

一高に入ってから新田さんと一諸によくボールを蹴ったがポートを主にやった。

東大に入った時は一高の他に八高の連中が別々にサッカーをやっていたが私がこれをついにまとめ、帝大蹴球団という同好会を作り、東京高師や、豊島師範や一高などに試合に行った。

大正十年私は才五回極東選手権大会に選手として出場し、この上海での敗戦のくやしさが、私がサッカーに情熱を打ち込むようになった契機となった。

その時には未だポートのトレーニングのような方法はサッカーには無く、そのポートでやられた事をサッカーに移すのが私の役目であったが、以後大学リーグ戦も大々的に大正十三年から行われる事となり、東大をいかに強くするか私の頭を悩ました。その結果全国高等学校蹴球大会をやれば、優秀選手も集まるし、いいのではないかと考えるようになった

大正十一年の十二月頃その表現に奔走し、万朝報（ヨロズチヨウホウ。後の時事新報）の鷺田さんに三百円もらって準備した。

しかし、十二月という卒業試験も迫っており、どうしようかと思随分悩んだが、大会をやり遂げるにはどうなってもかまわないと思

5、この時はじめて学業を放り出した。

これは今考えると蹴球協会に対する一番大きな僕の決意であったように思う。

さて、準備は出来たが果してチームがやってくるかどうか非常に心配した。

そんな時早大高等学院の鈴木重義さんが、早高も高校には変らな
いのだから入れてくれと、本郷追分の西濃館という下宿にねじこん
で来た。当時は新田さん、鈴木さんなどしょっ中僕の下宿に集まっ
たり、神田神保町の新田さんの家に集まったりして、どうしたら日
本のフットボール（サッカーとは言わなかった）を強く出来るかと
議論していた頃なので、無下にも断れず、官立高校だけでやろうと
思っていたが早高も入れる事にした。

結局一高、七高など八校が集つて、大塚の今の教育大中央のグラ
ンドで無事開催された。

その時、水戸の中島ミツチャン、広島の新野、山口のノコさん、
七高の野島などが活躍した。後の東大の名選手達である。

オ二回目からは土田さんのお骨折もあって、秩父宮殿下もいらっ
しやるようになり、隆勢の一途をたどった。

他方、ラグビー部の部長をやっていた末広徹太郎先生を、初
代蹴球部長に据え、東大にもインターハイで活躍した名選手が入っ
て来て大正十五年からのあの不滅の六年連続優勝を成しとげる原動
力となつた。

所志は貫徹されたわけである。

しかし入れるはずでなかった私立の早高が一度ならず二度も続け
て優勝してしまったのは困った。

どうにかして負けてほしいと思いつながらこれだけはどうしても出来な
かったもどかしさをおぼえている。

その年の秋にはオ一回神宮大会が開かれ、私が責任者となつた。
又早慶戦も私が両校にあっせんして行わたのがはじまりである。

（日本蹴球協会会長）

帝大蹴球団

大正十二年卒 田中 豊

大正九年から十二年の頃は、帝大蹴球団と称して、同好の士が二
十人位集まり殆んど練習などせず、せいぜいやっても丸くなってボ
ールを蹴るくらいであった。広島出の名CFの渡辺氏が幹事役をや
り、試合の前日手紙で連絡がきてグラウンドにこのこ出かけていき、
人数がたりなくて八人や九人でやった事もあった。

帝大蹴球団の他に、高師、慶応、青山師範、豊島師範、暁星中学
（アストラ）、早高の七校でクラブチーム形式で試合をしていた。

その頃の試合がいかにのんびりしていたのかを物語る面白い話が

ある。

大正十一年秋、高文最後の試合の日、口頭試問が意外に早く終つて高師に行ってみると一人キーパーが足りないと言うので、はおりはかまのままキーパーをやる事になった。

帝大はおしていたので呑気に周囲の三角帽をかぶった附属の小学生を相手にしゃべっているとき敵がドリブルして来た。

「オッサン来たよ」と言われて二三歩前に出る所、頭上を越されてパンザイしたが及ばず一点入れられた。とこんな具合だった。

野津さんは猛烈な精力絶倫家で、あちこち走りまわって皆を叱咤激励してまわっていた。下手ではなかったがどちらかというとき動きの選手だった。

フオーメーションなどはなく、長蹴とドリブルだけだった。グラウンドもなく、青山、豊島、高師などでやった。山崎君は非常に器用で上手な人だった。ユニフォームもあったがこれについてはあまり憶えがない。靴はくるぶしの上まであるもので重く、ミマツ運動具店などで買った。

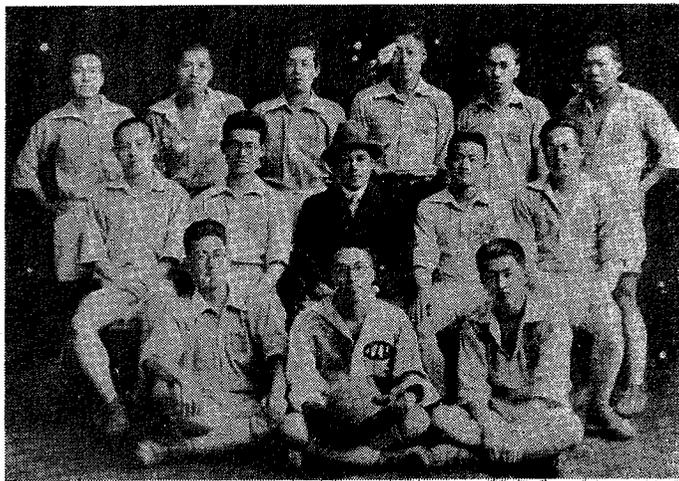
御殿の向い側に陸上のトラックがありその中でボールを蹴ったりした。

この頃はサッカーをやる者は少く、一高八高出身者も皆、広島一中や神戸一中、二中の者であった。この頃は末だ師範学校がサッカーの中心であった。

尚、名簿にはないがこの頃南塚啓一、加藤英男、山崎、志田など

の人達が居たのを憶えている。

(宝ビール社長)



田中
岸本
茂祿 岸本
米谷
辰馬
野津武内
別所
山崎
堀田
須賀
松井

山口高校蹴球部

大正十四年卒 武内 邦次郎

山口高等学校が開校されたのが大正八年九月で我々はそのオ一期生として入学したのであった。山口と云う町は人の割合に教育に熱心な町で、高等学校の外に高等商業学校も有り、所謂教育都市であった。然し何と言っても当時は淋しい、言いかえれば静かな町であったので、所謂運動にでも熱中しなければ、時間をもてあましたくらいであった。

自分の出身中学が、広島の中予であって、在学中からア式フットボールが好きだったので、山口に来てそのまま続けることにした。オ一期生であり、他に誰も発起する人もなかつたので、山口中学出身の奈倉実郎君（現在立教大学講師）や本間豪君と相談して、蹴球部を創立し学校から若干の部費を買ってボールを買ひ、当時の山口中学の運動場の一通でハネ廻つたものである。

翌年山口中学内の仮校舎から、新校舎に移ると共に広い専用の運動場も手に入り、各部員の手でグラウンドの整地をやり、ゴールも立て、白いペンキを塗り、一応フットボールグラウンドらしいものが出た。大正九年オ二期生、大正十年オ三期生が入つて来るにつれ、漸く部員の数も多くなり、グラウンドも賑つて来た。創立当時に比べると部員も多くなり、記念メダルを作って、クラス対抗フットボール試合等もして蹴球部の存在も確立される様になつた。

当時の同志には次の様な面々が記憶に残っている。

前記奈倉、本間君の外、文乙の荒木君や次の人々である。

市川 弘長 君（京大の応用化学を出て帝大に入つたが米沢工場に特勤になつた早々工場で事故死した）

茂森 薫 君（東大造兵科出身、現在神戸市で技術士として活躍中）

小田川 利喜 君（東大土木科出身、現在東京上野で土木屋さん）

井上 克巳 君（京大医科出身、大坂で開業）

出口 節夫 君（京大工科出身、現大分大学教授）

その他三上彰君、児玉来三君、武安季春君、加藤君などがいる。

山口高等学校は山口市の西端にあり、野田温泉に近く、グラウンドで走り廻つた後、一同野田温泉に入つて汗を流し、小生の下宿先の一間に、一人は牛肉を、一人はネギを、一人は酒を、という具合に持ち寄つてスキ焼き、バーテイを開き大いに気焰を吐いたものである。大正十年のことだつたかと思うが、熊本五高の蹴球部フットボール試合の交渉を進めたことがあつたが何かの都合で実現するに至らなかつた。

大正十一年の春休み（小生山口高等学校卒業の年）前述諸君のメンバーで、広島教育大学のグラウンドで、松江高校の蹴球部と初めて対校試合なるものを行つたが、残念乍ら、惜敗した様に記憶してゐた。前記井上君の如きこの試合のための猛練習の爲め学年末の試験

準備が出来ず試験は受けたものの、果して進級出来るか否かヒドク心配し、試合は敗けるし、泣面に蜂の様な顔をしていたのが今でも目に浮かぶ。

大正十一年三月、小生が山口高等学校を卒業すると、いれ違いに竹腰君が山口高等学校に入り、俄然山口高等学校の蹴球部も強くなり、確かオ一回全国高等学校サッカー試合を東京大塚の教育大学のグラウンドで催した時は、優勝戦まで残った様に記憶している。そして本郷豊国でスキ焼き残念会を開いた様に思う。かくて東大蹴球部の黄金時代を作り引き続き日本ア式蹴球を盛り上げた竹腰もこうした山口高等学校から産まれたのだと思うと心ひそかに誇りを感じるものである。その意味で、小生が山口高等学校を卒業するに当り、山口高等学校蹴球部の名に於いて記念品として山口名産の大内塗りの煙草入れを贈られ今も尙大切に保存している。

大正十二年春、東京に出て駒場の農学部農芸化学科に籍を置き新田先輩の紹介で東大の蹴球部の一員としてチョイチョイ本郷一高のグラウンドまで練習に行ったものである。山崎先輩の時代であったが、横須賀の海軍機関学校に練習試合に行ったことがあり、当時のスナップ写真が手許に残っている。又当時早稲田大学に留学中のピルマンチョーデインの名は日本の蹴球界にとって忘れられぬ名前である。同氏の著書「フットボール」という小冊子も出ているが、同氏の出現により日本のア式蹴は一段の進歩をしたのであるまいか。自分も水戸高等学校で同氏のコーチを受けたことが記憶に残っている。

大正十三年以後は大学の化学実験が忙しくなった為め、本郷に出向く機会が少くなり、部員の方々と顔を合せることも稀になった様だ。野津先輩を中心に部員でとった記念写真は、若かりし時代の想い出の一つである。

十三会、東大アズサ

昭和二年卒 木村 康一

小生大正十二年のよろず朝報後援、東大主催のオ一回インターハイ出場組で、大正十三年に東大に入学しました。同時に入部したわけですがその時はじめて東大蹴球部としてまとまったチームが出来、オ一回の京都大学との対抗試合にレフトハーフとして出場したのを憶えております。

しかし大正十四年には竹腰君等優秀なプレイヤーが入部してきましたので、学業が忙しくなった事もあって、オ一回組は多くはオ一回線をオ二回組にゆずり、オ一回組は大正十三年の十三をとって十三会(トサン会)を作り、「東大アズサ」をチーム名として(その当時の十三会アズサチームの勇姿はまだ小生のアルバムにあります)、諸大学や横浜外人との試合を楽しみました。

昭和二年卒業後OBとなり、その後OBの東大LBチームに発展したのだと思います。(京大薬学部教授)

十三会、LB、黄金時代

昭和四年卒 乗富 丈夫

サッカー部の起りは、大正年代にサッカー、ラグビー、バレーなどを行なっていた者をまとめて末広恭二先生が球技部をつくりそれが分れてサッカーなどの各部が出来たことに始まる。大正末期の東大サッカー部には、大体二つの考え方があった。一つは新田、野津氏の正統的なサッカーをする流れ、もう一つは岸本、山本、井上氏など自由奔放にサッカーをやるという流れである。前者は、サッカー部のレギュラーの中心をなすものであり、後者は十三会（トサンカイ）を作っていた。これは部員の数が五十人位の多数に達した為に中学、高校以来サッカーをしてきながらドングリの大きさのわずかの違いでレギュラーとして扱われなかつた選手が出身高校別にチームを結成しお互いに試合をしていたような団体であった。しかしレギュラーと十三会の間には種々の摩擦が生じ、これでは好ましくないと考えた末広先生が十三会を解消して全東大のLBを新たに作った。（昭和元年頃）このチームはいわば東大の二軍でありレギュラー以外の人が含まれていた。中途でサッカー部をやめた人もLBに属し、平素は練習出来なくても、試合には出てくるという状態であった。レギュラーとLBの間にはメンバーの交流も常に行なわれたとえば乗富氏はLBの主将とレギュラーのマネジャーを中島氏は双方のマネジャーを兼任するという風であった。LBのメ

ンバーの一人一人は其程うまくなくても特色のある選手が揃って居たようである。どちらかというといふ現在の同好会的性格が強い。しかしこのLBも一時は東大レギュラーより強力で全日本の選手権も獲得したことがある。

昭和初期はサッカーで東大の黄金時代であった。それには当時早大に籍をおいていたビルマの留学生チョウ・デン、モン・モンによる近代的サッカーの紹介（本を著す）があり東大がそれを取り入れたことも一因であろう。更に昭和三年には上海へ遠征して英国人チームと対戦、敗れはしたが、トライアングルバスやバックパスなどの新しい戦法を学んで帰った。この遠征は前年早大が遠征したときにトラブルを起して感情を害していたので、それを和らげるという目的もあったようである。そのときのメンバーはFWに鈴木、春山、篠島、若林、高山、中島、HBに新庄、竹腰、大町、斎藤、FBに小川、船岡、岸山、乗富、GK奥野、監督に井上の十六名であった。主将竹腰。マネジャー、乗富、北村、中島。当時の練習は三時半頃から六時頃まで殆ど毎日やっていた。その頃でも学業と練習との板ばさみになって部を去って行った人は多かつた。練習内容もコンビネーションより個人練習の方に時間も割かれていた。練習の前後十五分位ずつ長距離走った。最初はバスワークを主とする近代的なサッカーで圧倒的な強みを発揮していたが次第に欠点も現れ始め、大まかな攻撃に対しては弱くなり、遂に縦バスを多用し破れる羽目に陥った。これから以後は東大のサッカーもやや下り坂にさしか

かる。

文責 小林 邦彦

不滅の六連勝の蔭に

東大が本格的に強くなったのは昭和に入ってからで、大正十四年一五年は未だ一高や高師などに苦杯を喫していた。

昭和二年は、オ八回極東選手権大会の開催される年であり、帝大蹴球部も早大と出場権を競う事となった。早大が広くW M Wとなつて強化を図れば、東大も竹腰主将が日本で勝つ事よりむしろ上海での対外試合に勝つ事を目的として、非常にまじめで力強いブレイヤーだった或るレギュラーの代りに、神戸一中クラブの高山氏を入れようとした。しかしこの案は猛烈な反論を巻き起し、マネジャーの坂本氏が特に強く反対したが、結局は竹腰氏の主張が通る事になった。しかし当の高山氏は神戸一中クラブの方に出場してしまい仕様がなく前と同じメンバーでやったが負けてしまった。

竹腰氏は自分が詰腹を切らねばならぬと覚悟していた時、あれ程強く反対した坂本氏がこう言ったそうである。「君はリーグ戦にどうしても必要だ、リーグ戦には絶対に勝たねばならぬ、俺がこの事件の発端である、と言つてやめれば丸く納まるだろうから、俺は今日からやめさせてもらう」……………

しかしこの時誰もがこの事件の発端が竹腰さんにある事を知っていた。皆大人だったのである。その年はじめて全勝優勝を成し上げたのだ。常に日本だけの視野に満足しなかつた竹腰氏も立派なら、チームの為一筋を思つた坂本氏もこれにも増して立派であつたと言える。

ついでながらこの後マネジャーになつたのが中島健蔵氏である。昭和三年はひき続き竹腰氏が主将を続けた。

それまでも早大に籍を置いていたビルマ留学生チョウ・デンの近代的サッカーを竹腰氏がすでに山口高校時代から研究しとり入れていたが昭和五年に極東大会が神宮で開かれ、東大が代表として出場する事に決つたので、更に一層の強化の為にリーグ戦を前にして上海遠征に出かけていった。トライアングルバスやバックパスなどのショットパス戦法の導入が収獲であつた。慶応の試合の四日前頃帰京するといふ無茶な事をしたがこの年も圧倒的に優勝をとげた。

この年のメンバーで竹腰氏が〇日をやっているのに気づくが、これはフォワードに優秀な人間がたくさん入ってきて、ボールコントロールに難のあるバックに竹腰氏が入り、バックパスなどで有効に攻撃を生かす為であつた。昭和八年にも高山英華氏が〇日になっている。

この当事の東大新聞をひもといてみると、竹腰氏、乗富氏、篠島氏などの技術評などあちこちに載っているが、総じてこの頃すでに表現こそ異れ、今のクラマーコーチの理論の真髓とあまり異っていない。

ない理論を展開しているのには感心する。その記事を見るといかにその当時熱心に戦術や技術を研究していたかが脈々と伝わってくるのである。

さて昭和四年もやはり圧倒的な強みを持っていた。しかし早慶の力もはやあなどりがたいものとなってきたのもこの年である。

この年から東西王座決定戦が行われる事になったが、この年主将であった奥野氏は非常にまじめな人で誰よりも早く部屋に行つてボール入れやネット張りなどしたそうだ。しかし心労が多過ぎたのだろうか、対関学戦に際し、自らメンバーからはずれた。

キャプテンであるのに、しかもそんなままずいプレーをした事もないのに、何としても関学に勝たねばという部の為に個人を犠牲になされたのだ。涙なくしては奪えなかった王座である。

昭和五年はもはや東大の実力は下降しはじめ、他方早慶は打倒東大を目ざして猛烈なフアイトをもやしていた。

東大はあくまでも厳しい生活と練習によつて王座を死守せんとし、主将も三人代つた。その一人若林氏は在学中肺病で亡くなられ、篠島氏がその後を継いだ。

対早大戦にはじめて2：3で敗れたがこれには一寸裏話があるがここでは略す。さて早大に敗れた為再び早大と相対する事となり1：0と幸勝ながら再び首位となり、対京大戦にも勝つてめでたくこの年は終つた。(尚この対早大決定戦についての話が中島健蔵氏の「頑張れば勝つだろう」であります。どうぞ参照して下さい。

尚この年に開かれた才九回極東選手権大会のメンバーは主に東大で占められていた。それを紹介すると、竹内悌三、野沢正雄、竹腰重丸、高山忠雄、篠島秀雄、牛島志郎、若林竹雄、春山泰雄、阿部鵬二の各氏で総数十五名中九名の多くを教えている。

この頃の試合は神宮で行われたが常に五、六千人の学生が応援にかけつけハーフタイムになると東大の攻める側に移動するので、早大慶応などずい分頭に来たそうである。

昭和六年は正に苦難の年であった。選手ばかりでなくOBの方々の心の支えであった末広恭二部長が学会で渡欧してしまつたのである。そんな事と我々は思ふかもしれないがこの先生の偉大さは今でも語り草となっている程である。

先生は造船力学の世界的権威者であり、サッカーについては全くの素人であったが、どの先輩よりも練習をよく御覧になつていて、或る時など雨で選手も来ないグラウンドに一人練習をやるのを期待して見ていらした事もあった程熱心な人であった。憚りも通じておられ、選手と語らずして何があるかを悟り、そんな時は決して「君達コーヒーでも飲もうよ」とおっしゃつて選手が風呂に入つて仕度の出来るまで待つておられ、一杯十銭のコーヒーを飲みながら選手達の議論を黙つて最後まで聞いておられるのが常だつたそうだ。もはや選手達にとっては心の支え以上のものであった。

その年は戦前の予想では東大は王座を守るのはむづかしいとされていた。早慶の実力はすでに東大のそれを抜いていたのである。

竹腰コーチがしばらく身をひいたのもこの時である。しかしなかなかうまく行かず結局途中からもとにもどり、末広先生がいらっしやらない時に負けられるかを合言葉に精神力でぶつかり予想をくつがえして全勝優勝してしまったのである。最後の対早大戦勝利の模様を、当時の東大新聞は、「小兵手島主将の胸中の感激いくばくか」と書いている。実に立派な勝利であったのだ。

この時は点は殆んど高山英華さんのセンターリングを手島さんが入れたものであった。他にはそれ程上手な選手がいなかった。しかし何にしても不滅の金字塔を築いたのである。

昭和七年からはもはや東大に味方するものはないもなかった。

あれ程頼りにされていた末広先生も四月に帰られると肺炎でおおくなりになり、技術の低下傾向は進むばかりであった。

七年の内藤主将はそれこそ苦難に苦難を重ねた人だと言われる。

末広先生の後を継いだ、後に総長になられた内田祥三部長が「末広先生にはとても及ばない」と自らおっしゃられたそうだが、これは末広先生の為でもなく、内田先生の為でもなく、又内藤主将の為でもなかった。もはやこの時に一部優勝の為の技術が絶対的に不足しはじめていたのだ。

ずい分話が長くなったがこの六年間に活躍なさった方々の話を書いてみよう。

竹腰さんにはもはや説明の余地はないが、山口高校時代から日本の名選手と言われ、早大留學生のチョウ・デンについてまわって技術

を修得した。東大に入ってから選手としてコーチとして現在に至るまで常に才一線御活躍なさっている。東大サッカー部の歴史そのものである。

鈴木駿一郎氏は、ボールの神様の異名をとる程ボールについて詳しく、ボールの空気入れから後の処理まで一切自分でやったそうだが、練習が気に入らないと途中でも一向構わず「俺帰るよ」と言って帰ってしまったりした。しかし非常に名人芸的才能のある人で一時はレギュラーを離れた事もあったが又もどって活躍され昭和五年優勝に貢献した。

篠島さんは非常な秀才であり、五年の極東大会の年に外交官を志望して高文試験の為退部しようとしたが竹腰さんに説得されてそれを棒に振ってしまい、今三菱化成の副社長をやっているらしいが果してどっちが幸せだったか？

手島さんは、こんな事ここで書いてよいか解らないが、当事秀才しか受けない農林省に志望した。「今年は農林省に東大から二人一番が入った」と言われたとかどうだか、末広先生の「これは立派な男でね」の一言で決ってしまった。それ程立派な人であつたそうだ。

今東大教授の高山英華さんはベルリンオリンピック選手に推せんされる程の名選手だった。もしあの対スウェーデン戦に高山さんが出ていたら相手バックが警戒して深く守り、勝てなかったかもしれないと言われている。しかし勉学の為辞退している（高山さ

んは午前中に実験をすませ、午後はグラランドに出ていろいろを雑用まで全てやり夜は友人のノートを写すという多忙な生活を送っていた。今でもこのいそがしい習慣が残っているのか我々がお会いしようと思ってもお忙がしくてお会いできない。

最後にこの当時の生活を述べておこう。

練習は短時間にきびしくやり少し休んで又きびしくという、いわばインターバルのような事をやっていた。阿部鵬二さんの話によると図書館の階段が上れない程しぼられたそうだ。竹腰さんである。グラランドは大正十四年までは今の御殿下グラランドは化学教室寄りに金網の張ったテニスコートがあり、南側ではラグビー部がやっていた。しかしラグビーは落ち目になるし、テニスの方もその頃盛んになってきた左翼運動を利用し、小人教で大金を使うのはよくないなどと理屈をつけて追い出しに成功し、大正十五年の秋には全面使えるようになった。

学友会の予算は二千円もあった。ボールが六円五十銭、スパイクのポイント直しが五と六十銭、縫うたいが二十銭、下宿代が二十円と二十三円くらいの時である。強かったからである。生活は今程楽ではなかった。

基金に百五十万円寄附して下さった野島さんなども当時は竹腰さんなどと一本十銭の焼鳥をかじったり、昼めしを抜こうなどと思ったりした事もあったそう。それでもサッカーをやったのだ。体でもこわしたら卒業も出来ず、今と変わらず優の数が大問題であっ

た当時、何故危険を覚悟で、犠牲を払ってまでサッカーをやったのだろうか 答は一言

「サッカーが面白かったからだ」

文責 安達二郎

あの日あの時あの試合

大正十四年 リーグ戦 戦評の一部

帝対高師

前半東大ハーフからの球よく出て高師を圧迫し東大の中島よく出て、高師ゴール前で好蹴したが惜くもバーをかすめ最初のチャンス逸す。その後高師奮闘し、圧迫されながらも度々チャンスを作り開始後十五分、高師左コーナーキックを得、R Iヘディングして先取する。

後半十分、中央線近くから高師の見事なキックボールが出、敵群を抜けば、C F竹内それをうけてR I山本にパス、山本それを受けて又一点を奪う。

東大は二十二分、C F中島のドリブルシュート惜しくもG Kの奮闘にはばまれる。

更にタイム三分前に総攻撃に高師ゴールに雪崩れこんだが高師の懸命なる死守に又も機を逸して得点ならず、二対〇で高師快勝す。

大正十四年十月二十八日 朝日新聞より

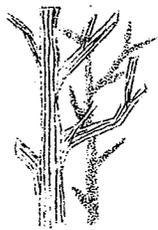
昭和五年度東西学生王座決定戦 前評

元来この対抗戦は、東京蹴球カレッジリーグのオ一位と、関西学生蹴球リーグのオ一位との決戦で、事実上学生蹴球界否日本蹴球界のナンバーワンを決定すべき大試合であり、従って一般フアンの人気を中心であることは言をまたない。加うるに今回の東西両代表の顔ぶれが、はからずも数年前より定期戦の中絶をみていた歴史的背景をもつ東大・京大の対立となったために一般の期待はますます大きいものとなった。ひるがえって今シーズン各リーグに於る両軍の経緯をみるに、東大は今シーズン多大の不運にみまわれ幾度かの危機にひんしながら、先輩の絶大なる指導・激励・選手の猛烈なる奮努力によって、チーム改造に成功し遂に関東の金的を死守したる者、京大は雌伏五年見事宿敵関学をほうむって、関西の錦標を得たる者、共によきスピード、よきパスワークをもった攻撃のチームである。従って戦前、我々は互いに得点の多からんことを予想したのであった。

篠島 主将 談

早大戦に幸運にして勝った時と同じように、京大戦には別にこれという作戦を立てて臨みませんでした。大物関学を倒した京大ですから、仲々骨がおれるだろうとは覚悟してかゝりましたが、案の定非常な苦戦におちりました。試合中は羞しい次オですが、たゞ無我無中で一生懸命にやりました。しかし私達は、ストをつくして戦い幸運にも勝つことができましたから、何ら思い残すことはありません。

昭和元年一月十五日 アサヒスポーツより





10 関東蹴球の覇権を奪つて帝大に
 関東蹴球の覇権を奪つて帝大に
 下位選手を以て関東蹴球の覇権を奪つて帝大に
 菅原 孫愛早大を破つて帝大に

手島 篠島 阿部 斎藤 三宅 船岡

敬称略 内藤 鈴木 竹内 野沢 林

東大I.B 全日本選手権優勝物語

東大I.Bが出来たのは大正末期に末広恭二先生が十三会とか「I」という名前のクラブを解消して東大として一つのまとまったチームを作ろうとなさった時である。

I.Bは元来レギュラーチームの二軍的存在であったが、今の二軍と違って、厳しい練習を好まなかったり、インターハイで活躍したような人でも忙しくてレギュラー練習のむつかしい医学部や工学部の連中が昼休みとか、日曜日などに集って試合を楽しんだ人達のチームであった。しかし技術的レベルは非常に高く、レギュラーチームとやってもあまり負ける事はなく、負けてもせいぜい一点差であったのを憶えている。選手層も厚く誰を出そうか困った事もある。そんなわけでレギュラーとI.Bの間には選手の交流も多く三宅氏、出浦氏などI.B優勝メンバーにも、レギュラーメンバーにせ載っている選手が居る。

さて大正十三年に始まった明治神宮大会も全日本選手権と兼行され年々盛んになり、大正十四年にはレギュラーが出場し準優勝した。その後を受け昭和二年にも出場したが、東京高校との予選にそれまでヘディングなどした事もない若輩篠島氏に見事にヘディングシュートを決められ敗れてしまった。

昭和三年頃からはサッカー界の中心は今までのクラブチームから大学へと移行し、大学リーグ及び、東西王座決定戦が最も重要視さ

れるようになり、リーグ戦を目的とした技術練習や激しいトレーニングの年間スケジュールの障害となるので以後出なくなつた。

末広先生にこの為お小言をいただいた事もある。

そうする内昭和六年、それではLBでも出そうかという事になり、一切レギュラーの方の特に竹腰コーチの指導を受けず、LBだけの力で関東予選に臨み、一部校が出場しなかつた事も有るが豊島蹴球団に勝ち順調に駒を進めた。

丁度この関東予選決勝の日、新宿白十字で祝勝会を催いたが、この時竹腰さんがいらつしやり、OBも二三人出したらどうかとおつしやつたが、元来LBの性格上これを断つていよいよ関西の雄、関学戦に臨む事になった。

誰の指導も受けず自分達だけでやってきたLBはそれこそ意気上り山田氏など関学フオワードの作戦を綿密に研究し、いよいよ準備はなつた。

こちらはまともに当つたのでは勝目なしと読み、試合前三十分くらいからウォーミングアップをはじめ、前半に勝負を決める作戦に出た。これに対し関学はなめてかかり足ならし程度をするだけであつた。

さてキックオフ、東大ボールではじまりセンタースリーで二、三回パスし、LW出浦氏から左に大きくパスが渡り、丁度相手バックの裏に走りこんでいたRW赤松氏がこれを見事に決めて、十秒たらずで先取点を奪つた。

その後もややおし気味に試合を進める内、二十分頃、LW出浦氏からパスボールが来るのをLI三宅氏左アウトサイドにひっかけ、相手バックスをかわし、センターリングをかえす所、RI今村よくつめていてこれを軽くブッシュユして見事に二点目をあげた。

前半終り頃からおされはじめ後半に入つてからは殆んど全員防禦したが決定的チャンスを与えなかつた。バックはタッチアウトやコーナーボールを長蹴して時をかせぎ、フオワードは相手バックの裏にボールを蹴つて時をかせいだ。レギュラーではとてもはずかしくて出来ない事であつたがミスで一点入れられたがともかく勝つた。しかもこの関学に、レギュラーチームは王座決定戦で2-2で引き分けているのである。

そして準決勝、決勝とも試合巧者ぶりを發揮して優勝してしまつた。この時のLBは試合をする度に強くなり、負ける気など全々しなかつた。

又試合が巧かつたとも言える。特に市川氏などは関学フオワードの動きを完全に頭で封じてしまつた。決勝の朝鮮人の興文中学との試合でも引くプレーを読んでことごとく相手の裏をかいた。遠慮会釈なくコーナーキックに逃げたのも彼である。

このようなプレーは竹腰さんのサッカーとは合わなかつたがとにかく全日本選手権をとつたのは何としても我々の誇りである。

ついでにこの時のメンバーを紹介すると主将は山川氏で、赤松氏は在学中、山中湖のヨット転覆で亡くなられた、越知氏、鹿子木氏

も今は亡い。あだなも紹介しておくと、今東銀の丸の内支店長をやっている今村氏はオケラ、三菱製紙常務の出浦氏はイデパン、製鉄化学専務の塩原氏はトーキョー、三菱電気技術部長の木村氏はジョセフィンベーカー、保谷町教育長の田村氏はタテタム、鹿兒島氣象台長神原氏はウナギ、ワカモト製薬常務の島崎氏は藤村であった。

文責 安達

尙資料は出浦清一氏、三宅豊幸氏、今村秀夫氏、島崎辰二氏にいたりました。

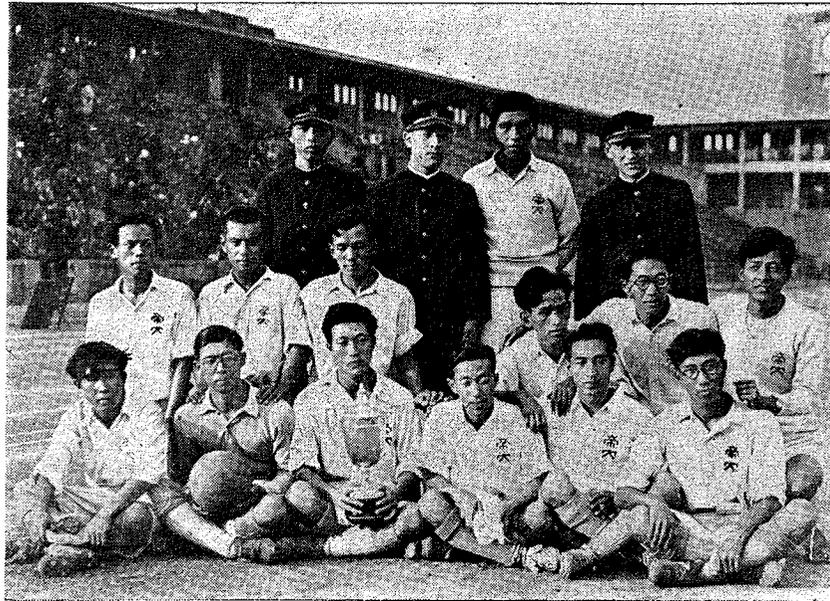
L・B 優勝の記録

帝大	14	G.K.	11	帝大	2
	3	C.K.	6	L.B.	0 2
	3	F.K.	0		
L.B.	0	P.K.	0		1 0
G.K.		塩原			1
F.B.	{	市川			関学
H.B.	{	山田			
		木村			
		鹿子			
F.W.	{	赤松			
		今日高			
		日三宅			
		出浦			

帝大	16	G.K.	15	帝大	5
	3	C.K.	13	L.B.	4 1
	6	F.K.	1		
L.B.	0	P.K.	0		0 1
G.K.		塩原			1
F.B.	{	市川			興文中
H.B.	{	山田			
		木村			
		鹿子			
F.W.	{	赤松			
		越智			
		日高			
		三宅			

帝大	8	G.K.	10	帝大	2
	12	C.K.	6	L.B.	1 1
	1	F.K.	4		
L.B.	1	P.K.	0		0 0
G.K.		島崎			0
F.B.	{	市川			二高ク
H.B.	{	山林			
		鹿子			
F.W.	{	赤松			
		今日高			
		日三宅			

東大LB 全日本選手権に優勝



	田村	島崎	神原	宮原	
敬称略	越智	木村	赤松	山田	今村
	日高	塩原	三宅	出浦	市川
		鹿子木			
		山川			

昭和六年 全日本選手権評
ロケット式試合？

オ一回当時の本体育会における蹴球に対する一般観覧者の評は、異口同音に、思わざる男性的な愉快なスポーツであると叫んで、場の四囲は人を以って埋り、日暮れて夕べの月山の端に表わるゝも尙去らず、今からは想像も及ばぬほどの人気を博したのである。然るに日移りてあらゆる競技に対する一般的理解の普及した今日往時の半分の興味をも感じさせないのは何と情無い事ではあるまいか。

その原因は前述した参加チームの充実味なき事にも求め得られよう。また東都において次々に行われるカレッジリーグの好試合に人気を奪われたという人もあろう。然し我々オ一回当時よりの変遷を観た者より云わしむれば、現代の人々は凡てを余りに科学的に分解しすぎて、スポーツのオ一義たるべき意気を失い、オ二義的たる技術にこだわり過ぎる傾向はあるまいか、と思うのである。従って極端に云えば試合が覇気ある人間の試合ではなく技術のみを会得して精神を失った、所謂ロボットの蹴り合いに過ぎないのではないか。我々は生きた人間である。されば生きた人間の意気と意気の蹴り合いにおいて初めて真にスポーツの三昧にひたり得るのである。ロボット製造は人情味少き特殊の人々の道楽に過ぎない。

(昭和六年一月二十五日発行のアサヒスポーツより)

リーグ戦 全記録 (大正十一年 - 昭和十年)

大正十一年 尙大正十二年はリーグ戦はありませんでした。

帝大	2 G.K.	2	帝大	4 G.K.	7	帝大	2
	12 C.K.	2		8 C.K.	1		2
	2 F.K.	2		13 F.K.	18		0
	0 P.K.	0		0 P.K.	0		0
G.K.	竹	内	0	G.K.	中	本	0
F.B.	{ 折岸	本 下兄	0 0	F.B.	{ 岸	本 兄下	0 0
H.B.	{ 田辰堀	中馬田	0 0	H.B.	{ 堀辰田	田馬中	0 0
F.W.	{ 山岸米須重	本 崎弟谷賀森	0	F.W.	{ 山岸米別須	本 崎弟谷所賀	0
			高師				慶大



十三会「アズサ」の写真

上 本 原 藤 広 村 生 村 木 井
 (亡) 部 長 (亡) (亡)

並 藤 横 山
 川 本 山 田

大正十三年

22 G.K. 13
 帝 2 C.K. 6 帝
 大 2 F.K. 1
 0 P.K. 0

G.K. 村上 2
 F.B. { 朝生 1 1
 山本 ||
 3 1
 H.B. { 小村 4
 杉野
 鈴木
 F.W. { 中村 高
 正木 師
 岸本
 中島
 塩原

26 G.K. 35
 帝 12 C.K. 3 帝
 大 ? F.K. 3
 0 P.K. 0

G.K. 村上 1
 F.B. { 朝生 1 0
 山本 ||
 1 0
 H.B. { 小村 1
 杉野
 林
 F.W. { 中村 慶
 岸本 大
 鈴木 大
 中島
 塩原

8 G.K. 16
 帝 5 C.K. 5 帝
 大 4 F.K. 2
 0 P.K. 0

G.K. 村上 4
 F.B. { 杉野 1 3
 林 ||
 1 1
 H.B. { 小村 2
 山本
 鈴木
 F.W. { 中村 早
 正木 大
 岸本
 中島
 塩原

大正十四年

9 G.K. 2
 帝 3 C.K. 4 帝
 大 2 F.K. 0
 0 P.K. 0

G.K. 中島(健) 1
 F.B. { 山本 1 0
 内田 ||
 0 1
 H.B. { 坂本 1
 杉野
 鈴木
 F.W. { 中村 高
 野島
 中島
 竹腰
 岸本

11 G.K. 25
 帝 5 C.K. 6 帝
 大 3 F.K. 4
 0 P.K. 0

G.K. 村上 3
 F.B. { 小島 0 3
 内田 ||
 0 0
 H.B. { 坂本 0
 杉野
 山本
 F.W. { 中村 早
 野島 大
 中島
 竹腰
 川中

7 G.K. 22
 帝 7 C.K. 3 帝
 大 4 F.K. 3
 0 P.K. 0

G.K. 村上 3
 F.B. { 小島 2 1
 内田 ||
 0 0
 H.B. { 坂本 0
 杉野
 山本
 F.W. { 岡本 法
 野島 政
 中島
 竹腰
 川中

6 G.K. 15
 帝 3 C.K. 1 帝
 大 0 F.K. 1
 0 P.K. 0

G.K. 村上 0
 F.B. { 小島 0 0
 内田 ||
 1 1
 H.B. { 坂本 2
 杉野
 山本
 F.W. { 中村 高
 野島 師
 中島
 竹腰
 川中

	23 G.K.	27	
帝	4 C.K.	6	帝
大	2 F.K.	1	大
	0 P.K.	0	
<hr/>			
G.K.	近藤	3	
F.B.	{ 朝生 岸山	2 1 0 1	
H.B.	{ 萩原 杉野 乘富	1	高
F.W.	{ 伊藤 鈴木 竹腰 中島 安東		師

	12 G.K.	31	
帝	9 C.K.	1	帝
大	1 F.K.	8	大
	0 P.K.	0	
<hr/>			
G.K.	近藤	5	
F.B.	{ 朝生 岸山	4 1 0 0	
H.B.	{ 鈴木 杉野 乘富	0	農
F.W.	{ 伊藤 鈴木 竹腰 中島 安東		大

	8 G.K.	18	
帝	3 C.K.	3	帝
大	F.K.		大
	0 P.K.	0	
<hr/>			
G.K.	近藤	3	
F.B.	{ 武安 岸山	1 2 0 0	
H.B.	{ 萩原 杉野 鈴木嘉	0	法
F.W.	{ 野島 鈴木駿 竹腰 中島 安東		政

	7 G.K.	12	
帝	1 C.K.	7	帝
大	3 F.K.	1	大
	0 P.K.	0	
<hr/>			
G.K.	近藤	1	
F.B.	{ 渡辺 岸本	1	
H.B.	{ 萩原 鈴木(嘉) 乘富	1	高
F.W.	{ 伊藤 鈴木駿 竹腰 中島 安東		高

	12 G.K.	22	
帝	5 C.K.	1	帝
大	1 F.K.	4	大
	0 P.K.	0	
<hr/>			
G.K.	近藤	1	
F.B.	{ 岸山 朝生	0 1 0 0	
H.B.	{ 萩原 杉野 武安	0	早
F.W.	{ 伊藤 鈴木 竹腰 中島 安東		大

16 G.K. 25		帝
帝	6 C.K. 5	帝
大	1 F.K. 0	大
	P.K.	
<hr/>		
G.K.	奥野	2
F.B.	{ 林岸山	
		0
H.B.	{ 萩原山町	早
	{ 青大	大
F.W.	{ 細野井島	
	{ 中島腰木	

14 G.K. 42		帝
帝	10 C.K. 2	帝
大	5 F.K. 2	大
	P.K.	
<hr/>		
G.K.	奥野	2
F.B.	{ 林岸山	
		1
H.B.	{ 萩原山町	高
	{ 青大	師
F.W.	{ 細野井島	
	{ 中島腰木	

27 G.K. 41		帝
帝	7 C.K. 3	帝
大	2 F.K. 3	大
	P.K.	
<hr/>		
G.K.	近藤	3
F.B.	{ 林岸山	
		1
H.B.	{ 萩原山町	一
	{ 青大	高
F.W.	{ 細野井島	
	{ 中島腰木	

11 G.K. 29		帝
帝	4 C.K. 1	帝
大	0 F.K. 2	大
	P.K.	
<hr/>		
G.K.	奥野	4
F.B.	{ 林岸山	2 2
		1 0
H.B.	{ 萩原山町	1
	{ 青大	法
F.W.	{ 細野井島	政
	{ 中島腰木	

15 G.K. 31		帝
帝	6 C.K. 2	帝
大	7 F.K. 6	大
	1 P.K. 0	
<hr/>		
G.K.	奥野	7
F.B.	{ 林岸山	
		0
H.B.	{ 萩原山町	慶
	{ 青大	応
F.W.	{ 細野井島	
	{ 中島腰木	

9 G.K.	43	
帝	8 C.K.	3
大	1 F.K.	2
	P.K.	
<hr/>		
G.K.	近藤	5
F.B.	{ 船岡 小川	3 2 0 0
H.B.	{ 齊藤 竹腰 大町	0
F.W.	{ 春山 高篠 若若 鈴木	高師

11 G.K.	36	
帝	13 C.K.	4
大	0 F.K.	0
	P.K.	
<hr/>		
G.K.	近藤	5
F.B.	{ 船岡 小川	4 1 2 0
H.B.	{ 齊藤 竹腰 大町	2
F.W.	{ 春山 高篠 若若 鈴木	慶応

13 G.K.	23	
帝	10 C.K.	3
大	3 F.K.	3
	P.K.	
<hr/>		
G.K.	近藤	11
F.B.	{ 船岡 岸山	7 4 0 0
H.B.	{ 齊藤 竹腰 大町	0
F.W.	{ 春山 高篠 若若 鈴木	明大

25 G.K.	18	
帝	6 C.K.	7
大	4 F.K.	3
	P.K.	
<hr/>		
G.K.	近藤	3
F.B.	{ 船岡 岸山	0 3 1 0
H.B.	{ 齊藤 竹新 腰莊	1
F.W.	{ 春山 高篠 若若 鈴木	早大

14 G.K.	30	
帝	10 C.K.	3
大	0 F.K.	1
	P.K.	
<hr/>		
G.K.	近藤	9
F.B.	{ 船岡 岸山	2 7 1 0
H.B.	{ 齊藤 竹新 腰莊	1
F.W.	{ 中島 高篠 若若 鈴木	一高

15 G.K. 30		帝	11 C.K. 1	帝
大 3 F.K. 6		大	1 P.K. 0	大
G.K. 奥野		3		
F.B.	{ 船岸 岡山	2 1		
		1 1		
H.B.	{ 野沢 内町	2		
	{ 竹大			
		慶		
F.W.	{ 高山 島林	応		
	{ 篠手 若春			

5 G.K. 22		帝	12 C.K. 2	帝
大 4 F.K. 2		大	P.K.	大
G.K. 阿部		7		
F.B.	{ 船岸 岡山	6 1		
		0 0		
H.B.	{ 野沢 内町	0		
	{ 竹大			
		農		
F.W.	{ 篠山 島林	大		
	{ 高山 若春			

9 G.K. 36		帝	8 C.K. 4	帝
大 3 F.K. 1		大	P.K.	大
G.K. 奥野		7		
F.B.	{ 船岸 岡山	3 4		
		0 0		
H.B.	{ 野沢 内町	0		
	{ 竹大			
		文		
F.W.	{ 高山 島林	理		
	{ 篠手 若春	大		

16 G.K. 28		帝	8 C.K. 4	帝
大 2 F.K. 2		大	1 P.K. 0	大
G.K. 阿部		3		
F.B.	{ 船岸 岡山	1 2		
		0 2		
H.B.	{ 野沢 内町	2		
	{ 竹大			
		関		
F.W.	{ 高山 島林	学		
	{ 篠手 若春			

12 G.K. 20		帝	3 C.K. 2	帝
大 12 F.K. 5		大	P.K.	大
G.K. 奥野		6		
F.B.	{ 船岸 岡山	1 5		
		1 2		
H.B.	{ 野沢 内町	3		
	{ 竹大			
		早		
F.W.	{ 高山 島林	大		
	{ 篠手 若春			

5 G.K. 23		帝	13 C.K. 1	帝
大 8 F.K. 3		大	2 P.K. 0	大
G.K. 奥野		7		
F.B.	{ 船岸 岡山	5 2		
		1 0		
H.B.	{ 野沢 内町	1		
	{ 竹大			
		明		
F.W.	{ 高山 島林	大		
	{ 篠手 若春			

十ノ外

36 G.K. 13		帝	
帝	3 C.K. 3	帝	
大	6 F.K. 2	大	
	0 P.K. 0		
<hr/>			
G.K.	阿部	2	
F.B.	{ 船岡	2 0	
	{ 林		
		2 1	
H.B.	{ 野沢	3	
	{ 竹内		
	{ 斉藤		
F.W.	{ 三宅	早	
	{ 篠島	大	
	{ 手島		
	{ 高山		
	{ 出浦		

11 G.K. 24		帝	
帝	11 C.K. 4	帝	
大	3 F.K. 3	大	
	0 P.K. 0		
<hr/>			
G.K.	阿部	3	
F.B.	{ 船岡	2 1	
	{ 近藤		
		0 1	
H.B.	{ 野沢	1	
	{ 竹内		
	{ 斉藤		
F.W.	{ 三宅	慶	
	{ 篠島	大	
	{ 手島		
	{ 若林		
	{ 出浦		

11 G.K. 29		帝	
帝	12 C.K. 1	帝	
大	5 F.K. 5	大	
	0 P.K. 0		
<hr/>			
G.K.	阿部	3	
F.B.	{ 船岡	2 1	
	{ 山田		
		0 1	
H.B.	{ 野沢	1	
	{ 竹内		
	{ 斉藤		
F.W.	{ 三宅	文	
	{ 篠島	理	
	{ 内藤	大	
	{ 若林		
	{ 生島		

王座決定戦

8 G.K. 19		帝	
帝	4 C.K. 2	帝	
大	3 F.K. 2	大	
	0 P.K. 0		
<hr/>			
G.K.	阿部	2	
F.B.	{ 船岡	0 2	
	{ 竹内		
		0 1	
H.B.	{ 林野	1	
	{ 沢藤		
	{ 斉藤		
F.W.	{ 三宅	京	
	{ 篠島	大	
	{ 手島		
	{ 内藤		
	{ 鈴木		

優勝決定戦

24 G.K. 15		帝	
帝	3 C.K. 8	帝	
大	3 F.K. 3	大	
	0 P.K. 0		
<hr/>			
G.K.	阿部	1	
F.B.	{ 船岡	0 1	
	{ 竹内		
		0 0	
H.B.	{ 林野	0	
	{ 沢藤		
	{ 斉藤		
F.W.	{ 三宅	早	
	{ 篠島	大	
	{ 手島		
	{ 内藤		
	{ 鈴木		

7 G.K. 26		帝	
帝	11 C.K. 3	帝	
大	0 F.K. 0	大	
	0 P.K. 0		
<hr/>			
G.K.	阿部	7	
F.B.	{ 船岡	3 4	
	{ 竹内		
		0 0	
H.B.	{ 林野	0	
	{ 沢藤		
	{ 斉藤		
F.W.	{ 三宅	一	
	{ 篠島	高	
	{ 手島		
	{ 内藤		
	{ 鈴木		

12 G.K. 26
帝 7 C.K. 1
大 1 F.K. 4
0 P.K. 0

G.K. 阿部 8
F.B. { 田村 4 4
竹内 ||
0 0
H.B. { 林 沢
野 沢 0
生 島
F.W. { 高 山
内 藤
手 島
藤 岡
中 村

26 G.K. 19
帝 8 C.K. 4
大 6 F.K. 2
0 P.K. 0

G.K. 阿部 2
F.B. { 田村 1 1
竹内 ||
1 0
H.B. { 林 沢
野 沢 1
生 島
F.W. { 高 山
和 田
手 島
藤 岡
中 村

5 G.K. 41
帝 20 C.K. 5
大 2 F.K. 10
0 P.K. 0

G.K. 阿部 9
F.B. { 竹内 5 4
大石 ||
0 1
H.B. { 林 沢
野 沢 1
生 島
F.W. { 赤 松
和 田
手 島
藤 岡
中 村

17 G.K. 19
帝 1 C.K. 6
大 2 F.K. 2
0 P.K. 0

G.K. 阿部 2
F.B. { 田村 1 1
竹内 ||
2 0
H.B. { 林 沢
野 沢 2
木 村
F.W. { 高 山
和 田
手 島
内 藤
中 村

15 G.K. 21
帝 8 C.K. 6
大 3 F.K. 1
0 P.K. 0

G.K. 阿部 3
F.B. { 田村 2 1
竹内 ||
1 0
H.B. { 林 沢
野 沢 1
木 村
F.W. { 高 山
和 田
手 島
内 藤
中 村

13 G.K. 31
帝 8 C.K. 11
大 7 F.K. 3
0 P.K. 0

G.K. 阿部 4
F.B. { 田村 3 1
竹内 ||
0 1
H.B. { 林 沢
野 沢 1
木 村
F.W. { 高 山
和 田
手 島
内 藤
中 村

	29 G.K. 25	
帝	6 C.K. 11	帝
大	1 F.K. 0	大
	0 P.K. 0	
<hr/>		
G.K.	阿部	2
F.B.	{ 田村 八卷	1 1 0 1
H.B.	{ 山田 高山村	1
F.W.	{ 小川 和田高地	農大

	20 G.K. 29	
帝	4 C.K. 13	帝
大	3 F.K. 2	大
	0 P.K. 0	
<hr/>		
G.K.	阿部	5
F.B.	{ 田村 市川	2 3 1 2
H.B.	{ 江崎 高山村	3
F.W.	{ 小川 和田高地	文理大

	6 G.K. 23	
帝	14 C.K. 0	帝
大	4 F.K. 0	大
	0 P.K. 0	
<hr/>		
G.K.	大村	4
F.B.	{ 田村 市川	4 0 2 1
H.B.	{ 林高 木山村	3
F.W.	{ 小川 和田高地	一高

	23 G.K. 18	
帝	8 C.K. 13	帝
大	4 F.K. 8	大
	1 P.K. 0	
<hr/>		
G.K.	大村	0
F.B.	{ 田村 市川	0 0 2 3
H.B.	{ 江崎 横田村	5
F.W.	{ 小川 和田高地	慶応

	22 G.K. 18	
帝	8 C.K. 3	帝
大	2 F.K. 3	大
	0 P.K. 0	
<hr/>		
G.K.	大村	0
F.B.	{ 田村 市川	0 0 1 4
H.B.	{ 江崎 高山村	5
F.W.	{ 横田 和田高地	早大

14 G.K. 33
 帝 6 C.K. 3
 大 5 F.K. 4
 1 P.K. 0

G.K. 宮 沢 3
 F.B. { 荻 原 田 1 2
 { 原 田 1 1
 H.B. { 江 崎 山 村 2
 { 高 木 村
 F.W. { 和 田 内 原 地 田
 { 宮 川 菊 德

帝 大

3
 1 2
 1 1
 2
 農
 大

5 G.K. 25
 帝 12 C.K. 1
 大 9 F.K. 1
 0 P.K. 0

G.K. 宮 沢 9
 F.B. { 荻 原 田 8 1
 { 原 田 1 1
 H.B. { 江 崎 山 村 2
 { 高 木 村
 F.W. { 和 田 原 藤 地 田
 { 川 佐 菊 德

帝 大

9
 8 1
 1 1
 2
 文
 理
 大

7 G.K. 30
 帝 5 C.K. 1
 大 3 F.K. 1
 1 P.K. 0

G.K. 宮 沢 7
 F.B. { 荻 原 田 3 4
 { 原 田 0 0
 H.B. { 江 崎 山 村 0
 { 高 木 村
 F.W. { 和 田 原 藤 地 田
 { 川 佐 菊 德

帝 大

7
 3 4
 0 0
 0
 成
 城
 高

21 G.K. 11
 帝 6 C.K. 4
 大 7 F.K. 1
 0 P.K. 1

G.K. 宮 沢 0
 F.B. { 荻 原 田 0 0
 { 原 田 1 1
 H.B. { 江 崎 山 村 2
 { 高 木 村
 F.W. { 和 田 原 藤 地 田
 { 川 佐 菊 德

帝 大

0
 0 0
 1 1
 2
 早
 大

17 G.K. 23
 帝 7 C.K. 5
 大 7 F.K. 6
 0 P.K. 0

G.K. 大 村 3
 F.B. { 江 崎 山 村 2 2
 { 原 田 1 1
 { 高 木 村 4 0
 H.B. { 江 崎 山 村 4
 { 高 木 村
 F.W. { 和 田 原 藤 地 田
 { 川 佐 菊 德

帝 大

3
 2 2
 1 1
 4 0
 4
 慶
 応

5 G.K. 21
 帝 13 C.K. 4
 大 7 F.K. 1
 0 P.K. 0

G.K. 大村 1
 F.B. { 八 卷 1 0
 { 近 石 ||
 1 1
 H.B. { 大 内
 { 荻 原 2
 { 江 崎
 F.W. { 太 田 立
 { 若 林 教
 { 佐 藤
 { 川 原
 { 德 田

11 G.K. 21
 帝 11 C.K. 4
 大 3 F.K. 2
 0 P.K. 0

G.K. 飯田 1
 F.B. { 八 卷 0 1
 { 近 石 ||
 2 0
 H.B. { 大 内
 { 荻 原 2
 { 江 崎
 F.W. { 潮 田 農
 { 若 林 大
 { 太 田
 { 川 原
 { 德 田

18 G.K. 12
 帝 10 C.K. 8
 大 3 F.K. 2
 0 P.K. 0

G.K. 飯田 4
 F.B. { 八 卷 1 3
 { 近 石 ||
 2 1
 H.B. { 大 内
 { 荻 原 3
 { 長
 F.W. { 潮 田 文
 { 若 林 理
 { 太 田 大
 { 川 原
 { 德 田

20 G.K. 17
 帝 8 C.K. 8
 大 2 F.K. 3
 0 P.K. 0

G.K. 宮沢 0
 F.B. { 荻 原 0 0
 { 八 卷 ||
 3 3
 H.B. { 近 石
 { 江 崎 6
 { 松 浦
 F.W. { 朝 田 慶
 { 若 林 応
 { 太 田
 { 川 原
 { 寺 沢

17 G.K. 15
 帝 5 C.K. 3
 大 2 F.K. 2
 0 P.K. 0

G.K. 飯田 1
 F.B. { 八 卷 1 0
 { 近 石 ||
 2 4
 H.B. { 江 崎
 { 荻 原 6
 { 松 浦
 F.W. { 潮 田 早
 { 若 林 大
 { 太 田
 { 川 原
 { 德 田

	17 G.K.	15	
帝	8 C.K.	7	帝
大	8 F.K.	4	
	1 P.K.	0	大
<hr/>			
G.K.	川島	2	
F.B.	{ 荻原 藤岡	2 0 0 2	
H.B.	{ 大内 種田 森	2	
F.W.	{ 潮田 川原 高橋 冲山 横山	文 理 大	

	18 G.K.	21	
帝	10 C.K.	11	帝
大	5 G.K.	4	
	0 P.K.	0	大
<hr/>			
G.K.	川島	5	
F.B.	{ 荻原 藤岡	2 3 1 1	
H.B.	{ 大内 種田 森	2	
F.W.	{ 潮田 川原 高橋 冲山 横山	慶 応	

	9 G.K.	12	
帝	9 C.K.	6	帝
大	6 F.K.	8	
	1 P.K.	0	大
<hr/>			
G.K.	川島	6	
F.B.	{ 荻原 藤岡	4 2 0 0	
H.B.	{ 森田 種宮 沢	0	
F.W.	{ 潮田 川原 高橋 冲川 小山	立 教	

	18 G.K.	23	
帝	13 C.K.	4	帝
大	6 F.K.	4	
	0 P.K.	0	大
<hr/>			
G.K.	川島	5	
F.B.	{ 荻原 藤田	3 2 1 1	
H.B.	{ 大内 種田 森	2	
F.W.	{ 潮田 川原 高橋 冲山 横山	商 大	

	26 G.K.	17	
帝	7 C.K.	7	帝
大	6 F.K.	1	
	0 P.K.	0	大
<hr/>			
G.K.	川島	2	
F.B.	{ 荻原 藤岡	2 0 2 2	
H.B.	{ 大内 種田 森	4	
F.W.	{ 潮田 川原 高橋 冲山 横山	早 大	

14 G.K. 33
 帝 6 C.K. 3
 大 5 F.K. 4
 1 P.K. 0

G.K. 宮 沢 3
 F.B. { 荻 原 田 1 2
 { 原 田 1 1
 H.B. { 江 崎 2
 { 高 山 村
 { 木 村
 F.W. { 和 田
 { 宮 川 原 地 田
 { 菊 德 田

帝 大

3
 1 2
 1 1
 2
 農 大

5 G.K. 25
 帝 12 C.K. 1
 大 9 F.K. 1
 0 P.K. 0

G.K. 宮 沢 9
 F.B. { 荻 原 田 8 1
 { 原 田 1 1
 H.B. { 江 崎 2
 { 高 山 村
 { 木 村
 F.W. { 和 田
 { 川 原 藤 地 田
 { 佐 菊 德 田

帝 大

9
 8 1
 1 1
 2
 文 理 大

7 G.K. 30
 帝 5 C.K. 1
 大 3 F.K. 1
 1 P.K. 0

G.K. 宮 沢 7
 F.B. { 荻 原 田 3 4
 { 原 田 0 0
 H.B. { 江 崎 0
 { 高 山 村
 { 木 村
 F.W. { 和 田
 { 川 原 藤 地 田
 { 佐 菊 德 田

帝 大

7
 3 4
 0 0
 0
 成 城 高

21 G.K. 11
 帝 6 C.K. 4
 大 7 F.K. 1
 0 P.K. 1

G.K. 宮 沢 0
 F.B. { 荻 原 田 0 0
 { 原 田 1 1
 H.B. { 江 崎 2
 { 高 山 村
 { 木 村
 F.W. { 和 田
 { 川 原 藤 地 田
 { 佐 菊 德 田

帝 大

0
 0 0
 1 1
 2
 早 大

17 G.K. 23
 帝 7 C.K. 5
 大 7 F.K. 6
 0 P.K. 0

G.K. 大 村 3
 F.B. { 江 崎 2 2
 { 原 田 1 1
 { 原 田 4 0
 H.B. { 江 崎 4
 { 高 山 村
 { 木 村
 F.W. { 和 田
 { 川 原 藤 地 田
 { 佐 菊 德 田

帝 大

3
 2 2
 4 0
 4
 慶 応

関東大学リーグ成績

上位10校の過去の歩み一覧

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	1位	2位	3位	4位
大正11年	高師	東大	早高	商大								
13	早大	東大	高師	法政	慶大	農大			一高	明大	外語	青学
14	高師	東大	早大	法政	一高	慶大			農大	明大	外語	青学
15	東大	法政	早大	高師	一高	農大			慶大	明大	商大	青学
昭和2	東大	慶大	高師	早大	一高	法政			明大	農大	明大	商大
3	東大	慶大	早大	明大	高師	一高			農大	法政	東高	商大
4	東大	明大	早大	慶大	文理	農大			一高	東高	法政	商大
5	東大	早大	慶大	一高	文理	一			農大	東高	成城	法政
6	東大	慶大	早大	一高	農大	明大			文理	法政	成城	東高
7	慶大	早大	東大	文理	農大	一高			成城	法政	東高	立大
8	早大	慶大	東大	文理	農大	成城			立大	法政	明大	東高
9	早慶同位	立大	東大	文理	農大	立大			商大	商船	明大	東高
10	早大	東大	文理	慶大	商大	立大			農大	明大	拓大	法政
11	早大	慶大	文理	東大	商大	農大			明大	立大	拓大	法政
12	慶大	東大	早大	明大	文理	商大			農大	立大	法政	慈大
13	慶大	東大	早大	農大	明大	文理			商大	立大	千葉	法政
14	慶大	早大	東大	明大	商大	農大			文理	立大	千葉	法政
15	慶大	早慶同位	東文同位	東文同位	明大				立大	千葉	法政	拓大
16	東早同位	慶大	立大	文理	立大	文理			明大	工大	拓大	慈大
17	東大	早大	明大	慶大	立大	商大						
21	早大	東大	文理	慶大	差大	立大			千医	慈大	明大	法政
22	早大	慶大	東大	文理	千医	商大			明大	立大	法政	慈大
23	東大	文理	早大	慶大	明大	千医			立大	法政	中大	慈大
24	早大	立大	慶大	東大	教大	明大			中大			
25	早大	慶大	教大	立大	東大	中大			明大	慈大	千葉	一橋
26	早大	慶大	明大	立大	中大	東大	教大		工大	法政	千葉	一橋
27	慶大	中大	早大	立大	明大	教大	東大		青学	法政	工大	一橋
28	教大	中大	立大	慶大	早大	東大	明大		法政	農大		
29	立大	早大	慶大	教大	中大	明大	東大		法政			
30	早大	教大	立大	慶大	中大	明大	東大		農大	法政	日大	学芸
31	早大	立大	慶大	中大	明大	農大	教大	東大	法政	日大	日大	学芸
32	早大	立大	中大	農大	明大	慶大	教大	東大	日大	東大	上智	
33	早大	慶大	立大	明大	中大	教大	農大	法政	日大	東大	防大	
34	立大	早大	中大	慶大	明大	農大	教大	法政	東大	日大	防大	日大
35	早大	中大	明大	立大	農大	教大	慶大	法政	成城	防大	日大	東・日大
36	中大	明大	早大	立大	慶大	教大	法政	農大	日大	東大	上智	成・武
37	中大	明大	早大	立大	教大	日大	慶大	法政	東大	成城	上智	防大
38	早大	立大	明大	中大	日大	教大	慶大	法政	日大	上智	東大	成城

尚、昭和18、19、20年はリーグ戦は有りません

インターハイ参加校一覧表 (調査完了分)

大学
正校
9創
年立

大正	回数	一	二	三	四	五	六	七	八	北大	弘大	山形	水戸	浦和	早稲	明大	法政	商大	東大	成武	成府	新富	富山	松本	静岡	大姫	松山	山梨	松山	佐賀	京大	城大	参加数
12	1	□						○	○			□		○	□										-	□	△						8
13	2	□							△					○	□	○								□	-	○	□	□					9
14	3	□						□	○	□		□	□	□	□	□								□	-	○	○						13
15	4	□	□					○	□	□		○	□	□	□	□	□							□	□		□	△	□	□			19
昭和	-																																-
3	5	□	□					□	□	□		□	○	□	□			□	□	□	□			□	□		□	○	○	△			19
4	6	○	□					□	○	□		□	○	□	□			□	□	□	□			□	□		□	□	□	□			19
5	7	○	□					□	□	□		□	○	□	□			□	□	□	□			□	□		□	△	□	□			23
6	8	○	□					□	○	□		□	□	□	□			○	○	□				□	□		□	□	□	□			19
7	9	○	□					□	□	□		□	○	□	□			△	○	□				□	□		□	□	□	□			22
8	10	□						□	○	□		□	□	□	□			□	□	□				□	□		□	○	△	□			21
9	11	□	□					□	□	□		□	○	□	□			△	□	□				□	□		□	□	□	□			24
10	12	○	○					□	□	□		□	□	□	□			□	□	□				□	□		□	□	□	□			22
11	13	□	△					□	○	□		□	□	□	□			○	□	□				□	□		□	□	□	□			24
12	14	○	□					□	□	□		□	□	□	□			□	○	□				□	□		□	□	□	□			25
13	15	□	□					□	□	□		□	□	□	□			△	○	□				□	□		□	○	□	□			27
14	16	□	□					□	□	□		□	□	□	□			□	□	□				□	□		□	○	□	□			25
15	17	□	□					□	□	□		□	□	□	□			□	□	□				□	□		□	○	○	□	□		27
16	18	□	□					□	□	□		□	□	□	□			□	□	□				□	□		□	□	△	□	□		26
17	19	□	□					□	□	□		□	□	□	□			□	□	□				□	□		□	○	□	□	□		25
18	-																																-
19	-																																-
20	-																																-
21	20	△						○	○			○																					4
22	21	○																									○						8
23	22	□	□					□	□			□	□											□	□	□	△	□	○	□	□		22

主催 才4回まで 東京帝国大学 蹴球部

才5回から 東京大学ア式蹴球聯盟

○印 優勝 △印 準優勝
○印 三四位 □印 申込だけで不参

岸本英夫さんを悼む

新田純興

部史編纂の仕事をいよいよ開始するという相談のとき、有志のクラブから部の創立への推移は岸本さんに聞けと推薦した。

安達君がすぐ、東大図書館へ連絡すると、入院中で面会謝絶と判った。野津さんあたりとも話し合い御回復を祈っていたが遂に一月廿五日六十才の一生を終えられた。残念だ。

学者として、文化人として、精神家として最も勝れておられただけに国家的な損失だ。

私と岸本さんとの関係はたゞサッカーだけに限られてはいたが、大正三・四年の頃白房三角帽の小学生として兄さんの武夫君のいる校庭へ来て一諸にボールを蹴った時に始まり、六高生の頃佐渡の私の所へ、才一回全国高校選手大会への参加を知らせて呉れたこと、初期の学生リーグ戦や、明治神宮大会の試合には、野津岸本兄弟の三人組の審判が活躍したこと、東大の単独上海遠征のことで、東大新聞に自ら筆をとっておられる中に「夕陽が落ち、御殿下のあたりが見えなくなる迄、ゴールポストの横で野津さんと東大サッカー将米の夢を語り合った……」ということ、ベルリンオリンピックへの選手派遣資金造成のため、日比谷公会堂で才九シンフォニー演奏会をやった前後のこと、日本蹴球協会創立満四十年を祝う会合で昔を語られたこと（此の時は左の額に白い絆創膏を貼って皮膚ガンと戦って居られたことがスナップ写真にもよく現れている）昨秋の東京スポーツ大会に際し「お手伝いはしたいのだが、アメリカへ行っている時期なので……」とわざわざハガキを下さったなど、数え上げるときりがない。

せめて此の部史を御霊前に捧げ、東大蹴球部のために尽して下さった事に感謝すると共に関係者一同の記憶にも残したい。

略歴

高師附属中学から六高に学び、大正十二年東大文学部に入る。サッカー歴は、兄・武夫氏の影響で中学時代にはじまり、六高時代インターハイに出場、東大時代は主に十三会の方で活躍された。岸本兄弟の名は当時蹴球界で



誉れ高いものであった。昭和二十二年文学部宗教学科主任教授に就任、今日に至るまで日本宗教学会会長、米国スタンフォード・プリンストン両大学客員教授、ユネスコ文化使節などの責を



昭和36年、協会創立満四十周年祝賀の集い

正面左から 岸本氏 乘富氏 竹腰氏

大改造を完成された功績は非常に大きい。昭和二十九年、スタンプオールド大学教授の時、頭皮膚腫瘍が発見され、余命半年と宣告されるや、直ちにその半年間の仕事の計画を立てられ、病魔と闘いながら一層仕事は激しさを加え、人間の限界を越える闘志と責任感の中にその六十才の生涯を閉じた。

岸 本 英 夫

茂 森 薫

近頃は新聞の三面に出る黒棒の人の名に目がつき易く「あの人も」
と思うことの多くなつた私が、一月の下旬、ある朝、不図そこに岸
本という名を見出し、何所にもある姓とばかり一応は見過ごしたも
のの、何となく気にかゝるまゝ、めがねをとって見たところ、やは
りそれは岸本英夫と読め、略歴によると正真正銘、本人であつたこ
とに「とうとうきたか」と何時かはと思つていたその不吉な予想が、
現実として眼前にあらわれた瞬間、やはり私はあたかも禅寺で櫛の
棒の一打を喰わされた気がした。それは惜しいとか悲しいとかい
うものでなく、彼が我国の宗教学界に於ける才一人者であろうとも、
東大総合図書館長であろうとも、それはどうでもよいことであり、
私個人にあつては先づ東大サッカー部の創業期に於ける彼と再び語

る日のない痛恨さと、学としての宗教を實踐した彼の勇気知らざ
れた心のどよめきともいふべきものであらうか。

私は、毎年、三月十五日の朝になると、彼を想い出す。それは大
正十三年のその朝、千駄木町に彼が私の寝込みを襲つて、「今日の
試合には是非とも出る」と無理矢理に連れて行かれた日であり、爾
来四十年になる今日もその日の彼を。

黒の制服（当時の学生服は紺サージが多かつた）を、抜ける様な
色白の彼によく似合わせ、角帽の下からは稍々長くのびた（当時、
彼は丸刈りであつた）柔い髪をのぞかせて、たしかどちらかの頬に
時々軽い笑窪を浮べた彼のその頃流行の軽い蹴球靴を新聞紙（それ
も萬朝報であつたことまで覚えてゐる）で包み、更らに紫縮緬の風
呂敷に固く包んで、小脇にもつた姿と、ゴール前の混戦のとき、一
寸腰をおとして得意の両足をバタバタとめまぐるしく動かし乍ら、
一重脛の凄悍な背に、一寸ひらいた口から大型の門歯を二つ見せて、
シュートにかゝるときの動作は、永久に私の脛から消え去らぬであ
らう。

さて、その日の試合は、たしか水戸高等学校であつたかと思う。
非常に寒かつた記憶以外、今はなにもない。

附属を出た彼は、大正十二年春、才六高等学校理科甲類を卒業し、
文学部宗教学科に入った。私は、その以前、才一回全国高等学校蹴

球大会で、すでに馴染みであるので、すぐ、帝大ア式蹴球部員（あゝ、何となつかしいひゞきの名であることか）として同志となった。

当時、大正十二年のラインアップは新田さんを別格とし、先輩野津さんは吾々に「ハツバ」をかける火元となり、（茶目気の彼は、

野津さんと呼ぶに、親指を出してオヤダマと言っていた）今で謂う監督である。主将を長身の紳士、三年の山崎幸一郎さんとし岸本の兄さんでバイオリンの名手、武夫さん（卒業後他界）がフルバック、重戦車の別所さんがフォワードを受持ち、フルバックには辰馬さんと折下が時々顔を連ねる。而らばフォワードの岸本を豆戦車とも呼ぶべきか、彼を中心に須賀、植村と若手が並んで、お嬢さん芸をやる堀田はたまにフルバック、茂森は下手だから、まあハーフの右位でもといったあんばい。それに出席率満点の藤本という仁、同下山君を加え、不足のときやってくるのが、木村正彦であり、出田節雄であった。

グラウンドは主として一高と附属のあの砂利の多い校庭によった

（大学の校庭はグラウンドではなかった）。冬の午後、一高で練習を終え、盛土のスタンドは桜の樹蔭で震えながらユニフォームを着換えるとき、霞に煙つた空に出た月を見て、しんとした時計台の下を玄關に出、本郷通りを歩き青木堂でコーヒーでも飲んでわかる。附属の校庭では、体の小さいコマシヤクした生徒相手に主将も我々も苦戦するが、岸本は附属の土と生徒に馴れて居る故か巧みにさばく点、憎らしいほど美事であった。そして、その帰途は程近い彼の

家（岸本能武太―英学者―と門標が読める）に度々寄ったもので、一度その二階で歌留多取りをやったとき、地方出の者どもは啞然として、彼の流暢な読みと手捌きに目を見はる許りと50一幕もあつた。

当時、長袖にカウス付きのユニフォームは半身を、ストッキングは全部をライトブルーとし、胸のマークはT E U を楕円で囲んだもので、誰にもよく似合ったが稍々上品過ぎたかも知れぬ。

その間、我々は関東大震災に遭い、岸本家からよく見られた、上層になる程畳数の多い名物の建物も敢えなく潰え、大学の構内も荒廃に帰して当分閉鎖された。

この頃、帝大ア式蹴球部として、試合に対する考え方は R E C R E A T I O N が目的であり、それが競技対抗的になることは考えてもみなかったし、出来もしなかった。ところが先輩の画策した全国高等学校ア式蹴球大会のもたらした結果は当然のことながら、それに出場した選手で帝大に入るものが次々に増して、今の言葉で、これはイケさうになってきた。

こゝに着目した張本人は彼と言ってよろしい。従って今日の東大サッカーを云々するとき、彼も知らない者はモグリであり、初期の東大サッカーの歴史は即ち岸本英夫のサッカー遍歴につながる。

即ち、彼は先づ大正十三年度に入學した者を統合し（それ以前のものはいザナギノミコトらの天地混沌たる時代の人で、彼によっては或はこゝで豊葦原瑞穂国を作らうとしたかも知れぬ）梓クラブな

るものをつくって（そこには通称トンチャン、ミツチャン、土井、

塩原、正木、潮、鈴木、村上、中村、山本、伊藤らが居り、卒業後、これらの人達はトサン一十三人会なるものを結成して居る。「あゝ、

彼らはどうしているだろうか」それは、戦後、岸本を彼の教室に訪ねるときのきまゝた話題でもあった）、今日で謂う才二軍的存在とした。では才一軍とは何を指すか。これが前述の昭和になって入学した全国高等学校選手の粒選り、つまり後輩に与えられた待遇であつた。彼はある西哲の言つた「後より来る者、常に偉大なり」と

いうことを、こゝに実行し、梓クラブをして、REORREATIO

Nの傍ら一軍の蔭に捨石的存在として、その練習相手たらしめた。

想うに、その梓という名の由来はロマンチックな高地梓川の「梓」でなく、梓号の「梓」ではなかつたか。それは私に若いときの彼が牛若丸を連想させ、楠正行の風格を想わせたからかも知れない。

その彼は、外見に似ず、内部にあるきびしさを包蔵して居り、これには私も時々負けた。例えば、六高理科甲類を卒えた者が、一旦理科系統は自己に不適だと知つたら、アツサリと大学は文学部を選び、試合でも斯うと計画したらチョットやソットで変更しない芯の強さである（これを山崎主将はうまくリードしていたが、蓋し、後年彼の学をして大成せしめたものと愚考する）。尚、ここに付記したいことは当時初代専任部長となつた末広恭二教授（それまでは末広徹太郎教授がラクビー部と兼務）はそのポケットマネーで梓クラブ全員のユニフォームを寄贈されたことで、これが当時の士気向上に

非常に役立った。

その梓クラブを亡き数に入れて羽搏たいた才一軍が帝大A・Bであり、これが今日の東大サツカーの先驅となるものである。

昨夏、大阪でこの梓クラブの面々が集り、談論風発したものゝ衰顔、白髪麻の如く、四十年の歳月を目のあたりに見る心地したのは私だけではあるまい。因に最近岸本教授にもその頃の梯がうすれて居ると見たのは私の僻目か。

x x x

さて、こゝに私は一人のサツカーには縁のない人をあげたい。その人は名を葉上照澄阿闍梨と言ひ、天台宗比叡山に住む。この人は彼と六高、帝大文学部を同年に卒え、伝教大師以来才二十八番目の修行をした人。そして、これらの人と同期の私は、学として岸本の智識と行としての阿闍梨の信仰を、也上比類なきものとして、光栄にも専知録にこの人らの名を入れていることをひそかな誇りとして居る。ところでつい先日迄、愚ろかな私は宗教学と信仰を別々に考えて居たところ、此度彼の晩年を知るに及んで、彼の行為は、その学を通じ、一つの信仰とも謂うべき心境にまで到着し、奇しくも葉上師の修めに行にも匹敵する渾然とした悟境と一致することを知つた事は、此度故人が私に残した大なる遺産とも申したく、詳しいことは、こゝに彼を評した毎日新聞の記事の一部抄録によりたい。

「一人の宗教学者が皮膚ガンを宣告されて十年、ガンに苦しみながら、立派な社会的活動をつどけ、ついにガンに感謝する心境に

なつて、やはりガンでたおれた。その人、岸本英夫氏は五十才でガンと宣告され、医師にあと半年といわれた時に、これからなすべき仕事の計画を立てた。そして、心境的にいえば、死期を宣告された絶望感から逃れるために、手負いのイノシシのように働くことを誓った。さて、幸いにも手術の経過も良かったため、昨年十二月、最後の病床につくまでは一進一退、意志力で肉体を鞭うつ日が続く。それははじめの死から目をそむけるための仕事に対する専心から、旅立つときの家人に対するさゝやかな別れに対する心構えとなり、更に人生最大の別れ、死の心の準備に連り、正に沈没に類する船の船長の如く、社会に対する責任感に生きる澄みきった心境となつていたようだ。米もし、ガンでなかつたら私はこの八年間、こんなに真剣な生活をする事はできなかったろう。米とは彼の死の直前に於ける敵に対する感謝であつた。これは、死によつて生を乱されなかつた一つの人間記録であるが私は更らに考えたい。それは死の宣告に感謝する心境こそ伝教大師の教えであり、不治の個疾を神に感謝した聖パウロの生涯にも匹敵するものかと。

明治の思想家、中江兆民は医者から死期を宣告されて半年たらずで「一年有半」を著わし、未だ死なず、続いて「続一年有半」を書

いて死んだ。又曾て黒沢監督の映画「いきる」が同じ様な意味で江湖の人々に感動を与えたことも想い出されるところである。

私が彼の性格は専門の学により、一脈の陽明学派に通ずるものになれたと見るは誤りか。世の中に信仰を説く人には一服の清涼剤に、又サッカーを愛する貴方がたにとり、これを彼のサッカー偏歴に於ける心構えにも通ずるものと思つてくれないだろうか。

今、私は彼に対し、最後に「何故、死んだのだ。岸本のバカ」と言わずに居られない。そして私に曾ての時代に、かかる人を知已にもち得たことを更めて神に感謝し、生涯の誇りもしたい。想えば、その時代は私にとり、一つのALT・HEIDELBERGでもあつた。

(三九・一・三〇)

ラベルが示す
レベルの高さ

タカラ
ビール

寶酒造株式会社



ビールを作つて四十年

ミクニ商店社長

梶田 房次郎

安達 | 何か古い、なるべく昔の、話をお聞かせねがたいの

ですが。

梶田さん | 何から話しましょうかね。

森 | 昔、ミカド商店というビールを売る店があったその

すが、その頃の話からでも。

梶田さん | そうすると大正十四年頃のことですね。

後藤 | その頃の試合は全部ミカドのビールを使っていたんで

すか。

梶田さん | そうですね。その頃はまだやってる所もないからね。

ミカドさんというのはコタツの中でポチポチ内職的に

縫う程度で、その頃はビールもそう出ないですよ。

やってるチームの数が少なかったですからね。

八田 | 別にビールを輸入したということはないんですか。

梶田さん | 輸入ということはないですね。まあ外国の人が持って

来ればこれは舶来のビールだということやっています

したが、……その頃、東大とか、高等師範、早稲田、

青山師範とか数える程しかチームがなかったですからね。高等師範を卒業した人は中学校などの教師として行かれるわけですから、私達は商売柄そういう所へ売り込むとか、あるいは東大にも、東大も強いチームであったものですし、私どもの店は上野の車坂にあったものですから、近くでもあり東大に売り込みに行ったのですね。私は芝の田中という運動具店にいましたが、そこから独立して、最初はドッチボールを作って小学校を回っていましたが、手がかかって品数もあまり出ませんでした。その頃からテニス、野球は今程ではなかったけれども盛んでした。そしてサッカーなどは日本ではチームも少なかったし、ほとんど顧みるものもない位でしたが、非常に国際性のあるスポーツですし、将来は必ず盛んになると見てサッカーのボールを作るようになりまして。その頃青山師範などでサッカーのゲームをやっているという記事が新聞に出たりしたので。それには高等師範とか東大に売り込めばいいだろうと思って……ですから私がサッカーのボールを作り始めてから東大、高等師範が一番古い得意先ですね。

森
|
ところで、インターハイが始まりましたね。そしてその時に柗田さんが献身的に尽力されて、ミクニのボー

柗田さん

ルも有名になったと聞いておりますが。

それはまず、グラウンドの説明からしましょうかね。

御殿下のグラウンドはその頃はお粗末でした。コンクリートの屏もなくて病院側は土手になっていました。土手には桜の木があり、練習中にボールが桜の木に当り花がバツと散るなんてこともあったし、ボールが木にかかってサオでとったことなんかもありました。御殿はその頃もあり、インターハイの時もその本部になっていました。インターハイはもと京大と東大とが別々にやっておりますが、双方で協議の上で、京都と御殿下との交互に開催するようになりました。

後藤
|

最初のインターハイの頃は柗田さんが朝八時前から非常に御苦労なされたとか。

柗田さん

ええ、もうインターハイ中は十年間というものは、おちおち家でおぞうになんかたべたことはありませんでした。一年は京都へ行く、次は御殿下という工合で……、一番初め京都でやった時は京大の農学部グラウンドでした。丁度御大典の後だったですね。私達も手伝いに行きましたが、とても寒く水が見ている内に凍るので。これはひどいというので石油をまいてときました。ボールもこちこちになりましたよ。京都ではその後農学部のグラウンドでは一回きりでした

ね。平安神宮の前の、今でもありますが、あの広場に
移りましたね。そういう想い出がありますね。東京で
やる時は御殿下ですね。キックオフが朝の八時ですよ
今の人は大変ビックリなさるでしょう朝の八時キック
オフなんていったら、そのグラウンドでやるから、なる
べく最良にということから東大の部員の人の御努力が
あったわけですよ。部員それぞれの母校も参加するで
しょうから、ムシロをゴールエリア一杯に引きしめて
霜どけを防ぎました。せめてゴールエリアだけでも霜
どけのないようにしてやるうという気持でしたしよ
う。朝行って真白になったムシロを、軍手をしていな
がらもこぶえてしまうような寒い中で片付けたり、整
備したりしました。部員の人もやりましたし、私達も
手伝いました。その時刻になると、広島とか岡山の六
高とかが、あの貫一で有名なツリガネマントを肩から
下げ、それぞれ校歌を歌いながら時計台の下をやって
来るわけです。それを見て私達も非常に愉快でした。
そうして皆が勝って涙し、負けて涙し、今の人には解
らないでしょうが、手伝っているものもそばで見えて
もらい泣きすることもたくさんありました。試合は
元旦からでしたからね、大晦日の夕方遅くまで練習し
ているものですからラインを引く暇もなく、月明りを

たよりにラインを引いたものでした。ムシロをひいた
り、スコアボードをたてたりしました。東大の部員
の人も皆やりました。夜七時、八時になって家に帰る
と印刷屋がプログラムを持って来ます。そして明けて
元旦には朝六時に山上御殿に行くわけです。そこで部
員がオトンを祝っておりまして、その頃の部員にはゆ
とりがあったのでしょうか、一升徳利がおいであり、
飲める人も飲めない人も一杯ずつオトンを祝い、ミク
ニさんどうぞというわけで一諸に祝ったものでした。
病院の方をながめると朝日が昇って来る。あの光景と
いうものは忘れることが出来ません。私どもも朝日の
昇るあの勢いで商売にはげまなければならないと思い、
それは家でオトンを祝うよりはおごそかな感じを持っ
たものでした。東大の部もその頃全盛時代というのか、
朝日の昇る如くというふうでした。当時は、御殿に上
るかどに、今の道場と反対の側、北側に道場があり、
その前にサツカー部とラクビー部のトタン屋根の小屋
が立っていました。御殿の下では霜どけですべて、
見物人も転んで正月の晴れ着をよごしたりする人もあ
りましたよ。グラウンドの回りも綱を張ってあるだけで、
手伝っている者も、グラウンドを出来るだけ広く使って
プレイしてもらおうようにとプログラムを配りながら一

生懸命整理したものでした。お蔭で私も本郷あたりに
は顔なじみも多く出来、ミクニさんプロをください、
プロをあげるから下ってくださいなどといったわけで
す。

森

一度、鈴木駿さんがボールがどうしてもおかしいと云
い出してあげてみたら中に新聞紙が入っていた。なん
てことが……。

安達

ところで鈴木駿一郎さんという方がおられますが、あ
の方はボールにうるさかったという話ですが、あ

柗田さん

柗田さん

浦和市立高の先生の方ですね。あの方は地質が専門で
係教でボールを見るんですね。当時舶来のボールは胴
が細く使っているうちにまるくなるという工合でした
ので、これでは駄目で、現在の十二枚（まあ国際的に
は十八枚のものもありますが）革の最初からまるいボ
ールを作らねばいけないというので、鈴木さんの非常
な御指導をうけて私どもも作りました。舶来のボール
でなくてはいけないという時代に、即ち昭和五年の極
東大会にすでに日本のボールが使われたわけです。

八田

前に新聞で読んだのですが、柗田さんがボールを御殿
下に持っていたら鈴木駿さんが「こんなボールを蹴
れるか」とボールを高く蹴り上げたとか……。

柗田さん

そんなこともありましたかね。あの方は名古屋の八高
の出で、八高のマネージャーの福田さんが「駿さんは
ボールにとってもうるさくボールがわるければナイフで
突き刺すぞ」と云っておられたが、それ程でもなく、

森

柗田さん

それはよく覚えてませんね。そういう事はあったので
しょうね。でもチューブが二枚入っていたなんてこと
はよくあるんです。このボールはブレてしょうがない
と云うんで調べてみるんですよ。誰かがチューブが下
に落ちたのを、入っていないと思って新たにチューブ
を入れたんでしょうね。中にチューブや口皮が入って
いてボールがブレたり重さが変だったりなんてことは
よくありうることです。鈴木さんはその位ボールにう
るさかったですね。そのかわり練習の時も、「ボール
つめは俺に任せろ」という位熱心にやっておられまし
たよ。奥野さんが主将の時は奥野さんも駿さんに手伝
ってボールつめをしていました。主将としての責任と
いうこともあったんでしょうね。だから今は三菱の社
長さんをやっておられる。やはり学生時代から一通り
の努力をなされた人ですね。

その他の方について何か。

その頃の方は皆熱心で、広島野島さん、中島みつち

ちゃん—中島さんという人が三人いましてね、健蔵さんふとった美さん、とみっちちゃんの三人です。

その頃の東大はとても強くて、昭和五年の極東大会には東大が中心となってチームを出しました。IWの春山さん—今日刊スポーツにいます、若林さん—もうなくなりましたが手島さん—今広島におられる、篠島さん高山さんという五人のフォワードで、とても見事でしたよ。竹内悌三さん—FBの人でそれは名選手でした。おいしい人をなくしました。ベルリン大会のときは日本サッカーチームのキャプテンとして行かれました。

後藤—

梶田さん

竹腰さんはどんな方でしたか。
仲々厳格な方でしたよ。今は酒もタバコもやりませんがね。その頃はこんなことを云ってはしかられるかも知れませんが、カチカチの人でしたよ。大分お酒も召し上がるし、タバコものまれますが、学校卒業後もしばらくカチカチの人でしたよ。その頃の鈴木駿さんはタバコをずい分のまれましたが、合宿というどピタリとやめました。皆さんえらい人になっていきますよ。それはサッカーできたえ上げられた面もあるでしょう。ただなぐさみというのではなしに、サッカー部というものが一つの修業だったのでしょね。インターハイの時でもそれがすむと末広先生—部長さんで田舎の百

姓みたいな地震の博士で、今はなくなりましたが—その末広先生が部員の人に「諸君は今日までは母校のために一生懸命になってやってきただろうが、インターハイがすんだのだから明日からは東大サッカー部のために一丸となってやれ。ご苦労だった。」というふうで、先生は部員の気持を良く汲み部員の人も親父の様に思っていたことが良く分かりました。そのあたりで東大が強かったという一因があったのでしょ。もっとも今とは大分事情がちがいますがね。インターハイの頃になると、部員は自分の母校が出場しているものも出場していないものもありましょが、とにかく部員の方は夢中でしたよ。インターハイを始めたことは、自分たちの旧制高校にいる上手な選手を見るということが楽しみでもあったわけですし、また高校生たちも東京に試合行くのを楽しみにしていましたよ。その頃の高校生は大人でしたね。今の高校とは違うでしょうけれどもね。夏頃から髪の毛を伸ばし、長髪で来るところもありましたよ。岡山の六高などはたいがい長髪ですし、広島はひげを伸ばし、松江あたりのはいアゴヒゲをずっと伸ばして来るのがいて、「あいっヒゲでおどかしやがる」なんてこともありました。広島あたりは髪の毛を伸ばし、赤いハチマキをしてすごか

ったですよ。おどかしというか何かすごさがありました。広島とか、六高とかは実際に強かったですからね。その頃の高等学校だけだったですけど、他の学校、今の私立大学では法政と早稲田が最初から加盟していました。法政はまだだらしがなかったですね。インターハイで試合に負けてもフロから出て来るとくして髪を分けたりなんかしているんですからね。その点早稲田高等学校はさすがにちよつと実がありましたね。各高等学校も早稲田とやるといふことは面白さがあつたわけです。東京でも京都でも最後の準決勝位になると、六高と今日は早稲田だとか広島と早稲田だとかね。早稲田も技術が向上したでしょうが、それに負けてはなるかと高等学校魂でやってやれというわけでした。才一回、才二回は早稲田が優勝したんですが、その後も早稲田に勝たすなど高等学校魂を発揮しました。それはもう好敵手でした。楽しい昔の思い出ですけどね。今でも早稲田の人にはその魂が残っているのです。東大の魂もこれから戦後の新しい魂で一つよみがえってもらわないといけません。「昔の人がムシロ位」となんでもないと云うかも知れませんが、それは大変でしたよ。霜で真白ですからね。試合が済んだらすぐラインを引くとか……、京都などは霜だけがひどく普

後藤

梶田さん

通の靴では駄目なのでサッカー靴をはいて手伝ったものでですよ。そうしたことは戦争近くまで十何年も続きました。

東大の話はその位にしまして、梶田さんの歩まれた道がある意味では日本のボールの歴史だと云えると思いますので、そのへんの話を一つ。

そうですね。今年で丁度四十年この商売をしています。先日F・I・F・Aの会長、副会長、書記二人の四人が来日しまして、日本の公認球を作っている四社がボールを持ちよりまして見てもらいました。その時は各社はのサイズとか、チューブに欠陥があつたのでしよう。うちのは四個のうち一個が幸い合格しました。「これならよし、一つサインしておこう」と云われしました。このサインは記念に長くとおこうと思いません。しかし私はこれで満足してはおりません。一層努力してオリンピック用は日本でやる以上日本のボールをと思っております。現在の私のところのボールは世界水準にもっていても屈指のものだと思ひ、自信をもっております。

ボールの作り方にも十二枚ばり以外T字型とか色々ありますが、これらは非常に不経済な革のとり方なんです。日本はグラウンドが悪くボールの消費量が大変なん

ですね。革を砥石でとぐようなもので、部費がもちま
せんね。そこで現在、経済的な革のとり方である十二
枚はり是一般に使われています。ローマのオリンピック
クの時、ヨーロッパに行って運動具屋に先ずとび込み、
見本に買って帰りましたら、あちらではサッカーのボ
ールはほとんど十八枚はりですね。十八枚はり縫い
賃も倍以上で非常に高くなります。ヨーロッパはグラ
ンドがローンですからその点ボールは一カ月も二カ月
も持ちますからね。日本で今十八枚はりは三千三〇六
百円ですが、ヨーロッパではどこでも二倍位ですね。
十年位前から十八枚はりが入って来まして、ようやく
採り入れましたが当時はまだピンと来ませんでした。
それで十二枚を使っていました。がこの目でヨーロッパ
を見て来て十八枚が理想的だと感じましたね。東京
オリンピックに備えてというんで帰るとすぐグチのな
いリースレスタイプに切り換えているわけです。十二
枚はりでもこの式のものがあります。とにかく日本で
は練習用には安いものというわけで今までのまゝで
すけれどね。特に御殿下グラウンドとか神戸の方の砂の
グラウンドでは一週間をもちばよい方ですからね。買っ
てもらうのはよいのですが、実際お気の毒になります。
ですから練習用には二千いくらのものを使ってもらい

ます。まあ国際ゲームにはもう三千三百円の十八枚は
りのものを使うわけです。国際スポーツ大会でも十八
枚はりで試合をしましたしボールについては何も文句
が出ませんでした。

ヴェトナムの選手などは帰りにボールを買って帰りま
した。うれしかつたですね。その後F・I・F・Aの
人が来たわけですが、それにはまだ満足しているわけ
ではありません。オリンピックまでは日がありますか
ら、もっと優秀なものを出して、業界人としても最善
のものを作ってオリンピックに使わしてもらえれば、
私の念願ですから、こんなうれしいことはありません。
……まあ丈夫さにおいては十二枚も十八枚も同じでし
ょうが、縫い目があるから弾力が変わるかも知れませ
ん。枚数が多ければそれだけ円形が出るわけで十八枚
が理想でしょう。革はゴムのように均質ではないから
十八枚そろえることは中々大変です。優秀のボールを
作るということはなみ大抵のことではありません。幸
い一生懸命やってお蔭で外国のボールをとらなくても
日本の選手の人ばあまあ間に合わせてくれています
のでサッカーの選手の人にもそれだけよることでした
だかねばなりません。実際韓国ではボールは出来ませ
すが、優秀なもの出来ないのでヨーロッパから取り寄

せているし、便があると日本のボールを買って帰ると
いうほどですから、日本製のボールで練習を充分出来
ると言うことは幸せだと思っていたとかねばなりませ
ん。どうぞもっと強くなってください。

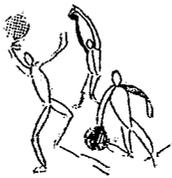
安達 — それではこの辺で、どうもお忙しい所、長々とお邪魔
いたしました、有難とうございました。

梶田さん — いえ、どういたしまして、又いろいろと普話をため
ておきましようね。

一同 — 有難とうございました。

梶田房次郎氏 明治三十三年、四国松山に生れる。

大正十三年、二十四才で裸一貫上京し、芝の
田中運動具店に才一步を印し今日全国サツカ
ーボールの七割をミクニのビクター号で占め
るに至る。



会社訪問 宝酒造を訪ねて

森 紘一

昭和通りに面したビルの六階社長室に宇尾、安達君と僕の三人が
田中先輩をおたずねしました。

まずビールの味から話すと、日本のビールが一番です。日本のビ
ール会社はビールという一種類しか作りませんが、外国のビール
会社では七、八種から十五種位のビールを作っております。この内
日本のビールみたいな形のは五、六割を占めております。この
ような形のビールの内では、日本のビールがなんといっても一番で
す。しかし、他の形のビールの内には日本のビールに優るものもあ
ります。よく外国で飲んだビールがおいしかったという話を聞きま
すが、これはビールを飲んだ時の環境、雰囲気にもよりますし、日
本には無い変わったビールを飲んだことにもよるでしょう。

日本ではビールに米などの澱粉質を入れますが、ドイツのビール
は麦と水とホップから作り、澱粉質は入れません。ドイツでは法律
で澱粉質を入れる事を禁止していると聞いておりましたが、そうで
はありませんでした。

ドイツへ行った時、あるビール会社の理事に、ビールに澱粉質を
入れないのは法律で禁止しているからなのかと質問したところ、そ
の理事の答えは、「ビールは水とホップとバレー(麦)から作るべ

きものであり、この他のものを入れるのは邪道である。」でした。アメリカのビールはうまくないし、英国、エールのビールもうまありません。

外国のビールは日本のビールの小瓶より少し小さい瓶に入っております。ですから大変あけやすく、外国に行った時は何種類も味わってきました。まず何種かのビールを少しずつコップに注ぎ、これを味わい、またボーイにチップをやってそのビールのレッテルを剥し、このレッテルを手帳に貼り、その下に「味よし」、「味まずし」などと書き入れました。このようにして一五〇種類位も味わいましたが、終いには味がわからなくなり、ただ「味普通」という項が続く始末でした。しかし帰国して羽田空港でタカラビールを飲みましたが、これが一番うまかったです。これは日本のどのビールを飲んでもそう感じたでしょう。

日本のビール会社は非常に整備されており、外国では新旧様々で、小さい会社が多く、丁度日本の酒屋みたいなものです。ドイツには三三〇〇位のビール会社があり、その多くは自家用というのには村で免許を持っているような所のこと、このような家は年に二、三回しかビールを作りません。ここでビールを作る時は、家の入口にある種の木を挿すので、村人にも、税務署にもその家でビールを作っていることがわかります。そしてそのビールを売るので、す。

ドイツではビールに対する関税が、一様ではありません。これ

は自家用の税率を特別に安くする事から始まり、それに毛の生えたものはそれより少し高くという風に税率が数階段になっております。別に商業者を保護する為ではありません。

値段に関しては、日本のビールは外国のものより高いです。日本では六割が税金であるのに対し、外国では税率は二〜二、五割位です。もっともデンマークの税金は高いですが、日本ではビール会社が工場を新設したり、材料が高くなってきているので、税金を安くする以外はビールは安くならないでしょう。

ビールというものは安定した味を出すのがなかなか困難です。タカラビールを作り始めてから八年経ちましたが、やっと安定した味を出せるようになり、今では品質の点ではひげをとりません。現在はタカラと麒麟ビールが良いと一般にいわれております。

タカラビールの工場は群馬県の本崎にあり、二、三年前のビールが余り、現在はタカラビールは両工場の能力の五割程度しか生産しておりません。

最後にウイスキーの話を少ししましょう。宝酒造にはホワイトリツカーという焼酎がありますが、トリスなどのモルトウイスキーに舶来のウイスキーを混ぜ、これにホワイトリツカーを混ぜると良いウイスキーになります。ウイスキーというものは一種類から作るものではなく、何種類も混ぜて作ります。ただこの品質を一定に保つのが大変むづかしいのです。ジョニーウォーカーなどいっても、三十種位のウイスキーを混ぜ、これに日本の焼酎に当るゲレンウイ

スキーを半分位加えたものを、樽に詰め貯蔵し、それを瓶に詰めて出しているのです。

田中豊氏 大正十二年法学部卒、大蔵次官を勤め勸銀総裁になる所、パージにかかり、弁護士を開業、その後四国電力社長に決つたが事情があつて宝酒造社長に一応籍を置く、後内臓を患い闘病していたが、やゝと回復し一昨年あたりから本格的に社長として宝ビール売出しに乗り出し今日に至る。

今年度の抱負

石光 豊

今年度キャンブテンとしての抱負を述べよとのこと、何をどう書いてよいやら……。的を射た文にはなり難いことと思ひますが、せっかくのチャンスを利用させていただきます。

まづオ一にリーグ戦に勝つことです。勝つことのむづかしく、二部リーグで優勝することのむづかしさは、昨年度のリーグ戦で、いよいよもつて骨身にしみて理解しました。何が、どんな原因が最終

的な勝利をもたらすか、技術的な面は勿論としても、それに加えて合理性だけでは割切れぬ「なにも」かも働いていることは確かであります。技術的に対して「精神的」というのが該当する言葉なのでしょうか。

では勝つ為に、技術的な面精神的な面を強くするためには、どうすればよいか。やはり「練習すること」である。それ以外に、それ以上の対策はないものと思われず。この二ヶ月間ばかり色々、考えをめぐらせましたが、どうも行きつく先は、「練習せよ」という内心の声、ということになります。サッカーという対象に自己を完全投入することによつてのみ、勝利への最善の道を得ることが出来るものと考えます。しかし私は、こうした考えを部員全体には要求しません。厳密に言えば、それは殆んど実行不可能だからです。これは、私達の努力の方向であり、それによつて進むラインであります。

この覚悟さえもてば、かなりのハードトレーニング実施も可能となりその結果として人の和—現代マスプロ大学学生が部生活に求めるもののひとつ—も自然に強固なものになると思ひます。

部生活は、勝つことに意義があります。あるいは一歩下つて、勝とうという意志に意義があります。他はその副産物に過ぎません。そこからこそ、真に合理的、科学的な練習計画も生れてくるものと考へます。

技術的なチーム力向上の面では、これからも勉強して私自身とし

ても、チーム全体としても蓄積を増していく積りです。
今後とも宜しくお願い致します。

昭和三十八年度練習記録

一九六三年十二月五日

新チーム発足

監督 須賀敏孝

コーチ 高田宗昌

主将 安達二郎

主務 宇尾誠一

インカレめざして、練習一時間半、最後にダッシュインターバル
四〜五百。バスと一日おき。チーム造りは特にしない。リーグ戦
の戦力を維持。

十二月二十四日

一応、練習終り、解散。

一九六四年

一月十日より自主練習

かなり多勢、グラウンドにでてくる。

一、二年生を試合なれさせるため試合。

この間、ロードレース。クロスカントリーに参加。両方とも陸

上部に次ぐ戦績。三位を大きく引き離す。

三月三日

練習始め。始め会、年間計画の発表。

春合宿は学年により二つに分ける。

主に基礎体力の増強を目標。個人の体力を中心にし、チームと
しての力は考えない。

三月三日〜十日 才一回合宿

一、二年中心。殆どの上級生も合宿し、下級生をコーチ。

三月十四日〜二十一日 才二回合宿

全員合宿し、練習は三、四年中心。

合宿終り頃、故傷者多し。

三月二十五日

御殿下に戻って、週五日(三時半〜六時)の練習。天皇杯予選
の日程は、ハッキリせず。例年通り四月末として、専ら、天皇
杯めざしての練習になる。

基礎プレーに加えて、試合を数多く(しかも強力チームとの)
こなすことを目ざす。

三月三〇日

東大 0		
0	0	0
1	1	1
2	0	0
2 新三菱		

四月五日

東大 1	
1	0
1	1
0	2
2 ユース代表	

四月六日

東大 4		
3	1	0
1	1	1
1	1	0
2 慶大		

慶応大学 佐藤 G K 中島 (広瀬)

榎並 F B 小川 (平田)
岡田 八田 (新井)

平田 安達 (武田)
金子 H B 石光 (森)
犬飼 山浦 (小林)

黒沢 中岡 (熊沢)
田中 熊沢 (野村、河井)

(真殿) 佐藤 (信) F W 南
(多和) 江見 後藤
竹島 石田

四月十五日

全日本が御殿下で練習。その度に試合を行う。

東大 0		
0	0	0
1	1	1
0	1	1
2 全日本		

四月十七日

午前中の試合。非常にむし暑い。

東大 0		
0	0	0
1	1	1
0	6	2
8 全日本		

四月十八日

先取点を奪う。

東大 1		
0	0	1
1	1	1
3	0	1
4 全日本		

四月二〇日

東大 1			
0	0	0	1
1	1	1	1
2	1	4	1
8 中央大レギュラー			

相手のメンバー構成
才二レギュラー
新人戦メンバー
レギュラー

四月二十一日

一年生全員揃う。大部隊となる。総計六十余名

四月二十七日、五月二日

新人戦合宿

合宿は、主に手転な相手とゲーム、紅白試合等、試合なれのため。普段の練習では新人戦のための時間は少ししか割かない。

五月十一日

東大0 $\begin{matrix} 0 & 1 & 1 \\ 0 & 1 & 0 \end{matrix}$ 1 古河電工残留軍

五月十九日 五月 祭

現役6 $\begin{matrix} 0 & 0 & 0 \\ 1 & 1 & 1 \\ 2 & 1 & 3 \end{matrix}$ 0 LB

LBの弱体化は、東大サッカー部にとってかなしむべき事である。三年ほど前までは現役はLBを破ることを大きな目標としていたと思う。LBの奮起を望みたい。

五月二十日

新人戦も終り、いよいよチーム造りにかかる。そのために、一軍を選抜、練習内容も変える。これ以後体力的な練習が少なくなる。

同 二〇日

東大1 $\begin{matrix} 1 & 1 & 4 \\ 0 & 1 & 2 \end{matrix}$ 6 全日本

五月二十二日

東大0 $\begin{matrix} 0 & 1 & 6 \\ 0 & 1 & 5 \end{matrix}$ 11 全日本

五月二十三日

東大0 $\begin{matrix} 0 & 0 & 0 & 0 \\ 1 & 1 & 1 & 1 \\ 1 & 1 & 1 & 1 \end{matrix}$ 4 早大

一、二回は新人メンバー

五月二十六日

東大1 $\begin{matrix} 1 & 0 & 0 \\ 1 & 1 & 1 \\ 1 & 2 & 2 \end{matrix}$ 5 日立本社

六月一日

東大5 $\begin{matrix} 2 & 1 & 1 \\ 3 & 1 & 0 \end{matrix}$ 1 成城大

六月二日

この頃調子がくずれ初める。押しても点が入らない。

東大0 $\begin{matrix} 0 & 1 & 1 \\ 0 & 1 & 0 \end{matrix}$ 1 三共

全日本始まる。一、二回戦共に押しても点が入らない。点は取るだけとらなくては。

京大戦を目標に、フォメーションが多くなる。

六月二十九日

東大	0	0	1	2
	0	1	1	3
	} 3 教大			

須賀、高田評、「一本ピリツとしたものが欠ける。FWはいつも同じベースで走っている。ボールばかり回しては相手は守り易い。GKは出るタイミングが一步おそい。バックスは皆な信用しすぎてる—即ち、カバーが足りない。

七月八日

納会、リーグ戦まで四ヶ月

八月十日

練習再開。

八月十五日〜二十二日 夏合宿

検見川に集るもの総勢五十余名。

四年のミーティングでこの合宿の性格に関して、以前に決定した事を再検討。その結果体力づくりを中心に置く。

練習時間 午後一時半より六時半まで。

練習は一日に一回五時間途中二回二十分休けい、練習が終了時のつかれはものすごいが次の日はすっかり疲れが抜ける。その点一日二回より有効。

春合宿同様、合宿終りごろ疲労の為か、故傷者多数。この事から直ちに結論を出すわけにはいかないが少し考えるべき点であろう。リーグ戦の不成績はここに起因しているのではないか。

八月二十六日

御殿下に戻る。今日から川瀬が練習に参加。

練習時間 二時〜五時。

九月一日〜八日

レギュラー合宿(合宿所)

合宿の目的は、チームプレーの完成。試験が近いため、(駒場の)完全なレギュラー合宿にならず、午前の練習に二軍が少数しか参加しないため、練習内容に制約を受ける。

九月四日 合宿中

東大	0	0	1	0
	0	1	0	0
	0	1	0	0
	} 0 中大			

良い試合であった。東大は三回ともレギュラー、対校試合で二軍戦を行わないのは例外。前途洋々と思はれたが、試合後のミーティングで、安達「以前にもリーグ戦前に中大に勝った事があるが、その年のリーグ戦の成績はひどかった。今年も注意しよう」

九月八日

東大	1	0	1
	1	1	1
	0	1	0
	} 3 慶大		

昭和三十一年度公式戦記録

○ 大学選手権 37・12 御殿下・小石川

一回戦 東大 4 $\left\{ \begin{matrix} 1 & 1 & 0 \\ 3 & 1 & 0 \end{matrix} \right\}$ 0 鹿児島大

二回戦 東大 7 $\left\{ \begin{matrix} 0 & 1 & 0 \\ 7 & 1 & 0 \end{matrix} \right\}$ 0 千葉大

準々決勝 東大 0 $\left\{ \begin{matrix} 0 & 1 & 2 \\ 0 & 1 & 0 \end{matrix} \right\}$ 2 中大

大	島川田	達光	浦柳村	藤田	
東	中小八	安石山	畔野南	後石	2
					9
					12
大	部岡城	野辺石	藤田川光		
中	片西小	河渡大	榎伊藤	市岡	
					6
					3
					4

鹿児島大、千葉大を大差で破り勢いに乗る東大新メンバーと、大戦を前にはじめてレギュラーを登場させての中央との戦いは、二部優勝校と一部優勝校の対戦という事もあつて、この日の興味をそそるものであった。

全日本選手権、東西学生王座、そしてこの大学選手権と、学生界初の三冠王を旨さず中央大はこの日からレギュラーを出場させて万全を期した。

中央は開始早々の五分にLW岡光の中央パスをRI伊藤が受け、そのままうまく切りこんで先取点をあげた。

この一点はあまりにも早すぎた。前半0-0で進んでいれば、あるいは東大に勝つチャンスが出来たかも知れないと思える程、その後東大はよく反撃した。

前半は中盤でもよく持ち、むしろ押し気味であった。

FWラインも時々そろろろのだが、シュートがまずい。肝心の所でパスに力がなく、スピードが落ち、自滅していた。

二十五分中大はベナルティーエリア内の間接フリーキックを小城がシュートし見事に決めて二点目をとり中大は楽になった。

東大はどうせかなわぬ相手なのだから、もう少し思いきった攻撃をしかけて中央バックスをあわてさせるべきであった。

奇手でもやればいいのだが、おっとりしており消極すぎ、一対一になった時でも球をとられはしないかという気持からあわて気味だった。まあ実力通りの試合といえよう。(朝日新聞)

○ 新人戦 5.12 5.18

一回戦 東大 1 $\left\{ \begin{matrix} 1 & 1 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \end{matrix} \right\}$ 0 神奈川大

その内に東大バックスはぼろを出し、巧みにP清水がこれを衝き見事にシュートを決め前半は終った。

後半はじめ五分ぐらいいはこちらのペースであつたが、まじめなそして正確な新三菱のプレーはやがて我々東大をあざけるように調子をあげ次々と得点を重ねていった。時間の経過はスタミナの尺度である。東大はスタミナに於いても負けた。卒業後五年にもなる服部先輩は少しも乱れる所なくプレーは増々冴えていった。

正に完敗である。何とも弁解のできぬはずかしい気持で一ぱいだつた。聞く所に依ると新三菱は、月、木、金の週三日、朝七時半に皇居前に全部員晴雨に拘らず集合し、体操とお堀はた一周のラニングをやっているそうである。

この試合で一番活躍したのは一番年長の北口さんであつた事が全てを物語っている。

我々は多くの事を教えられたように思う。

○京都大学定期戦 7.7 御殿下

東大 0 1
1 1 0 } 1 京大 0 1

東大 0
0 1 0 } 0 京大
0 1 0

大	島光川	達田	浦井	藤旅
東	中石	小安	八山	三河
	南	後	畔	4
				17
				9
大	波家	島森	野坪	田津
京	難大	西植	時川	井小
				唐
				水
				伊
				5
				9
				19

戦評

伝統の定期戦南風の強くふく、真夏の太陽の下で、京大のキックオフで始まつた。風下に陣した東大は終始おし気味に試合を進めたが、ゴールシャイは一向改まらず、ここ一発が皆ものにならなかつた。後半も同じような試合運びで、両軍とも一向に冴えず伝統も地に落ちたと先輩をなげかせるような凡戦であつた。伝統戦らしく気魄のこもつた試合をやってほしかつた。

○関東大学リーグ二部 930 11.24 御殿下

東大 2 1 0
0 1 1 } 1 日体大
9月30日

大	井川	田林	光浦	達瀬	藤柳
東	坂小	八小	石山	安川	南後
					畔
					5
					15
					9
					1
4	C	K			
13	F	K			
14	G	K			
0	P	K			

戦評

一部復帰をめざす東大の才一戦の相手は今年に二部に返り咲いた
 と言え、最強と目される日体大である。

主将安達が右足首を捻挫していると言へ、はじめから快調なベ
 ースで試合は運び十二分南のシュート決り、続いて十四分には後
 藤がフリーキックをダイレクトで見事に決めて優位にたつた。そ
 の後も押し続けたがゴールシヤイが又現れて点にはならずP・K
 までミスする仕末であつた。あと三点は絶対に入つて当然であつ
 た。

しかし後半は体力的にまさる日体大は徐々におしはじめ、幾度と
 なくゴールをおびやかされ、遂に三十分きれいに決められた。そ
 の後もおされ続けたがどうか守り、逆に最後の十分は東大のベ
 ースにもどり攻勢に試合を進める内に終る

		東大		1		自由大		10月	
		11		1		9		6日	
		11		1		9		御殿下	
G	K	H	B	F	W	G	K	H	B
8	9	10							

戦評

二部最弱と目される自由大に対し、東大は先週対日体大戦で捻
 挫の悪化した安達を温存し、樂觀ムードが支配的であつた。

案の定、自由大小兵西名に東大バックは面白い程翻弄され、フ
 オワードは絶対的なチャンスを変えずのがし、バックでは石
 光の孤軍奮闘が目だつのみでタイミングの狂つたバックスは、
 もはや昨年のそれではなかつた、又畔柳なども諦めが早く、フ
 オワードの今まで対面していた壁は増々厚くなる一方であつた。
 キャプテンが出なかつたと言え、一部復帰を全員が心から望
 んでいるのが疑わしい程まよりのないぶざまな試合であつた。

スタミナの最も劣る川瀬がそんな中で一番意欲的であつたのが
 妙に印象的であつた。

		東大		2		農大		10月	
		11		1		0		26日	
		11		0		0		御殿下	
G	K	H	B	F	W	G	K	H	B
8	6	18							

戦評

リーグ前半は、演習から帰ったばかりで元気の無かった防大は、この日すばらしい出足とダッシュで東大におそいかかってきた。前半九分、R I 富永は、C H 石光の油断を衝いて二十五メートルのロングシュートを決め意気大いに上った。又もや先取点を許した東大はよく反撃し川瀬が再三シュートするもいずれも決らず、チャンスをとがす。三十分石田の絶好のコーナーキックをフォワードに出た安達へディングで見事に決めて同点にしたが、その後一分してすぐに防大はフリーキックから、フォワードが果敢に突込み再びリードを許した。

フォワードのフォロローにはかり気をとられた東大バックは後手、後手にまわり、徒らにピンチを招いた。

後半は一方的に東大がおしたが一向にシュート決らず、三十五分安達のゴール前に上げた絶好のフリーキックをキーパーファンブルし、フォワード必死に突込んでやっと同点に追いついた。しかしその後点は決らず遂に敗点2をしよいこんでしまった。

東大 0 0 1 上智大 11月 16日 御殿下

大	島川	田達	光浦	瀬岡	藤柳				
東	中小	八安	石山	南川	中後	畔	13	4	6
	G	K	B	H	B		F	W	
	F						G	K	K
							C	F	
							3	3	3

戦評

東大上智とも優勝を賭け背水の陣をひいた一戦である。東大は得点をFKかCKからしかもはや期待できず、バックは必死の覚悟で守備についた。しかし上智はよく走り、よく守り風を利用して執拗に東大ゴールを脅かした。前半十九分右サイドからのロビングをG K 不用意にスルーした所、L W 突込んであけなく一点献上してしまった。浮き球に弱い石光をL B に下げ八田をC H に変え、G K へのバックパスを多用して相手ベースを狂わせる作戦をキャプテンが出し、風上に立つ後半を待つ内に次第に東大もおちつき東大はしばしば相手ゴールを脅かす内に前半は終わった。

後半も東大ベースで試合は進んだが、肝心のコーナーキック、フリーキックにいつも好球を蹴る安達が調子が狂い点が決らない。上智も東大の攻撃のすきをつけて再三東大ゴールを脅かすが決定的ではなかった。R B の小川もそれこそ必死で守り又よく攻めた。R H 安達とともに再三ロビングボールをあげるが上智バックスは着実にそれをはね返し東大フォワードの乗ずるすきを与えなかった。遂に部史上初めて東大が上智に敗れる時がやってきた、全ては終わってしまった。

熊沢 英男
吉田 慶一
安達 二郎

東大 0
 0 0 1 2
 1 1 月
 2 4 日
 御殿下

反省と回顧

主将 安達二郎

	東大	大東
GK	坂井	小川
FB	武田	安達
	八田	石光
HB	川瀬	野村
	原	浦田
FW	鳥三	石田
	12	12
GK	12	3
CK	3	24
FK	5	

戦評

既に戦わずして三位が決していたのでこの週は既定概念を捨て一軍二軍一諸の練習試合を行い、得点能力のあるフォワードが出場し、石光がLHに出た来年の事を考えての布石なのであろうと想像される、試合は完全に相手ペースである。又今日の試合程東大バックスのよろさを暴露した試合はなかった。今までの試合でもそうであったが相手が完全にフリーになってどうしようもなく入った点は一点もなかった。いつも、まさかと思つたすきに乘じて点を入れられている、今日はその典型であった。フォワードも川瀬が疲労がたまつたのかあまり冴えず若手もよく頑張っていたがハーフのフリードの悪いせいもあって決定的チャンスもなく終つてしまった。

数日後の追出しコンバを前にして机に向つてみると、いろいろな事が頭に浮んでくる。決して消える事なく次々と……あの時精一ばいだ、と思つていても今ではそれが単なる自慰的満足感にすぎないように思えてくる。敗北とはこんなにつらいものなのか、主将としての僕の反省が後輩諸氏のお役に立って今年こそ我々に出来なかつた事をやめて欲しいと思ひ、氣のつくまゝ書いてみる。

才一に反省するのは、方法の誤りである。

入替戦に零戦した我々にとつて、法政に雪辱し一部に復帰する以外に目標はなかつた。たとえ二部で優勝しようとも再び同じようなキックアンドラッシュ戦法で法政に敗れるのなら、三部に落ちるも同じだ、二部で何位になるなどという事は全く考えなかつた、法政にどうしたら勝てるか、唯それだけであつた。

当然キック戦法は放棄された、ドリブル、一対一策の個人プレーが強化目標となつた。バックはフリードを神経質すぎる程やり、フォワードはパスを考えた。無論基礎プレー、ダッシュには練習の半分以上は前期には割いていたが。

しかしである。我々はまず自分の力量を忘れ、次に力強さと激しさを忘れ、遂には二部に勝つ事までも忘れてしまつたのである。

今年法政を破つて一部に上つた日体大、東大の見事なバックのフ
ィードとフォワードのパスにあっては前半にしてすでに二点を失っ
ていたのである。だがそこまでが花車^{キキヤ}を我々の限界であつたのだ。
捨見の猛攻に遭つた裏にはそれからはもうも崩れて再び立ち上
る事が出来なかつたのである。我々の方法の誤りが何といつても根
本である。

才二に才一の方法の誤りに起因するのであろうが、フォワードの
極端な得点不足である。昨年は三月早々畔柳の盲腸手術があり、石
田の原因不明の衰弱がそれに続いた。一年で使えると思つた三浦も
膝を故障し半年使えなかつた。後藤の孤軍奮闘を待つより他になか
つた。疲労でガタガタになつた体に鞭打ち戦う彼の姿は、たとえそ
こに東大の限界が見出せるとしても、それにしてもよく頑張つたも
のだと頭の下る思いである。

しかし何しろ点が入らなかつた。五月の対早大戦にしても、松本
桑田を欠いていたとは言え、西山、釜本を相手にして押しまくって
いたのである。二対〇で敗れたがその二点ともバックの攻撃参加の
虚を衝いた逆襲によるものであつた。

リーグ戦に於いても全試合とも、Bは東大の方が少く、Cは多
く奪っているのである。誠に非能率的な試合をしたものである。

才三に、これは才一、才二の事に起因するが、バックのもろさで
ある。前述したようにバックはフォワードのゴールシャイをいやと
いう程見せつけられ、それがあせりに変つて攻撃を才一義に考える

逆立ちのバックになつてしまつた。

ウイングにフィードしてからリターンパスをも受ける練習を必死
にやつたのである。しかし対早大戦の時すでにバックは逆襲から度
度得点されていたのにフォワードの得点不足を心配するだけで自ら
の責務を省みる事を忘れていた。

もしバックが春の状態でゴールを守る事に専念し、一対〇で
勝つ試合を覚悟していれば(昨年はこれで成功し点も二部では意外
にたくさん入つた)二部では優勝していたと断言できる。

しかし点が入らなければ法政には勝てない「あんなキック戦法で
は見ていて点が入る気がしない」それが昨年の入替戦に対する専門
家の一致した評であつたのだ。

少しぐらい無理しても何しろ点をとらなくては、それ以外には考
えなかつた。

川瀬が途中から戦列に参加したのも点が、それも法政とやつた時
に点がとれる選手がほしかつたのだ、川瀬の参加が対抗意識をもや
す要因となればよいがそうではないと悪くすればメンタルコンビが
うまくゆかなくなり、特にフォワードや三年生の気持が僕から離れ
ていくだろうという事は覚悟はしていたが、そして川瀬がいなくて
も皆で不十分ながら力をあわせれば二部で勝つにはその方が望まし
い事は解っていたが、あの六月に法政から点がとれるなどとは夢に
も見れない事であつた。しかし結果は覚悟と一致してしまつた。

更に夏から僕がバックからフォワードに転出した事でもバックの心

構えの逆立ちがよく解ると思ふ。

大筋は以上であるが、よの他部員数の過飽和状態と、産業構造の高度化のもたらすものなのか、理科生の増大による種々の不便と練習不足をうまく消化しきれず、意志疎通の速かさを欠いていた事だ。今年ほんっと深刻になるにちがいない。

結論として我々は身の程を忘れて、上を見すぎていたのだ。一部の校のプレーがそのまゝ我々にも出来ると思いこんだのだ。

自己の能力を冷静に判断し分析し、その欠点を一つ一つ埋めていく事こそ、心秘かに夢見る一部復帰への道である。

決して一部のチーム力という見地から現状を分析してはならない。方法の誤りは、牛の角をためる事になる、致命的な誤ちである。

矛盾するようだが、二部で優勝すればそれで満足だ、などと決じて思わないで欲しい。東大は絶対に一部に上らねばならないのである。

「今年、一部に上ったら来年が大変だなー、来年又落ちるのはいやだなー」と思っていた者がかなりいたようだ。だが東大は上ったり落ちたりすればそれでよいのである。落ちても上り落ちても上るのが東大の偉さであり本領であろう。みみつちい考えは微塵も持たなくてほし。

今の三年はよくまとまり、やる気十分である。須賀さんも決意は一通りでなし。一、二年の諸君、君達の活躍がこの盛り上る東大サッカー部の運命を握っている。精根尽きるまで頑張れ、そしてこんな拙い我々のプレーを、途中で投げ出しもせず、ある時は炎天下に

又ある時は寒風ふきすさぶ中を、山の上でちっと暖かい眼差しで見守っていて下さる須賀さんを皆で胴上げしてその御恩に報いようではないか。

最後にマネジャーの宇尾、二軍コーチの長田、グランドマネージャーの吉田の縁の下の力に心から「ありがとう」と言いたい。

会計も、二軍の方も、練習の進行も全てうまく行き、皆力一ぱい頑張ってくれたのに、その力をまとめきれなかった僕の非力は何としても悔やまれる。残念でならない。

今年の活躍を心から祈っている。 頑張れ！

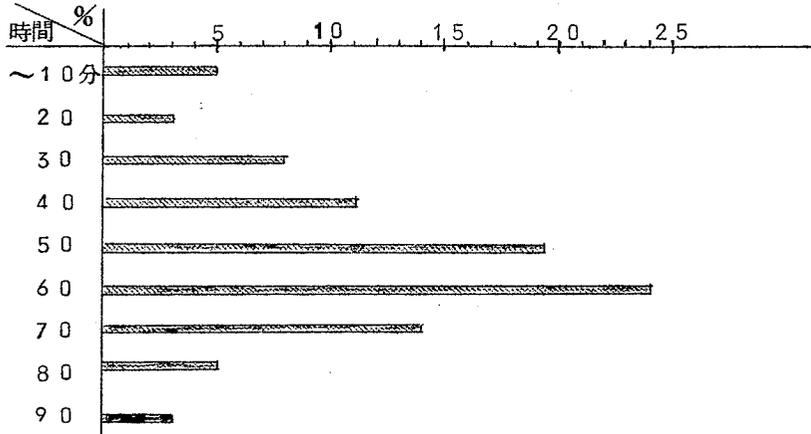


才一部 現状打開の方法と問題点

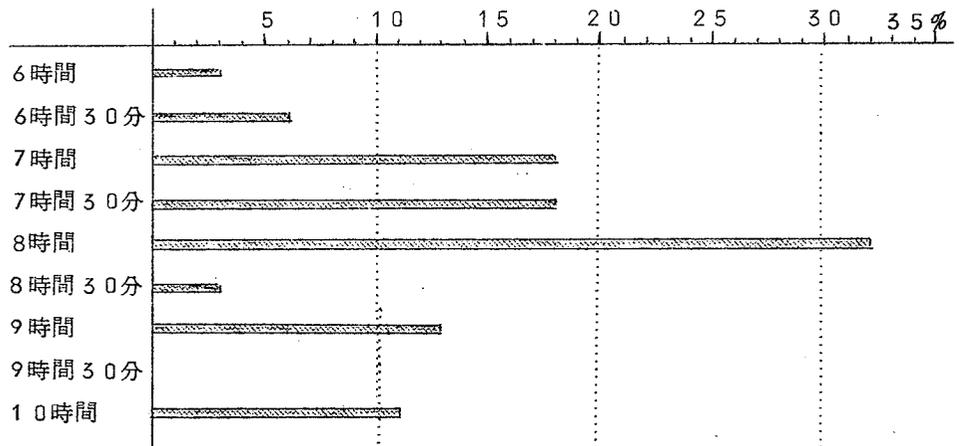
部員の生活と部員意識に関する調査

(1) 生活調査

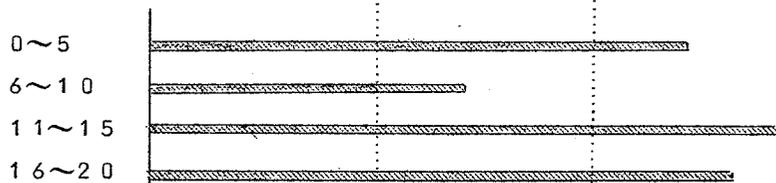
イ) 往復時間 (自宅から部室まで)



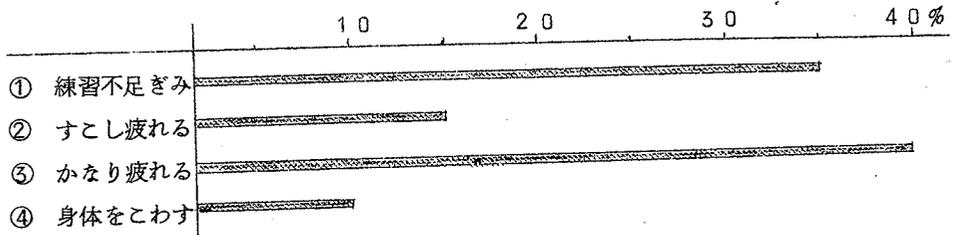
ロ) 睡眠時間



ハ) 講議出席時間 (1週間)

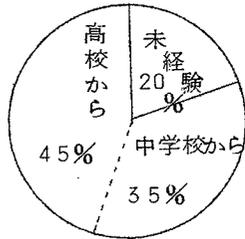


ニ) 疲労度



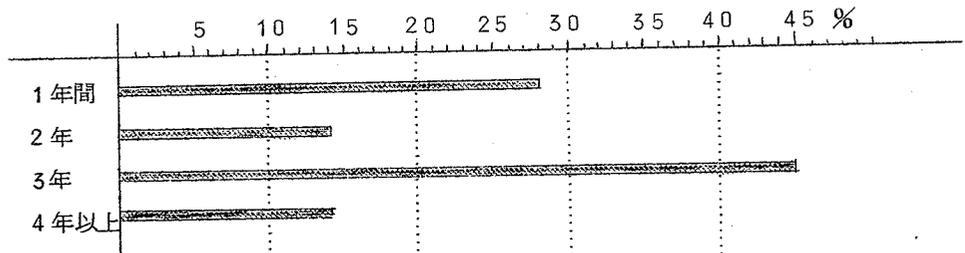
- 註 ① もっと疲れたい(練習できぬため)
 ② 夜の勉強がつかなくなる, 帰りが疲れる
 ③ 翌日授業に出たくない, 疲れが重なる
 ④ 慢性, 病弱気味, 医者に行く(ケガのためでなく) etc.

ホ) 経験について

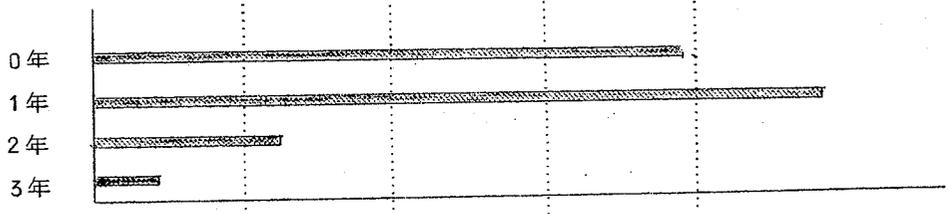


- ※ 註 国体出場者 5名
 インターハイ優勝者 2
 東日本大会出場者 5
 関東 " 2

ヘ) 入部までのブランクの長さ



ト) 浪人年数



(一) 部員意識調査

① 入部動機

サッカーをやりたい

五六・六%

部生活をやりたい

三五 %

別に無し

八・四%

註※ サッカーをやりたいという人は、殆んど全員以前からサッカーをやっていた人である

※ 部生活をやりたいという人は特に運動部の生活、雰囲気、精神力、体力の養成等にあらがれている人達である

かなりはっきりと動機が別れている事に注目したい。

② 入部しての感想

全体としての雰囲気がい

二五%

連帯感(従のつながり)が無い

二五%

練習に得る所がある

二〇%

無い

一五%

全てに満足

八%

※ 高校に比して従のつながりが欠けていると指摘する者が多い。先輩との交流を強く望んでいる。

※ 部生活のムード、雰囲気は満足している

※ 練習の厳しさについて、一軍の者特に理科生は苦しいと述べているが二軍の者はなまぬると感じてい

る。がっかりしている者も多い。

③ 入部前の東大サッカー部についての知識

全々、又は少ししか知らない

七五%

可成り知っていた

二〇%

よく知っている

五%

④ 部の輝しい歴史、伝統についていかに思うか

全々関係無し

六七%

現在の参考にすべき

二一%

ただすばらしいあこがれ

一二%

すばらしいとは、全ての人が思っているが、サッカー経験のちがひ、他校がやっていた事によるパイオニア精神、年令差、がもたらしたものと思われている人が多い、しかし中には昔の人の情熱、精神力の偉大さに深く敬意を払うものもかなりある。

⑤ 一部低迷についてどう思うか

二部が限度である

五七%

無理すれば打破できる

四三%

かなりはっきりと見解が分れている、即ち現在の實力と可能練習量から考えて順当のものと考える人達と、努力不足を指摘するものとである。

⑥ 現在の週五日制、二・五〜三時間の練習

現状賛成

九五%

日曜反対

五%

しかし理科生はこれ以上は絶対無理な線であり、現状でも週二〜三回は練習に出られなかったり、途中からという人が多

①強化策として合宿強化、週六日制をとるとした場合いかにか考えるか

六日制について

必要なし

八〇%

必要だが無理

九%

必要で可能

一一%

合宿強化について

必要無し

五〇%

必要だが無理

一三・三%

必要で可能

三六・七%

練習日数を増やす事には反対であるが合宿強化くらいの事は反対する数が減りかなり強力に合宿制を主張するものもある。

②、③から判断できる事は、大勢は現状が限度と考えているという事である。

参考までに昨年の練習、合宿の時間、日数をあげると

合宿……春二回 連休一回、夏一回、秋二回

(全て、七日間、開講中の合宿は三回)

計 六回

練習……火曜、金曜を除く五日間

春(三・三〇一六・〇〇) 夏秋(二〇〇一五・〇〇)

④強化策を自分が指導者になつたとして考えると、

※小教精鋭主義

……………二二名

※基礎練習を超重点的に

……………五名

※自主性、自覚を持たせる

……………三名

※専任コーチの必要性

……………二名

※個性的プレイヤーを養成する

……………二名

※現状で良い

……………三名

※別に無し

……………二名

小教精鋭主義を主張する理由は、一軍、二軍一諸ではどちらも進歩がない、レギュラーに緊張感を維持させる為である、とか、小人数にして意志の疎通を速かにし、合宿寮制をしいて学年別の区分をなくし、又全員同じ練習をするようにしたい等かなり

極端とも思える意見が、多数あるのに注目したい。基礎練習は、ダッシュとかサーキットなども含む。

自主性云々を主張する者は、二部を当然視したり、自分の体の調子で練習を増減したいなど自主性、自覚の欠除している人達の意見のようにとれる。

⑤現在の部生活に対する矛盾、不満等

無し又は覚悟の上

一九名

自分の弱さから不満がでる

二名

理科の実験、製図が苦しい
勉強もサッカーも中途半ば
技量を主にして選手が決る

一軍、二軍のへだたり
先輩とのつながりが無い

この項でははっきりと学年差が感じられる。即ち四年生では全
て悟りの境地に達していてこれでよかったと満足している（彼
等も低学年の頃は盛んに苦悶していたのだが）他方低学年では
悩みが多方面に渡っている。

総括

前半の生活調査で気がつく事は運動選手にしては睡眠時間が少な
すぎる事であり、日体大生が十時間は摂っているのと比較し問題が
あるのではないかと思う。

疲労度の調査に於いて半数が翌日まで残る程の疲労を感じている
という事はこれと関係あるのではないか。

次に経験者であるが八〇%の人間が経験者であるのにはおどろく
約半数が中学からボールを蹴っているのである。しかし入部までの
ブランクの長さ（ボールを触らない期間）が二年以上のものが七五
%に及ぶのであるから、八〇%経験者であるといってもその実状も
一寸ボールを蹴った事があるという所である。いわゆるすぐ使える
経験者は五%に過ぎないと思われる。

さて本題の意識調査であるが将来への示唆を含んでいるように思

う。まず入部動機に於てサッカーをやりたい者とそうでなく入部す
る者とはっきり二分している事に才一の問題がある。二部低迷につ
いての考え方がはっきり二分しているのと対照してみると興味があ
る。

しかし相関関係は思った程認められない、小教精鋭については次
のような文が有った

「小教精鋭にする具体策としては新一年生を多量に勧誘して一年間
みっちりきたえる。ついて来れない者はどんどん落し、一年後に
残っているものでも、客観的に見て必要最小限部に残す。基準と
しては、素質のある者である。少しぐらい上手でも根性のないも
のは落す。それぐらいの厳しさが必要である。落されたものは愛
好クラブでも作ればよい」とあり、かなり極端とも思える意見が
この他に少なからず存在するのだ。又調査の統計の時解ったのだが
根本的な対策でなく、今日、明日をどうするかという意味にとった
者がかかりいる。もし根本的な対策を構ずるとすれば当然小教主義
をとると言っていた。それ故、小教主義の支持者は一二名を若干上
まれると思われる。

結論として、練習時間、日数とも現在が限度であり、現在でさえ
一軍の人は相当な疲労を翌日に残している。他方現在の練習内容に
対し、積極的な改善策は少く、結局の所、強化の方策はこれ以外の
所から求めねばならない。

そこで合宿寮制、小教精鋭主義が浮かんで来る。近年の四年生に

なつてからハッスルしはじめるという学年別セクシヨナリズムの打破や意志伝達の迅速化などに非常に効果的であり且つ疲労回復にも役立つ。通学時間に一時間前後を要する者が七割も居るのである。

且し、現在の合宿設備では住みたくても住めないのが実状である。

さて、東大サッカー部の伝統に対する意識の低さも大きな問題であるが、これは我々若人が生れる一昔前に輝いた「電燈」であると
 言えと言えない事もないがしかしあまりと物を知らなすぎる。

現在監督の須賀さんが戦後全日本選手権に二度続けて優勝した時のメンバーであると知っている者が何人いようか、正に「啓蒙」の最も強く要求される時である。部誌の持つ意義は非常に大きいといえよう。

積極果敢なグループと、同好会的グループとその中道を歩みつゝ悩むグループと、現在の東大は、この三つが同じような比率で、どのグループも他より抽んでる事もなく、不満と矛盾を感じながら生活している。部員数が五〇名の大台を越えている現在、今までとは違った何らかの方策が要求されねばならないのではないだろうか。

調査 吉田慶次

中島宏介
 安達二郎

才二部

「どうしたら強くなるか」

座談会 一月十七日 合宿所

- 出席者(卒業年度順)
- 新田純興氏(大一年卒)
 - 野津謙氏(大二年卒)
 - 竹腰重丸氏(昭四年卒)
 - 横山陽三氏(昭一六年卒)
 - 須賀敏孝氏(昭一九年卒) 監督
 - 岡野俊一郎氏(昭三一年卒)
 - 高田宗昌氏(昭三四年卒) コーチ
 - 安達二郎氏(四年) 前キャプテン
 - 宇尾誠一氏(四年) 前マネジャー
 - 長田男氏(四年)
 - 石光豊氏(三年) 新キャプテン
 - 樋口周嘉氏(三年) 新マネジャー
 - 平田攻氏(二年)
 - 渡辺翼氏(二年)
 - 坂井忠昭氏(一年) 新駒場キャプテン

岡野 部誌をつくるそうだが、どのような性格か不明だ。単に有志で出すものか、これからも続けるのかそれをはっきりさせてほしい。

安達 四年全部で企画した。昨年（三十八年）の始め会をやり、そのとき、東大のサッカー部は輝かしい伝統を持っているが現役は全然理解なく、先輩の業績をはっきりさせ、現役先輩が一つになり、強くなるその橋渡しにする為であった。その為にはまず歴史を知らなければならぬから、それを新田さんに相談し、そして諸先輩に原稿を依頼した。

あまり時間が無かったので説明が足りなかったが、まず行動を起したのです。

先輩 大変良いことだ。ただそういう趣旨だったらまだ書きようがあったのだが。

安達 京大のコーチャや日体大の人に原稿を依頼したのも、東大が強くなりたいたいからです。両校とも今年強かった事実を認め、そして何故強かったかを知って、現役に強くならなければならぬことを目覚めさせねばならぬからです。

二、部の現状はどうか。

岡野 部生活は、皆好きだからやっている。オリンピックも終って見て始めて選手が参加して良かったなと感ずるものだ。東大の部でも勝つことを才一の目的としたい。楽しかっただけでは駄目だ。もっと敵しいものを必要である。だから、半分に減っても、強くなるなら敵しくやらねばならぬ。

安達 今回の現役部員に対する意識調査（本紙 前頁参照）では、入部動機はサッカーをやりたい者と、部生活を知りたい者と半々

です。

岡野 残りの人達というのは、別にサッカー部でなくても良いのか安達 部を知りたいというのは、精神を養いたいとか、雰囲気味わいたいとかです。入部してからの感想はいろいろありますが、部生活に意義のあることは皆が認めています。部の伝統については三分の二は現在全然関係が無いとしています。また、現在二部にいることについては現在の力量であるとするのと、無理すれば打破れるとするものが六分四分で、練習時間では、九五%が現在の制度に賛成しています。疲労度とか、理科がふえてきたこと等から、これが限度のように思われます。

合宿強化については三割が必要と感じており、自分が指導者になつた場合の強化策については、三分の一が小教精鋭主義を採ります。小教精鋭については、具体的な案として、今のままで一、二軍のどちらもうまくならないから、意志の疎通を良くし、学年制を廃し、合宿を強化、全寮制にするなどです。現在の部生活に対する不満はほとんどありません。

大内 練習を見ていて感じていた通りだ。一番の問題は五十人という人数で、それを少くするのが難しい。

竹腰 しかし二十五人も駒場からくるのは大した事実だよ。昔はそんなに来なかった。レギュラーになれなければ高文を受ければ良いくらいの気持だった。

石光 そのぐらいいはっきりさせれば良いのですが。

大内 僕の頃でも、レギュラーになれないからやめるのと、へたで他人に迷惑するからやめる人と二通りいた。

竹腰 昔は、LBでやれば良いと思ってやめた人もいた。何かに徹底してやるうという空気があった。

岡野 昔はそれができたが今はそうではないのだ。今の部で一つだけ感じるのは、ゲーム中、レギュラーの他の者が冷いことだ。

レギュラーを批判したりすることなどもつての外だ。とにかく、もりたてる寮囲気が大事で、もっと謙虚であるべきだ。先輩の話も聞いて、ちっとも聞くだけで受け入れてくれない(須賀氏出席)

石光 勝つためには、また、何か不合理なこともやらなければならぬ。何か無理をしなければ勝てないように思えてなりません。

野津 そう、その通り。そういうこともスポーツをやって始めて解ることだ。私はスポーツから大きな人生観を得た。

大内 そういう話も、これくらいの人数だから通るので、合宿へ行つて六十人を前にしては、何も言えなくなってしまうよ。

三、OBと現役との接触

岡野 そういうことを伝えることは難しいが具体的にやるには、大内学というのはある意味ではOB全部が指導者だが、現実には監督、コーチにまかせねばならない。こういう寮囲気の問題にしても現役とOBとの気持のつながりを持たせるには、それこそOBの方から努力すべきだ。その為にはOBのいろいろな人が練習を見

に行かねばならない。個人的に選手一人にOB一人がつくぐらいでやらねばならない。そして、技術的なことは気がついたことを監督、コーチに言ってまかせれば良い。技術についてはバラバラに選手にいふべきではないと思う。現役と先輩が接触を図らねばならないときにOBの会をつくり、そこには全部のOBが困難を排しても出なければならぬのではないか。

大内 OBの方も増えてしまい、選手的なOBと同好会的OBにも分れてしまい、忙しかつたりして全然縁の切れているOBも多い。現役についてあてはまるのがOBについてもあてはまる。

竹腰 私も昨年は殆んど見に行かなかつた。

野津 しかし、末広恭二先生も、部長自身が急しい身体なのに、あれだけ見に来られるのですからねえ。あの時はそういうものかなと思つていたが、自然に人間的に、そっちへ持つて行かれてしまふものだ。皆がそういう気持を持つことが伝統になるのだ。

岡野 OBの方から、監督やコーチに対して一年間の慰労会を催さないのが不思議なくらいだ。その為にも、もっとOBがまとまらねばいけない。

大内 こんな四十年もの大先輩を引っぱり出さなくとも、もっと中先輩が一杯いるのに出でてこないではないか。

竹腰 ごく最近の若い先輩に熱意がないよ。

岡野 OBとして勝とうという先輩も少い。LB戦でも何か現役に見せねば駄目だし、現役もOBの良い所をもっとよく見なければ

いけない。チャランポランのゲームをしていては駄目で、もっと良いところを見せてやるうという気がなければならぬ。

野津 末広先生も、選手が一生懸命やるのにスピリットを感じたのだ。チームが敗れた晩は末広先生もくたくたくして眠れなかった。やはり、ゲームは勝たねば駄目だ。

竹腰 負けて良いなら誰でもフェアにやれる。ゲームというのは勝敗を争うのだから勝たねば駄目だ。もちろんいくら一生懸命やっても勝てない限度はある。しかし、一応目標はあるのだ。

岡野 それも現役とOBとが共に盛り上げていかねばならぬ。

OBの側も、きまつた人がでてくるだけでは駄目なんだ。

安達 僕の方からも、ほんの少しの先輩しか話を聞くことはできなかった。

野津 急がしくても、聞きにくれば何かしてやるうという気持はあるのだよ。先輩は聞きにくるのを待っているのだ。

石光 しかし、先輩の話は聞かなければいけないのですか。僕らがやるだけのことをやれば、先輩の方向も解っているのだし、あとはどう近づけばいいというだけではないか。

四、キャプテンはどうあるべきか

竹腰 「俺達が一生懸命やればそれで良いのだ。」その通りだよ。

しかしその一生懸命の程度を高めるのがスポーツなのだ。一生懸命の程度を謙虚に考えて、その限界を高めることだ。

野津 そこをつきつめると、死や宗教の問題になる。東大の部員だ

ったらそこまでいくべきだ。

大内 こんなに一生懸命やったのにどうして文句を言うのだと言いたくなる。しかし、そうして反撃することによって、だんだん程度が上っていくのだ。その点今の現役は低い程度で我慢して楽しんでしまおう。

竹腰 まだやれるという程度を信じて頑張ることだ。

大内 そういうことは、しかし、なかなか解らない、一番はききり解るのは勝つことだ。それ以外にない。

野津 キャプテンも、何人のキャプテンかはききりさせるべきだ。

五十人のキャプテンといたってそれはおさえきれない、そのうち何人掌握すれば良いか見きわめることが大事なのだ。それは社会にでてからも實際役に立つ。

安達 僕は精力の三分の一は部をやめたいという人間の為に使ってきた。

石光 俺は去る者は追わずという主義だと言ったら、安達さんにそれではいけないんだといわれた。

安達 サッカーが好きで東大のサッカー部を選んだのだから、できるだけ俺はその人達と一語にやろうと言うんだよ。今では果して良かたかどうか迷っているが。

野津 その点こそ、十一人をどうするかを考えて行けばおのずから解決がつくのだ。

竹腰 それがレギュラーにどうしても必要ならば頭を下げてもとめ

るべきだ。その時々に必要なに応じてやれば良い。それを信じれば良いのだ。

石光 その人に対して、責任を持っていますか。

竹腰 それは持っていないよ。その人はやったということだ。その人の人生を変えたかも知れないがね。

石光 竹腰さんだから言えたので、僕は言えませんよ。

安達 そうかなあ。僕は言えるよ。サッカーやっていて悪いことないんだから。僕がやってこんなに良かったんだから、どんな奴にもそれを味あわせたいんだよ。

宇尾 そういうことがマイナスになる面もあるのではないか。

竹腰 だから、そういうことを皆、キャプテンがやっていたのでやりきれないよ。先輩達に監督を通して、そういうことをうまく頼むべきだよ。

岡野 だから、僕はある意味でキャプテンは常に一番うまくなり一番チームの為に役立つことで責任はすむのだと思う。

竹腰 こまかいことはうまく持って行き場所を仕分けして、自分が全力を尽し、それについてこさせることが大事だ。

岡野 だから、キャプテンが一生懸命やってそれについてこない奴はすてても良いのだ。

野津 そして、残った人でやるうではないか。それ以上にやるうではないかというのが大切だ。

岡野 理想的に言えば、同好会でも良いという人達を、一年が終っ

たときに、ともかく、勝つ為にやるどころへ持っていければ、それでキャプテンは充分なのではないか。その為には自分がまずやることが必要だがね。

大内 さっきのキャプテンの他の人に対する責任は、他に持ってできる人はでき、できない人はできないのだ。しかし、レギュラーとして必要な人はおがみたおしてもやらせるべきだよ。

石光 しかし、僕には、おがみたおしてまでやってもらう気はありませんよ。

横山 私のおがみたおしてやらせたが戦力を落したときもあった。

大内 残りの人が問題だ。やめた人の穴を他が埋めるといふ気があれば良い。しかし、やめたらすぐ戦力が減ってしまったり、あれが出なければだめだというのは困る。

安達 昨年もレギュラーでやめるといふのがいたが、やめたら強くなるかどうか問題だ。だからやめさせられませんでした。

竹腰 その人間に対する評価をはっきりさせなければならぬ。総合してプラスになるなら残し、うまくてもマイナスならばやめさせる。その計算をキャプテンはしなければならぬ。

大内 それはやめた本人ではなく残る十人の問題である。十人が、居てくれなければ困るといふのならやらせなければならぬ。

竹腰 その通り。その判断は監督しかできない。

野津 あまり練習に出なくても強い奴もいるし、実に面白い問題で

すよ。

竹腰 勝つ為に必要なら頭も下げたし何でもした。それを後悔はしていない。

野津 負けたのですっかりメンバーを変えたら勝った事が何回もあった。

安達 その事で伺いたいのですが、去年は入替戦に勝つ事だけを目標として、もしうまく行かないで失敗したら三部に落ちてしまわないぐらいの覚悟でやったのですが、川瀬が居ないで気分の盛り上りだけで戦うだけでは一部には上れないと京大戦の時に考えたのです。

川瀬の加入がメンタルの面で悪い事は十二分に承知してたのですが、果して我々だけで一部に上る力が一番盛り上ったとしても有ったのですか。

竹腰 今の技術ではどう頑張っても一部で通用するフォワードは川瀬だけだったろうね。四年は皆ますぐなつた。

横山 川瀬は確かに戦力だった。四年の進歩が少くとも止った事だけは確かだ。

岡野 技術的にはね。一言で言えば川瀬の技術を他の四人のフォワードが持っていれば上がる。その程度の差はあるね。そのぐらいの力は川瀬がもっていたよ。

竹腰 三年の川瀬を使えない四年のリーダーシップにも問題があるね。

須賀 あそこで川瀬を入れたのは、川瀬を絶対的に使おうとしていたのではなく、他の人が刺激されてより以上に伸びてくれればよーいと思っていた。それが結極は逆効果になってしまった。それならば、何故他の四人が川瀬がああいう練習をやっているなら何故追い抜いてやろう、俺がやってやろうという空気が出なかつたか。それがさびしいことですよ。

岡野 そういう風に考えるのがふつうの人情ですがね。

安達 川瀬は、自分ではっきり自分の力を認識していて、唯一部復帰の為に東大が勝つ事だけを考えていた。満身に練習もしないで試合するのは彼だつて嫌だつたのだが、やる以上は勝たねばならない、自分の為にだれかがレギュラーを降りても東大サッカー部の為には仕方がないと考えてた、立派な選手根性ですよ、どうして他の部員がこういう選手根性を持つてくれないのかな！

竹腰 戦力的には、はっきりプラスだよ。メンタルの点では接触していないのはっきり言えないがね。

安達 誰を使うかでは、須賀監督や僕の意見と他の現役との意見がはっきり違っていました。技術の評価が違うのですかね。

宇尾 技術の評価は二軍の人にはできないのではないのか。技術が無いのだからメンタルの点だけで評価するのではないか。

岡野 技術的問題だけでとれば、監督やコーチを絶対的に重要視して欲しい。

大内 そのうちの何人の意見を聞けばチームを引っ張っていきけるか

で、その他の人の意見は聞くことはありやせんよ。

竹腰 勝つべきなのだよ。その目標のために判断すべきだ。キャプテンは他の人の言うことなど何を言おうと気にしないだけのものをもつべきだよ。

岡野 そういう寮囲気二軍が持つことが潜越なのだよ。

宇尾 僕も、練習から外れていたけど、そういう寮囲気は感じられませんでしたよ。

大内 ボールが試合中に外へ出ても拾いにいくものが無いね。何故一生懸命やらないかだね。

竹腰 それを喜んでやる寮囲気を作っていくことだね。

大内 キャプテンでは僕ぐらい苦勞したのはいないからね。何しろ二年でキャプテンを引き受けたときには部員が一人もいなくてね。あちこちから引こ張ってきたがそれが高校の先輩ばかりだった。それで勝たねばならなかつたんだ。

岡野 数年前にボート部のコーチに聞いたことだね。そのときの彼の表現は、いかに直系の子分を作ることかで、そいつに引こ張らせなければ部をやっていけないんだ。そういう子分を作ることが才一だと言っていたよ。

安達 もっと民主的に出来ないのかな！せめて東大くらいは。

大内 私のとときは、そういうのが一人もいなかつたんだからね。つくづくキャプテンは孤独だと思つたよ。それからは、一人でやることが私の方針となつたよ。

野津 そういう気持ですよ。一人が熱意でやっているときには必ずついてくるのだ。決して孤独ではないですよ。

竹腰 キャプテンは磁石だと思へばいいな。

大内 だからキャプテンには二通りあるよ。孤独であるのと、子分を作つて強力にやるのとね。

六、これからの方向。 駒場フアーム論

野津 選手制度というのはないのか。

横山 部に入っているのが選手だ。

須賀 一軍と二軍とは五月から分けている。秋合宿ではっきり制限

される。しかしきちつとやっても実験なんかで出てこない。だから一週間のうち二、三日はコンビネーションをくめない日もある。

竹腰 具体的な問題としては五十人もあのグラウンドでやることが物理的に無理だ。一、二年は原則として駒場で練習し、少数が本郷へ通えばよい。駒場をフアームとすれば良いのだ。時間と経済から考えても、ずっと良いのではないか。駒場でみっちり基礎をやつても遅くはない。

岡野 クラマーが東大の練習を見て、良い基礎練習はしている。しかし、才一に、これだけの人数を見るには少くともコーチが五人いる。それだからかも知れないが、才二に一人一人の練習に対する意欲がきわめて少い。たるんだ練習だ、と指摘した。

竹腰 今何をやるうかを注意してやる者がいない。ある練習形式をやることが練習だと思つている。しかし、それでは伸びはない、

何を今やろうとするのかをはっきりしてやることだ。

野津 そんなことを考えないのは選手生活ではない。東大の蹴球部ではないよ。そんなことに先輩を使うのはもったいないよ。

岡野 そこまでつめていくと、同好会的気分の人の排除になる。

大内 その為には人数を減らすことで、解決策としては先程の教養学部で練習することだ。

岡野 それは、誰がコーチをやるかの問題だ。

竹腰 グランドもサッカー部がやっていないからとれないので、頼

めは何とかなるであろう。一番問題はやっぱり指導者だ。

大内 むしろ本郷より駒場の方が大切だね。本郷の人はうまい練習をやっているよ。

七、いかに基礎技術ができていないか

岡野 そのうまいということだがね。今の人がどのくらい基礎ができてい

大内 それが根本問題だ。

宇尾 その判断を、チームのうちのどの段階にいるかできめている。

樋口 僕達は、何も皆が出来ていないから、ハードトレーニングをや

野津 基礎技術をどうしたら修得できるかの問題で、そうなれば又

一つの解決方法がでてくる。

岡野 東大とは違いが、ユースでも最初は向いあって一時間サイドキックだけやらせる。そうしているうちに、これはいけないんだ

なということが自然にわかってくる。東大でそれをやれば、自然

に何を見につけなければならぬかが解ってくるのではないか。

野津 それぐらいのことは端の端の常識ではないですかねえ。

竹腰 それは常識ではないよ。

野津 だけど、東大の選手として出るなら当然だと思いが。

岡野 五十人の部をつめて一つの目的にもつていくのはむずかしいことだ。同好会的気分の人も、そういうところまでもつていく

部の雰囲気をつくるのが大事だし、むずかしい。

安達 しかし、そういう練習をやると、同好会的気分の人が一番熱

心になりますよ。一番先にくずれるのはレギュラーです。

横山 それはそりだ。二軍の人はやれば目に見れてうまくなっ

竹腰 一軍の人はできると思っているんだな。

安達 だから、そういう練習をやるときには先輩に懇切にいぬい

竹腰 できないのをできると思っているのが一番問題だ。

樋口 そういうことはわかっているが、下級生にわからせるにはど

うすればよいか。

岡野 それこそ、コーチ、監督のやる仕事だ。

樋口 今年の方針が、何もできないことから始めることだろう。

石光 今年は昨年より低いポイントから始めます。技術的に言うと

五月末までは身体、スタミナづくりです。

岡野 その技術の具体的な段階、例えばインテップキックを一応正確な角度で蹴れる段階か、それでもできない段階なのか、それを認識しているか。

石光 そのことは、誰もが、全然できていないと評価しています。

安達 昨年も、始めはバントキックから始めだが途中で不安になる。それを、このままで良いのだということをお我々に先輩が納得させて欲しい。

岡野 そういうあせりを監督に素直に言えば良い。

八、最後に

大内 今年はどうなったか決まったのか。

竹腰 監督やコーチは大体了解しているのではないか。

安達 今年は僕達の前の代の人達が代わりばんこに出てくることになつてゐる。

大内 そういうことを先輩達に徹底しなければならぬ。

安達 今は、須賀さん一人に押しつけすぎている。技術のことなどもっと須賀さんを助けてあげてほしい。須賀さん一人の負担にしている。

大内 この辺で決められるものを決めておこり。私としては駒場の問題がうまくいくかいかだと思つた。

須賀 それは引き受けた五年前から考えていたが、うまくいかなかった。

竹腰 指導者がだせないのが切実だ。

大内 O Bの寄金を何とかしかりして、コーチ料を出してやっくらどうか。

野津 それも考えて良いのではないか。職業トレーナーを考へても

良い。

石光 お金をかけてやとっていただいでまでやる必要はないと思ひますが。

竹腰 そうではない。法学を勉強するのに月謝を出して法学博士におしえてもらうのと同じだよ。六法だけじゃものにならない。

岡野 現役のときにはコーチはたまにしかこなさなかったが、言われたことに反発し、よしこの次までにはできるやうにしてやろうと考へたものだ。あまりグランドにこない先輩の言葉を、どこかいいところがあるのではないかと考へて謙虚に受けとるべきだ。

O Bももっとこなければ。

野津 ここ(合宿所)をもっと根拠にして、先輩も金を集めたりして頑張らねば。

文責 長田 綏 男

才三部 他校に学ぶ

一、京大サッカー部強化の方法と実践

京大コーチ 瀬戸 進

関西学生一部リーグ戦でドンジリから脱出する……これのみが命題ですべてが仕組みられて来たことを前提として、理解していただきたい。

一、関西学生一部リーグの戦力の診断

- (1) 上位は低下し下位は上昇して中間に凝集した状態である。
- (2) 技術的には個人的に優れたシューターバックマンがいない。
- (3) ゲームメーカーとされるようなタクティクスにすぐれた展開力のある選手がいない。
- (4) チームプレイとしても視野の狭い局部的サッカーしかできないのではないか？

まとめ 勝敗の立場からみれば点差の少ないワンポイントゲームになる可能性が大であると判断した。

二、自チームの診断

- (1) 体力(広義の)が貧弱で身体的にも技術的にも(競り合い等)「たくましさ」に欠けている。
- (2) サッカー常識の極端な不足。
- (3) ボールコントロールに欠点有り
- (4) シュート能力が最低である。

- (5) ボディバランスの是正。

- (6) 一対一の場面で相手にスピードでドリブルされたら簡単に抜かれる

- (7) B・Mは前年度一度でもリーグ戦を経験している選手で編成できる。F・WはI・Fの唐津のキープ力は関西のどのB・Mにも大体通用するこれをゲームメーカーとしてこれを助ける動きのできる選手が二人おれば最少得点は期待できる。

三、四、二、四制採用について

前提……京大式四、二、四制を生み出す。

- (1) 「失点の少ないサッカーをする」ゴールの正面でディフェンスの厚いこと(真中を固める)が条件である。得点の最終段階においてボールをゴールの正面に運び込んだとき決定的となる。

- (2) 「集団の力で防禦する」才一段階の一対一では絶対的強さがなく、崩されて来たところを才二段階でつぶせばよい、それには忠実なカバーリングしかない。しかし特定のマークメンを持っている選手がカバーリングすることは二重のピンチをまねく。そこで特定のマークメンを持たないロビングH・Bが必要となる。

- (3) 「バック相互の間隔の短縮」バックメンの多いことは単純に考えた場合お互いの距離の間隔は短縮される。従つて距離的には早いカバーリングができるはずである。間合いのつめのスピードの弱さを多少カバーできる。

(4)「相手を下手クソにする」人数が多いことは攻撃側にオープンスペースを狭く感じさせる。感覚的にオープンスペースにパスをして走り込むことに戸惑いとか躊躇が生じるだらう。パスのタイミングがくるいやすく、最悪の状態として足下にボールをつなぐ気になつて「立ちんぼサッカー」になればスピードは低くなる(京大のスピードに弱い欠点がかバーできる)。しかも正確にボールをつなぐ能力が低いとしたら、(現実にもそうであつた失礼ない方だが)、ルーズボールになつたり、ボールコントロールに時間と手数がかかればタックルするチャンスも生じ、カバリングする余裕も生れる。

(5)他のチームは不断はWMシステムで練習しておれば自然と同じ感覚でサッカーをするだらう(しかし様子がおかしいのでわからぬままにゲームが終るだらう(失礼ながら現実にもそうであつた)。特にC・HなどはC・Fがいなわけであるから(四人がC・Fになりうる)特定のマークメンがいないくらいやりずらいものはない。そこにスキが生じるし、ときにC・Fのポジションに入りこむ者が自分のマークカーをひきつれてC・Hと二人をよせる結果にもなる(バックは二人固まったら一以下の力になることが多い)。

(6)「手数を省いた単純なる方法とスピードの要求」F・Wの人数が多ければそれだけ複雑な動きが要求されたり、手数をかけすぎてもスピードを殺したり、いきおい手数をかければ技術水準の

低い段階ではミスも多く生じる結果にもなりかねない。

(7)「中距離パスとキック能力の限界(飛距離的に)」四、二、四制の場合のパスは中距離パスがその基本であらう、残念ながら高度の技術を要するボールは蹴るべくもないが、単純に距離的なキック力を考えた場合、オーム返しに前方に二〇―三〇Mのキック力が限界であつた。かえつてショートパスの場合あらゆる角度のボールを正確にキックする能力の方がより困難性を感じた。

四 チーム作りの段階

(1) チームの理想像

① 最少得点、最少失点

② 精神的抵抗力のある選手の育成(ピンチにさらされても動じない、「根」よく守り続ける粘り強さ、特にFWはジレンマを起さずディフェンスに参加し攻撃のチャンス到来を「根」よく待つし俗称「根くらべ」)。

③ 総合力(集団の力)を攻と防の山場で(チャンスとピンチ)集中的に爆発的に発揮できるようなチームプレイに徹する(俗称助け合ひ運動と集団暴力)。

④ 自己評価の徹底と自己との対決(ホームポジションの全体性の理解と統一性の徹底、それに必要とされるボールテクニク個人チームのタクティクは何か?メンバーの中で個人のなすべき役割と自己の特性の理解から何をトレーニングすべき

か？「精神面では自己との対決」においては、入学試験とい
う難関突破の過程で充分試練もし、鍛錬もされているはずで
ある。それをサッカーという科学性と非科学性の同居してい
る矛盾の集団の中で、学問領域を離れた素裸の人間形成に転
移できる個人となりうるか？

(2) 時期的段階
(1) チームワークは単に精神的結びつきばかりでなく、技術を通じ
ての強い結びつきがあることを忘れてはならない。

才一期計画一四、二、四制の形式・全体性の把握と要求される

技能タクティックスの究明と理解

体力の養成ー全シーズン通じての課題

(イ) 筋力の養成……ウエイトトレーニング(バベル) 隔日九月

まで十月以降週二日

(ロ) 筋持久性……サーキュットトレーニング週二日(二十分負

荷) 合宿中は一日おき。

(ハ) 走力(スピード) 一〇〇Mダッシュのインターバル(五〇〇

Mトラックで直線ダッシュ、コーナージョック) 毎日五周

シーズン中は三周。

(ニ) 呼吸循環機能の持久性

① 十二月～三月合宿前まで一個人技能全般のレベル向上

(クラーマー方式、静的場面で)。

② 三月合宿～五月まで(京都リーグ含む)一四、二、四制

の形式と全体性の把握……ゲーム中心の練習、個人技能全
般のレベル向上(静的場面で)。技能、タクティックスの
問題点の究明(試合を通じて)。

③ 六月～七月(東大戦を含む)一京大式四、二、四制あみ出
しの才一步を踏み出す。

才二期計画一スピードに乗ったまゝの技能の習熟と敵対動作を
中心とした練習からフェイントブレイ、競り合いの強さ、当
りの強さ、タクティックスの向上と根の長続き(粘り強さ)。

① 八月才一次合宿(十日間)一精神的苦痛に耐える根性の養
成一フェイントモーションと技能、タクティックスへの連

関性一スピードに乗ったまゝの技能の発揮と敵対動作・競
り合いながらの技能の習熟一たくましいブレイスケールの
拡大に重点を置く(ホームーション行わず)

② 八月才二次合宿一才一次合宿の固定化とバートブレイの習
熟(ホームーション行わず)

③ 九月～十月中旬(試験中も休みなし) 個人技能、バートブ
レイの反復練習(個人的強さの要求)。

才三期計画一仕上げ期……チームブレイの完成と競り合いの強
さー集団的力の集中的、爆発的発揮に重点を置く。

コーナーキック、フリーキックの徹底(一点にかわりなし)
一ホームーション。

※メンバーの編成一卒業生四人(全負) G・Kも含めて B・M

として守りの責任を持たず、F・WはL・Iに唐津を配シゲ
ームメーカーとしボールキープは自由にさせ、他の3人がレ
シーブできるポジションに動きまわる。R・Iはバックスの
錯乱係、L・Wは縦えのスピードを生かし大きなセンターリ
ングをゴール前に上げることとコーナーキック、ゴール近く
のフリーキック係とし、一発のロングシュート、R・Wは中
盤のパスの期待なしゴール前の混戦からのブッシュの名人。
L・Hは神出鬼没の天才的センスあり自由ホンボウに動かし
た。要は片輪を選手のつきはぎだらけがそれぞれ個性に応じ
て力を発揮したことである。

五リーグ戦中のことども

(1) 関大戦……3対0惨敗、小生国体で不在、練習みれず。反省①
京学大戦の勝利にウチヨウ天、練習中の態度に緊張を欠く。②
己れの力の所在と認識の欠如。3つとも完全なボカ、入場料返
せ!!と怒りたくなる試合、内容的には相手はガタガタに崩れて
いたのに……

(2) 甲南大戦……1対0の敗け。F・W四人中二人負傷、一人は試
合前足首脱臼アウト、後半二三分伊藤(L・W)膝を捻坐、そ
の直後一点とらる。反省①コーチのミスキャストキーリア不
足の選手は決してなれないポジションをさせるべきではない。
穴のあいたところに補充すべし(使う選手は同じであっても配
置をまちがうと相殺される)。②コーチはいかなる偶発的場面

に出会っても冷静沈着であるべし。③コーチは自己の直観的ヒ
ラメキを尊重せよ。④二試合を通じて精神的弱さの暴露と勝負
においては強い影響力を持っていることを痛感させられた。
⑤選手は焦せらず孫子の兵法の如く、作戦要務令の如く敵前
においてみだりに作戦を変更すべからず。コーチ、現役よい薬と
なる。

(3) 対関学戦に際して……ピリか三位確保かの背水の陣を布かされ
た。負傷一人回復(R・I)する。

甲南に敗戦の夜、主将の下宿に酒肴と酒一升持って主脳陣の気
分転換を計ると共に朝の三時まで次の作戦、一週間の練習スケ
ジュール、過去二回の練習試合の経験から(トレリスを参考に
して)徹底的分析を計る。

まとめ

①ホームエーション練習は金、土曜のみでよい。②徹底して基礎
技能の回復をする。理由ホームエーション練習や試合が重なる
個々のプレイに崩れ、乱れが生じている。未熟な段階において
は、基礎技能の乱れはホームエーションをも不可能とする。技術
を通じてのチームワークの乱れにも通ずる。③全員が二部に落
ちたくない!!の悲願に燃えて(ピリは二部転落を意味する京大
の場合)自己の対決に勝ち総力の結集に成功した。④作戦的に
は他の選手を放っても宇野を徹底してねらう。宇野が前半で焦
せれば勝味あり(成功する)、F・Wは外からゴールエリア線

に近くシュートのようなボールを横パスで通す、身体全体で飛びこむ(成功す)。④すべてを投げうって毎日出た、もともと、基本的技術にのみ全神経を集中した。

六、リーグ戦を終わっての反省

(毎日新聞社岩谷氏の綜評がすべてを物語っていると思う。)
「チームプレーに徹し切つた関学」 前略……大まかにいうとまず関学は十一人がチームの動きにありように訓練されている……細かく云えば各選手が走りながら一つの先を読んでプレーするようになりしむけられている。チームゲームで先を読めないというよりは誰れも知っているながら……各校の基本技がチームプレーと関係なしに行われているのに反して関学はチームプレーに必要な基本技を状況に応じてくり返しているという点にどうも違いがありそうだ。この関学に近いプレーをしたのが、個人技にこそ差はあるが京大である。とくにスピードがないだけに、自己を過大評価せず全体にスピードを落して要所にスピードを集めて成功した。中略……関学が個人的にひ弱かっただけに、よけい「チームプレー」への再認識が感じられたリーグともいえる。(岩谷)
コーチとして反省

①技術水準が低く、経験の乏しい選手を多くかゝっているチーム程、チームとしてとるべきホームションに必要な基本技の向上こそよりよいホームション、チームプレーの完成に早道であることを京大を三年みて痛感した。

②京大生の通弊としてすぐに己の力を過信し相手をなめる精神的甘さがある、物の本質をもっともっと冷酷にみつめる必要がある。自己を過大評価してはならない。

七、基本技のポイント

ポデーパーランスの獲得、ステップワーク(フットワークの分析)の研究、ボールコントロールに手数をかけず、ボールの自然の流れを生かす、次の動作への移行は三拍子のリズム感覚を体得する(それ以上時間がかゝらばほとんど相手にボールを奪はれてい

以上

二、リーグ戦を終わって

京大主将 時 森 日出二

とうとう学生生活最後のリーグ戦も終わったのかと思うと、何か、ほっとした気持とともにさびしい気持がわいてくる。

関西リーグで何とか三位に留まることができたのは、今年は各チームとも実力が例年よりかなり低かったせいかもしれない。しかしながら、今年のチームが出発した時には、最近では最弱のチームだ

ろと自他ともに許していたにもかゝらず、リーグ戦では関学に昭和十六年以来二十二年ぶりに勝ったということは、全く予想以上の成績だった。

こゝまで来るには、全くチーム員全体の不断の練習もさることながら、瀬戸コーチの力に与かるところが非常に大きかった。基礎的な技術面、今年採用した四一二四システムに関する新しい考え方など、サッカーに関するあらゆる面、及びその他、チーム員全体の人格形成という面まで色々と指導してもらった。全く感謝の念で一杯だ。

ふりかえれば、昨年のレギュラーの中七名を卒業生として送り出した後前途多難な一年が予想され、とにかく練習に練習を重ねて、何とかチームに負けまいとやってきた。五回もの合宿・インターバルランニング(百米全力走、百米緩走を交互に五千米)、殺人的なサーキットトレーニング・バーベルトレーニング等苦しかった練習、四一二四システムの動きが分らなくなり、練習の途中でグラウンドの真中で議論したこと、それらのつらかった事も今はなつかしく思い出すこととなつた。

それにしても、練習時間が長く、又、激しすぎて学問と両立しなからとの理由で退部者が続出したのには、精神的にはまいった。しかし、その自己批判として、退部者が多いのは、練習が厳しいからだけでなく、サッカー部の空気そのものに人を引きつけておくものが少いからだ、ということも夏の合宿のミーティングで話し合い

人間関係の重要さを再認識させられた。サッカー部だからといってサッカーの上だけでのつながりでは長く続かない。そこには、思想と思想、主義と主義のふれ合いが必要だ、と云う考え方が認識されたのは、我が部にとって、大きな収穫であつた。

とにもかくにも、十月二十七日のリーグ戦の緒戦、対京学大戦をむかえた。京都同志であり、お互に相手の手の内は良く分つてゐるから、瀬戸コーチ、三十七年度卒の根本氏、及び四回生が額を集めて作戦を練つた。実力的には六分四分で京大の不利だと考えていたが、作戦が効を奏して、一〇で緒戦をもにらした。

対関大戦は、三〇と大きく負けたが、三点のうち二点が自滅の点で、全くあきらめられない試合だ。才一戦に勝つた気のゆるみが試合にそのままあらわれたと思う。全く、精神面の弱さを暴露した試合だった。

対甲南大戦は一〇で負けてしまった。甲南大にだけは絶対勝つつもりでリーグ戦に臨んでいた。ところが前半押しに押しながらFWの得点力不足で点を入れることができず、後半逆に、一点入れられて敗けてしまった。

この敗戦は全くのショックで、チームがガタガタになる気ざしが見えた。何しろ、リーグ戦の経験者が少いし、調子の波が大きいので、残る試合に対して悲観的なムードが漂っていた。しかし、ちょうどこの試合を三十六年度、三十七年度卒の先輩が、東京方面からもわざわざ見に来られていたので、下宿で瀬戸氏とO・Bと四回生

とが集って、徹夜で杯をくみ交しながら、サッカーに対する経験談とか、今後のチームのもってゆき方とか、いろいろ話し合った。全くとそのおかげで、気持もおさまり、何とかやってゆけそうだと云う自信もわいてきた。今から考えると、その夜の話し合いは、非常に役に立ったと思っている。

残るは関学と大経大だったので、大経大と勝負するつもりで残り二週間を練習することにした。

まず関学に対しては、小細工を弄してもしかたがないというので、とにかく、春からやってきた四一四システムを完成させ、九月中頃の調子の良い時の状態にもどそうという考えで臨んだ。ところが、試合がはじまってみるとバックスの調子が良く、前年は五分五分、で後半に入って逆にこちらが、左サイドからのセンターリングをRWが走り込んでシュートするというきれいな先駆点を決めてしまった。それからは関学も必死で、次から次へと攻撃をくり返えして来たが、バックスが全く、スライディングに次ぐスライディングで身体全体を使って、死守したという形容がびったりするぐらいに全力を尽して守り切った。タイムアップの笛が聞えた時は、身体全体の力が抜けてゆくように、涙が出るほどうれしかった。この試合ほど、サッカーをやってきてよかったなあと感じたことはなかった。最後の対大経大戦は凡戦で、一一の引き分けに終わった。全く悪い癖で、良い試合をやった後は調子が悪くなるというのを、最後までやってしまった。これも、精神修養の不足のなせるわざだと考

えている。

かくて、何とか無事にリーグ戦を終えて、この四年間サッカーを続けて来て、いろいろ苦しいこともあったが、全くめぐまれたサッカー生活だったとしみじみと感じている次第です。

三、三部転落から

一部昇格までの、茨の道

日体大主将 梅内 巖

終了の笛が鳴った。遂に勝った、勝った。やったぞ、夢にまで見た一部昇格を。

乾く事を知らない涙にくもった遠くの白いゴールポストを眺める時この喜びの陰のあの長い苦しい茨の道が早馬燈のように次々と想い出されるのでした。

想えば今から二年前、我々は関東大学リーグ二部に於て、一ツ橋大学と最下位決定戦を行い、4対1で破れ、更に三部優勝の自由大に、2対1で破れて三部へ転落してしまったのです。その一年を振り返ってみると、実力から見ても当然のことであると思います。不運な時は不運が続くもので、三部に落ちたその年、サッカー部長

が亡くなられました。しかも監督は、他の部の先生であり、キャプテンも変り、部員も私生活が乱れて、部は混乱のどん底に落ちてしまいました。しかし部員はこれも当然の起りうべき事が起ったのであることを良く認識していたので、さほど落胆した様子もなかったようです。我々日体大のサッカー部はこれからどうなるのだろうか？

しかし、この期に当たり当部先輩である斉藤先生を監督として迎えることとなりました。この斉藤監督こそ我々日体大サッカー部を一部に昇格させる原動力となったのです。この時から日体大サッカー部は新しい段階を迎えることとなりました。監督は非常にきびしい人で、まず、門限の厳守、禁酒、禁煙、禁麻雀と私生活の面から改善されました。練習の面に於ても監督自ら選手と同じ様に練習し選手と溶け込み、部全体が練習に熱中し一段ときびしさも加わって来ました。春の合宿は山口で一週間行い、主に基礎プレー、及び基礎体力作りで専念しました。又夏の合宿は青森自衛隊で一週間行いました。この合宿に於ても基礎プレー及び基礎体力作りを矛一としました。夏の合宿が終つてからは学校で、主にレギュラー練習でいよいよフォーメーションの練習を始めました。この頃からポジション争いも激しくなり、今までにない練習が展開されて行きました。その年のリーグ戦の結果は、七戦全胜で、総得点は五十点以上、失点は一点でした。当時三部はA・B・C・Dに別れていたもので三部で優勝するには各ブロックの優勝校と更に優勝決定戦を行わなければ

なりません。我々は国士館大を二対〇、順天堂をも二対〇で破り三部優勝が決りました。更に二部最下位の武蔵大を六対〇で破り二部に返り咲きました。この時のチームの状態を再検討しますと、四年生がまとまり、それに下級生もついてきて、部全体がうまくまとまっていたということです。そして納会の宴席では、私は前のキャプテンに「今度是一部へ、頼むぞ」とバトンを渡されました。私はこの期に及んで年間の目標と練習計画とを、監督、マネジャーを中心として作成しました。まず一部昇格を目標として、一部に勝てるような練習計画を作ることです。そのために、クラマー氏の技術を大量に取り入れました。更にソ連式の方法をも参考として取り入れました。具体的な練習方法として、ショートパス、長距離シュート、練習マッチを中心として基礎体力を付けるため、今年から百米ダッシュを一五回行うことにしました。更に練習は週七日間行うこと、雨の日でも必ず練習することを取り決めました。一日の練習時間は、昼休みに、普通に着更えて一時間の練習マッチを行い、午後は多摩川グラウンドで二時間から三時間です。そして全員寮制ですから、朝八時に起床し、夜はなるべく十時前にマイテイングを終つて寝ることにして、十時間睡眠を目指しました。春の合宿を商知で、夏は十日間、新潟で行いました。一部に上がるには一部以上の練習をすることが必要であることを部員全部に自覚させ又部員五十名もよくこれを認識し、かなりきついと思われた練習によくこらえ、ついてきました。監督は個人のプレーのことについてはとやかくい

わず、なごやかに語り合ひ、「マイペース」で行くという合言葉を
作りました。しかし、どの様なことをしても「勝つ」という根性
を全員にたたき込みました。このようにして、いよいよリーグ戦を
迎えることになりました。リーグ戦中もマイペースを守り、練習は
試合の翌日は一軍自由ということにして、試合の前日も毎日同じ練
習をしました。このようにして二部に優勝することができ、いよ
上大望の一部、二部入替戦にのぞきました。一部の最下位は法政大
学で、一対一の引き分けに終わりました。しかし全員それ程落胆もせ
ず、頑張りさえすれば勝てるという根性がわいて来ました。我々の
たどって来た道は外からみると「タイトロップ」のように見えるか
も知れませんが、毎日の練習の蓄積が決勝戦で法政大学を破る実力
を作ったのだと思います。私はこの二年間の貴重な経験を忘れるこ
とはできません。

ハーフタイム!

合宿所 昨今

合宿所管理人 高橋 戒 三

いま、合宿所は菊の花もようやく終りをつけて山茶花の花が真盛

り、可愛らしい沈丁花のつぼみも小さい頭をよせ合って来る春を待
ってゐるかのように冬の薄陽を浴びながらきびしい寒さを凌いでゐ
ます。

私が合宿所の初代管理人として就職したのが昭和三十二年の十二
月ですから今から丁度満六年前のことです。その頃、農学部の大い
グラウンドの一隅に建てられた合宿所は周囲に一本の草木もない寒々
とした光景でした。これでは伝統ある東大サッカー部がこれから強
く逞ましく伸びて行く力を修練する合宿所としてはあまりに殺風景
な状態に思つたので、それから一生懸命庭木を集め草花を植えて今
日ではまずまずどうやら春は花、夏は緑、秋は菊花と春夏秋冬花絶
えずと言う環境を造り上げました。

一年数十回の合宿、ミーティング、コンパ、デスクッションと選手
諸君が合宿所を利用する機会も非常に多くその折少しでも快適な気
分で過すことが出来るようにとの老婆心から及ばずながらもグラン
ド整備のかたわら庭園造りに努力いたしました。

歳月は流るゝ水の如しとか、いつか、合宿所創設以来六年の年月
が経ってその間幾百名かの選手諸君を送り迎え今日に到りましたが
いまだに合宿所の生活を思い出されて時折いたたくOBの方々のお
便りをなつかしんで居ります。環境は人を作るとか申しませんが愚息
公平も（私事で恐縮ですが）東大サッカー部の環境の中で育つたせ
いか中学時代からサッカーに夢中になり現在は帝都高校サッカー部
選手として東京都代表に選ばれインターハイにライトインナーとし

て出場しました。これは「門前の小僧習わぬ経を読む」のとえの通り東大サッカー部が無意識的に生んだサッカーマンの卵とでも言いましょうか。

ともあれ我東大サッカー部としては捲土重来宿望の一部復帰そして優勝と先輩の成し遂げた栄冠を勝取る時の一日早からんことを祈りつゝ拙文のペンを擱きます。

昭和三十八年十二月十九日

東大よ奮起しろ

正門前太田屋 太田 万造

私がサッカーを見始めたのが小学校一二年の頃だったと思います。子供ながら毎年楽しみに見に行き行って居りました。試合を見ていて球が飛んで来てけがをしたのも今では思い出の一つです。中学生時代に一度サッカーをしてみたいと思いましたがその機会に会えず残念だったものです。今でこそサッカーが相当盛んに行われていますが当時はさほどでもなかったのでしょうか。

東大がスポーツで何が強いかと云えば、サッカー、ボートと誰でも云う通りサッカーは伝統的に強かった、それが終戦後段々と下り今は二部にあまんにしてゐる事はどうした事だろうか。

この二、三年東大が優勝すると云うムードに心のゆるみか昨年は優勝したものゝ入替戦で法政にやぶれた。今年のリーグ戦を見てみると上位に勝て下位に引分すると云ふ事は技術ばかりではなく心のゆるみがあったのではないか、今年は法政が二部に下って来た、三部からは順天堂が上る。上智も成城も強い、防大、自由とて引分に終っている。一試合として油断していけない。今年こそは取りこぼしのない様頑張ってもらいたい。最後に

技術の修得と相俟って強力なる精神力を養いいかなる苦難の障害にも打ち勝って行ける様な選手として一そう練習にはげんで載きたい。—9—

ダックスから一言

ダックス主将 手塚 重郎

私は学生課体育係に勤務している関係上、サッカー部の諸君とは

特に親しく、今はダックスのキャプテンをやっております。

この奇妙な名前の「ダックス」とは八ヶ九年前頃学生課の職員が主体となって、横山さんに足ほどき？を受けたのがはじまりです。

慣れぬ足つきでボールを蹴る内、サッカーにとりつかれてしまいそれからと言うものは仕事と同位置に考える程悩みになりました。ズブの素人がよちよちはじめたところからこの「ダックス」という名前が生れたのですが、このように発展したのは横山さん考案のチビ蹴です。草野球で超満員の御殿下グラウンドからはみ出されて、二食横の金網に囲まれたバスケットコートに小さなゴールを一組立て、くじ引きで紅白に分け、休時間一ぱい休みなしの試合をするところから、雨の降る日も雪の日も、奇妙な風体でのしり合ったり、エキサイトしたり、遂には取組合いになったり、その日の試合に負けると、午後の勤務がはかばかしくなったり、人数が足りないと言つてサッカー部室へ行つて部員をかり出したりで、他の人から気狂い沙汰とからかわれたりする程一生懸命やるからです。この毎日の珍練習の成果がやがて本式の試合に発揮されるようになり、二流実業団や大学三部校あたりとやっても、結構スカッとしたシュートがなくても、勝つ試合が多くなりました。それで試合前の練習では、情けなくなる程見劣りがしても、試合には面白いように勝つのは、いつも狭いバスケットコートで、ゴチャゴチャ狭いゴールをめがけて、もみつきするうちに押し込む技術が生かされるようになったからでしょう。どうしてこつも勝つのだろうかと不思議に思つてあれこれ

考えてみたのですが、一つは毎日一時間足らずの練習でも、狭い網の張ったコートで十人くらいがゴチャゴチャやっていると、スタミナとボールに対する執着心が強くなってくる事、もう一つは狭いゴールにシュートしなければならぬので、ゴール前でのダッシュが俊敏になってゐる事です。よく一、二年のサッカー部員と試合をしましたがズブの素人の我々ダックスは未だ負けたおぼえがありません。最近も挑戦を受ける事になりました。これも勝つてしよう。

さて手前みそはこのくらいにして、サッカー部の試合は我々ダックスのメンバーは欠かさず、口泡を飛ばして応援をしています。今年も又我々の期待を満足させてくれませんでした。

部員の努力を毎日目のあたりに見ているのであまり大きな事は言えませんが、あえて言はせていただければ、どの試合を見ても選手の手が多くが時間一ぱい全力で動きまわられる体力が足らないように気がします。テクニクの練習はもち論大切ですがフルに動ける体力がなくては宝のもちぐされかと思ひます。

身体づくりにもう少し注意を払われてはいかがですか。最後に我々ダックスメンバーは蔭ながら常に東大の一部復帰を心から祈っています。

我々の願いを無にしないように頑張ってください。

東大頑張れ

一女子中学生 渡辺むつみ

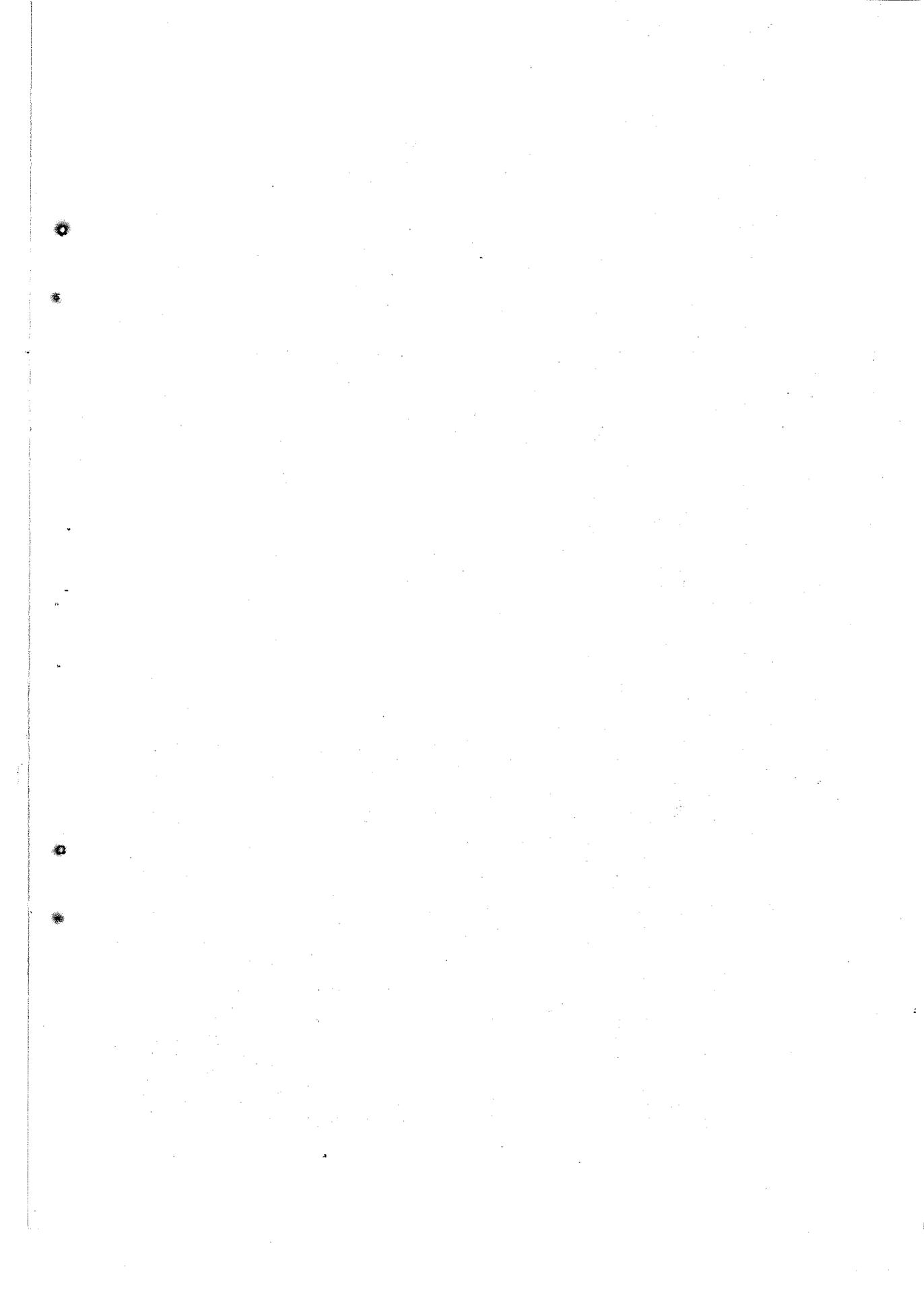
私が「東大サッカー部」を知ったのは、お兄様が私の家へいらっしやるようになった、小学六年生の春でした。それまでの私は「サッカー」といえば足でボールをける運動ぐらいにしか考えていませんでした。時々手や足を傷だらけにし、びっこをひいているお兄様を見て「けがの大安売みたいなスポーツで、いやだなあ」とも思いました。しかし、それは実際にサッカーを見るまでのことでした。

中学にはいり、男の子がサッカーをしているのを見てから、私はサッカーが大好きになりました。そして、規則が解らないながらも、お兄様のいらっしやる東大の応援を始めたのです。

去年のリーグ戦は、私が応援を始めて最初のお兄様の試合、試合のあった翌日の朝は、急いで新聞のスポーツ版を開き、東大を探しました。二部は下の方に小さく出ているのでとても残念でしたが、勝っていた時は本当にうれしく、楽しくなりました。二部で優勝した時は「東大って話に聞いていたより強いんだな」と思いました。それに全勝優勝だったので「入替戦も勝つだろう」と思っていました。しかし、二部の中でやっている時より心配で、一日中、「勝ちますように」とお祈りしていました。翌日の朝、飛び起きて新聞を見ました。今度は大きく載っていました。東大は惜しくも一〇で負けていました。残念で残念で仕方ありませんでしたが、試合

というものは負けチームがあつて勝ちチームも出来るのだと思ひ、「今度の試合に勝てばいいわ」と諦めました。そして十二月の全国大
学選手権、昨年は中央に負けたから今度こそは勝つて欲しいと思つて、毎日祈るような気持で新聞を見ましたが今年も又中央に準々決勝でおしくも破れベスト4に残れませんでした。「どうして勝てないのだろう。中央なんか負けて」私は悲しい気持ちになり、くやしさを一ばいでした。もうサッカーなんていやになつてしまふところでした。しかし、お兄様につれていっていただいたソ連・スウェーデンの試合をみた私は、今までよりも、もっともっとサッカーが好きになりました。緑の芝生の上で白や青のユニフォームに身を包み純白のボールを最後まで追いかける選手達の試合ぶりを見てすごく感激してしまつたのです。規則もだいたい解るようになり、試合を見るおもしろさも増しました。

そして今年の五月祭の時、初めて東大サッカー部の人達を實際に見ることができました。白いユニフォームをまゝとつてグラウンドを駆け廻る選手の人達はとてもステキでした。私は応援していて本当によかつたと思ひました。今年のリーグ戦は惜しくも三位に終つてしまい、それにお兄様も来年の春卒業してしまいます。でも私は応援をやめようとは思ひません。私の心には、あの選手達のボールを追う真剣な姿が焼きつけられています。私は心から叫びます。「東大頑張れ」と。



茶道とサツカー

大山徳子

明けましておめでとうございます。皆様にはおすこやかに新年をお迎えのことゝ心からお慶び申し上げます。旧冬暮もおしませました二十五、六日頃かと思ひます。何でもよいから書いて下さい」との事電話で、何心なくお引受けしてしまいました。暮も三十一日まで何かと心せわしく、又新年早々二日から十日頃までは初釜の先物、其の合間になんとかまとめなければならぬのですが久しくサッカーの見学もおこたっておりますので口出しするいえ書き立てする資格もなしと申して今更懐古録でもあるまいと思案なげ首、其のうち刻々時間がたちとう／＼一九六四年の元旦を迎えました。

それで大変あつかましいことですが我が家の元旦記のようなことになりました。我が家では私共が関西生れのため、いつも元旦には白味噌のおぞう煮をいたゞき、その気分もまださめぬ内に茶室に移り私と嫁の点前で一同茶を一服いたゞきつゝ過ぎ去った年の思い出を語り、又新しい年の行き方など申し合せながら元旦を祝うならわしになっております。又この一家そろっての茶に毎年参加するのが嫁の弟一家です。今年も頂度茶の始まる時間に一家揃って元気な顔を見せてくれました。それで小さな子供も親共の通り一碗の茶をのみほし後は子供は庭に出て遊び親共は茶湯のたぎる音をきゝながら運動の話に花が咲きました。と申しますのは、この嫁の弟は在学当時から馬術部におり、今も尚仕事の合間を利用してコーチに余念がな

い有様。先づ第一に話題になりましたのが部員の日常生活、合宿生活などのあり方、なお先輩、後輩、コーチの仕方などにつきいろいゝるむづかしい問題があると云うこと、これを解決するには技術上のみの訓練だけでなく、なにか心に通りきびしいものを得るための精神修養をしなければならぬ、合宿生活などは精神修養の場には一番効果的だと云うことでした。ある程度きびしくして心身をきたえ、そのきたえぬいの中から滲み出るそこ力のある云うに云はれぬ人情味を共に吸み取り合せてこそ、和の世界が成り立ち、ここに部員一同の団結が出来、おのづから技術上の成果を上げることが出来るのではないでしようか。この技術上の成果についてちよつぱり茶のことにふれた話をいたしました。

茶聖利休の弟子が「茶の通に何か秘伝があるか、あるなら教えて下さい」とたづねたところ「茶には何も秘伝はない、暑い時には冷しいように、寒い時にはあたたかいように」と答えられた。

それはだれでも心得ていることです」と申しますと「それならそのようにしてみなさい利休が客に成りましよう」と云ったそうです。このだれでも心得ていることがなかなか出来にくいものです。ただ技術上だけの寒い時にはあたたかいようにでは心を打つ物もありません。その反対に永年の間、心身共にきたえ上げた修養の結果心のそこから知らず／＼の内に滲み出る真心こそが寒いときにはあたたかいように、暑い時には冷しいようになるのではないでしようか。これはどの社会にも通じることだと思ひます。これは／＼釈迦に説

法になりましたネ、と初笑い致しました。

あかあかと一本の道とほりけり

たまきはる我命なりけり

作者 齊藤茂吉

オリンピック精神

(昭和二年卒)

中村陽吉

新しい年が明けるのは何か新しい生命が生れ出るような清新な感じが致します。『我命なりけり』このとおとしい我命を、老も若きもとこしえに守りぬきたいものです。サッカーのボールを愛撫するよりに地球と云う大きなボールを愛撫して、世界平和の為に高く打ち上げたいものがございます。これが私の念願にして第一の希望でございます。なんでもよいから書いて下さいとの仰せでしたので勝手な事を書きまして貴重なページをけがしましたことを深謝致します。一九六四年一月四日



今度会報が出るそりで四十年近い昔の思い出話でも書こうかと思いましたが、老人は昔の話ばかりしているなぞと自分で人のことを云っていたのを思い出して来年のことでも書くことにしましょう。先週暫くぶりで上京して見ると東京は道路なぞの工事が目についてオリンピックの前景も大分盛んなように見受けられました。その反面余りいたゞけないオリンピック精神も旺盛なんじゃないかと思われれます。

だいいち金メダル、金メダル(あれは鍍金ですけど)と騒ぐけれど一時の何分の一か高く飛び上ったり、一秒の何分の一か早く向うへ行き着くことにどんな意味があるのでしよう。日本人の一人が一等になったって日本という国が速く走ったわけでもなし、私が一等になったのもありません。そりゃあ競技なんだから勝つのもいいでしょうがプロフェッショナルじゃないんですから。．．．プロはショイーをやって飯を喰っているんだから負けると失業しますが、オリンピックに関しては優勝すれば英雄、等に入らなければいけないなぞという考え方はやめた方がいいと思います。アマチュアのスポーツマンシップとはそんなものではない筈です。

私は金メダルで騒ぐより国民の一人でも多くがひなたに出てフツ

トボールを蹴ったり、キャッチボールをしたりする方が大切だという考えです。オリンピック選手の強化のために国が金を出すなぞというのは出す方も、貰う方も、私には見識がないように思われるのです。

金の話が出ましたが、オリンピックで大体七千億円のお金を使うんだそうですが、その大部分は設備や、道路のような跡に残るものを使うんだからいいじゃないかという説があります。それも結構だと思ひますが、その跡に残るものは遊ぶこと、しかも主としてその遊びを見物するのに使うものが大部分じゃないかと思われまます。偶然東京の新聞で見たんですが隅田川に糞尿を流すらしいという記事がありました。どうもお金の使い方の見当が狂っているのじゃああるまいかという気がしてなりません。それに門や、玄間や、客間にばかり金をかける日本住宅の精神と一脈通じているようにも思われます。

お祭りや、お客さんにはかり気を取られないで足の地についた日常生活を考える方が大切だというのが私の云いたいことなのです。

(親和物産勤務)

頑張れば勝つだろう

昭和三年卒 中島健蔵

七面倒臭い横文字を好い可滅読みあきた頃である。研究室の窓から首を伸ばして大講堂の時計を眺めると四時だ。風の工合でボールを蹴る音が池を越えて微かに伝はってくる。あきらめて本をたたき込んで、ぶらぶらグラウンドの方へ歩いて行く。果して蹴球部の人が練習している。こっそり柵にまたがって見渡すと、身体中が蝶番で出来ていて然もその間に奇妙な発條が入っているようなコーチヤーの竹腰が跳ねまはっている。発條のせいだろう、よく転ぶ。

やがて道場の方からゆっくりと人影が一つ近づいてくる。正に部長、工学部の末広先生である。

『何某は今日は調子がなほったね。』

『何某があれでもう少し滑らかになつたら頼もしいんだがね。』

『あれだ、あの調子が試合に出れば文句がないのだがな。』
先生は選手各個人についてまで、むしろ私に説明し教え説かれる形である。学内に居ながら申訳ないと思いつつも先生ほど様子のみこめぬ私は、やむを得ず『ははあ』と気の抜けた返事をしてぼんやりと見ている。

末広先生の蹴球に対する批評は既に一般愛好者の域を脱して居られる。私は先生の痛烈極まる評言をききながら私なりに数日後のリーグ戦を考えて凝々と練習の動きをたどるのである。何かの拍子

三個のボールを同時に使って）とゆう極めて幼稚なものであったが、その間で皆が、案外相当な走力、キックヤストップなどの技術を自然に会得した様に思う。試合中の攻め方も単純で、中盤で球を取ると、ガムシヤラにドリブルした挙句コーナーフラッグ目がけて強く蹴り、ウイングが一目散に走って球に追いつき、敵のバックをかわして素早くセンターリングしたのをシュートして一点というのが定石であった。従って、幼い見物にとっては一番足の早いウイングが何時も花形に見えて人気があった。

然し今でも（一流のプロでも下手なアマでも）、経過こそ複雑になつてきたが、結局この様な形で得点に結びつく場合が相当に多い様に見受ける。尤も、今とはルールが異なっていて、ボールを持ってゐるゴールキーパーにはどんなチャージ（体当たりをしたり持っている球を蹴ること）してもかまわない事になつていたので、キーパーの行動範囲は随分せまくて、球を受ければすぐに手離したし、また二人のフルバックはベナルティーエリアの両角のあたりに仁王立ちになつていて、余り前には出て来なかつたので余計に綺麗に決つたのかも知れない。コーナーキックもトキキックかそれに近い蹴り方で、パーすれすれの所をかすめて向う側のポストの辺に、中程度の強さの球を送るのが名人芸とされていて、キーパーが受ける寸前にジャンプ一番、得点が見られるのにスリルを感じたものであった。キックオフもCからインナーに軽く渡し、これを反対側の敵陣に斜に深く強い球を送り、これを目がけてウイングが殺到するのが定

石であった。近代的な高度の蹴球では不利と分つてきたので、行なわれなくなつたものと思われるが、下手にバックパスしてその儘相手に球を取られてしまふのを昨今よく見かけるが、それ位なら古い戦法の方が時と場合によっては、まだましの様な気がする。コーナーキック、フリーキック、敵陣でのスローインは、何れも得点に結びつくチャンスであるから、全員の配置も良く考へ併せた上で、少し研究してみる必要があるのではなからうか。

一般のレベルが低かつたせいもあるが、一部の限られた人々は中学の初め頃から連日ボールになちんでいたので、試合でも球のキープ力は可成り優れており、予計なパスなどしないで突進したので、その様なスターの何人か加わっているゲームは草試合でも存外楽しめた。

（東大応化教授）

一部復帰は可能か

昭和十二年卒 大内 弘

中学以来の親しい友人であり、私の結婚にも重大な関係をもつ須賀君が、東大の監督をしている中に東大の一部に復帰させたい、その間のお手伝いをしようと思つて、山中湖や検見川の夏合宿にも顔を出し、リーグ戦も殆んど見て、ハミリに撮してみせたりしている中に四年たつてしまった。考えて見ると東大の夏合宿へは私が一番参加していると思う。卒業した年、休暇を全部夏合宿につきこんで彼は会社を辞めたらしいという噂の立った時は別として、終戦後の日光にも宇都宮にも、日光の合宿にも参加した。その合宿の移り変わりはそのまま戦後学生の変遷と同じであつて、私にとってはなつかしいものの一つである。

私が現役であつた頃は私大に比して不利な点が多く、何とか同じ条件で試合できないものだらうかと嘆いたものであつたが、終戦後はかなり条件が似てきてこれなら一部で優勝も可能だと思われたが事實は現状の通り二部優勝もなかなか困難である。帝大時代の私等から見れば羨しい点は、そうして他の学校に比し有利な点は、

- 一、私大と年数の差がない (昔は私大には予科があり、これが三年、学部三年で六年間選手生活が出来るが、帝大は大学三年だけであつた)
- 二、部員が多いこと (リーグ戦前の練習でも十五人集れば良い

方であつたが、今では五十人集っている)

- 三、グラウンドが構内にあること (昔と同じだが、他の大学に比して非常に恵れた条件である)

四、合宿に検見川が使えること (山中湖よりはるかによい) 不利な点は入学試験の難しいこと一点である。(詳しく言えばこれに加えて教養学部の成績で学部がきまるので、昔の高等学校の様な香気な生活が出来ない点も不利な点に入る)

これに比し昔の有利な点は旧制高校の選手、特に主将をつとめた選手でチームの大半を埋めることが出来たことであるが、現在最も不利と思われる入学試験の難しさは昔でも高校、帝大の二度の試験はそうやさしいものではなかつた。スポーツだけしかやらないものは、この二つの関門で帝大へは入れなかつたし、高校の主将選手が必ずしも大学で選手となつた訳でもなく、やめた人も多いのである。

故に戦前の我々から見ると、どうも今の方が恵まれている様に思えてしかたがない。毎年夏合宿を見てみると、練習する人員は昔の二倍以上(多すぎて困る位)練習量も多く、又とり出してやっている個々の練習を見ると、我々当時よりむしろうまいのではないかと思われる。

二、三年前迄は体格がひどく見劣りしたが、昨年などはこれもそう見劣りはしない。いくらかきしゃんな感じがする位で、上背は負けない様である。して見ると高校の有名選手が入らない(これも皆無ではなく比較的少いという事である)これを除いては、むしろ

他校よりも有利だと言える。これでどうして一部復帰出来ないのか
一、試合で持てる技術が生かされないこと。何故か。流行語の一語で片づけられることもできるが、何故根性が出ないのか、もてないのかということになると簡単ではない。又原因も複雑であるかも知れないが、私は先ず自信がなからだと思ふ。全力を使いつくすことが出来るといふ自信、自分達でもやればやれるといふ信念がもてないからだと思ふ。この自信はどうやってつくるといへば、やはり猛練習と烈しい試合でつくるより仕方がないものであらう。

二、頭が悪いこと。これは変な言い方であるが、昔の私から見るとそう言いたくなる。然し頭は悪いはずはなく、少くとも他チームよりは良いはずであるから、これをより正しく言い直すと、頭を使わぬことである。つまり球のない時の状況判断による位置の選定を行わないことと、接触した場合のカンである。カンは必ずしも頭脳の明晰さとはちがうかも知れないが、カンを養うためには練習の数をかけることと、数をはかる時に考へて数をかけることである。結局サッカー意識が不足ということになるのであらう。

現在の東大には戦いに対する信念と、サッカー意識の不足が優勝出来ない理由になっていると思われる。そうしてこの二つを体得するのは烈しい練習と、氣力をこめた試合によるほか仕方がない。これが出来た時一部復帰は可能になる。随

めて大胆な乱暴と思われる結論を言って終りとする。それはこの三年間の間にこの二つを体得出来れば一部へ復帰する。三年間に出来ないならば万年二部になるであらう。

(日立製作所意匠研究所長)

現役生活十五年

昭和三十二年三十六年卒 山本 修

私がサッカーを本格的に始めたのは、昭和二四年、湘南高校一年の時でした。それ以来、大学卒業後も社会人としてサッカーをずっと続け、今春で丁度満十五年になります。文を書くことが、特別下手な私ですが、これを機会にこの十五年の現役生活のいろいろな出来事をただ思い出すままに書き並べてみることに致します。

私が東大に入ったのは昭和二七年でしたが、駒場(教養学部)に一年余計に居て昭和三十年本郷へ進学し、昭和三二年工学部機械工学科を一旦卒業、二年後の昭和三四年化学工学科に学士入学して昭和三六年卒業と、前後七年間東大に在学し、その間ずっとサッカー

部員として過しました。この七年の部生活の間に、大学リーグに出場五回、四回の入替戦を迎えて三回に出場、四回の京都遠征、七回の夏合宿（山中六回、日立一回）に参加し、合宿恒例のマラソンでは、山中湖をとうとう六回廻ったことになりました。部生活を共に過ごした先輩、後輩も昭和二八年から昭和三九年卒まで十二年の永きに渡っています。

私が入学した昭和二七年といえ、旧制の最後の学年の最後の年であり、東大が旧制から新制へと正に移り変わろうとしていた時でした。この年、東大サッカー部は大学リーグ創設以来初めて最下位となり、初めての入替戦に直面することとなりました。リーグ戦優勝回数が多いことと、かつて一度も二部へ落ちたことがないということから、早大と共に関東大学リーグの名門の双壁を誇っていた東大が、初めて入替戦に臨むとあっては、〇日現役共に悲壮な感慨を持ったものでした。しかし、入替戦では青山学院大に四対一で快勝し、しかもその後、この年から開設された第一回全国大学選手権大会に於て、関東大学リーグの強敵を次々に敗って堂々たる優勝を成し遂げ、旧制東大最後の面目をみせてくれたものでした。

完全に新制に切り替った翌二八年からの四年間は、旧制時代に築かれた東大の輝かしい伝統をどのようにして新制東大の手で受け継いでゆき、更に新しい伝統をどのようにして創り出してゆくかの試練の日々であったといえましよう。旧制から新制へ移ったことによる客観的条件の変化の中で最も大きなものは、それまでの人材供給源

であった旧制高校が無くなったことではないかと思えます。旧制東大には、旧制高校で鍛えられ、インターハイで活躍した選手が入って来ていたのに引替え、新制度になって、新入生にそういう期待が持てなくなったからには、今後のサッカー部の部員を四年間の在学中にどのようにして鍛え、技術的にも体力的にもそしてまた精神的にも一人前の選手に育ててゆくかが重大な問題でした。このような意味から、東大サッカー部の将来は如何にあるべきかについて、当時私達は私達なりに真剣に考え、話し合い、その年その年にいろいろな試みを行ってはみました。しかし、私達の努力が至らなかつたため、新制東大のよって立つべき新しい基礎を遂に確立することができないうちに、四年後の二部転落という結果を迎えたのでした。

昭和二八年、一勝五敗、六位。昭和二九年、六戦全敗、再び最下位、入替戦は法大に圧勝。昭和三十年、一勝五敗、明大と同率最下位、（翌年から一部八校制となるため入替戦はなし）。そして昭和三一年、私達が最高学年の年でありました。この年、新しく監督に田村先生を迎え、先生は自らの研究生活を犠牲にしてまで、この一年間私達と練習を共にして下さり、私達も何とかその期待に応えるべくガンバったつもりでしたが、リーグ戦全敗で最下位となり、入替戦法大に先取得点しながら遂に二点目が入らず、後半走りまけて一対二で敗れたのでした。試合の後、田村監督が私達に「泣くな!! 敗けて流す涙には何の価値もない」といいながら、ポロポロ涙をこぼされた時、私達は本当に無念でした。人生に二度と来ない学生時代に、

心から打込んで部生活を過してみると、それはそれ自体勝敗を超越して意義のあることには違いありませんが、勝負である以上、勝ち抜いて初めてそれだけ部生活に徹し切れたと自信を持つことが出来るものだといえましょう。

昭和三二年から東大は二部にあつて、一部復帰という十字架を背負った時代を迎えました。昭和三四年、私は機会を得て復学、再び現役部員として二部リーグ戦に出場し、その年二部転落後初めて優勝しましたが入替戦でまた法大に敗れ、翌三五年には二部四位と、遂に一部復帰の悲願は達成できないまゝに三六年三月卒業、後輩の健闘を期待する身となりました。その後、二部では三七年に優勝、入替戦で三度法大に敗れています。幸い近年に部員の層の厚みも増し、須賀監督の長年の御努力もあつて新しい基盤が育ちつゝあるかに聞いています。何時の日にか、「東大一部復帰成る」の祝盃を挙げられることを心から期待しています。

今度は私が社会人となつてからのことをお話したいと思ひます。昭和三二年に卒業して三四年に復学するまでの二年間は帝人に勤務し、主として松山工場で過しました。入社当時帝人松山工場にはサッカー部がなく、そうかといつて長年親んで来たサッカーを急に止めるのでは余りに淋しいと思ひ、初めは地元高校OBで編成されたクラブチームに入れてもらつてやっていますが、その秋工場のチームを自分の手で創設しました。幸い、高校でやったことがあるというのが二名あり、その協力を得て、工場内に部員募集のポスターを張

り、寄宿舎を廻つて人を集め、工場内にあつた松の木を切つて来てゴールポストを作り、サッカーのルールから教えて、ポツポツ練習を始めました。勿論大変弱いチームで、いつも敗けてばかりでしたが、翌三三年国体の県予選でたまたま強敵の東洋レヨン愛媛が大会に出るの留守中に運よく優勝し、四国予選には敗けましたが、愛媛新聞に新興チームとして記事が出たりしたおかげで会社も力を入れてくれるようになり、私がサッカーのテストをして県下の高校サッカー部から四名採用したりなどしました。私がこのように面倒を見たのは、三四年五月までですが、その後順調に強くなり今は完全に四国一の強豪として全国大会には必ず顔を出すようになっています。メンバーはもう創立当初とは大巾に変わっていますが、何といつても自分が創つたチームがこのように強くなったことは我事のように嬉しく喜んでおります。

それから昭和三六年、二度目の卒業後は千代田化工建設に入社し、現在は同社のサッカー部で活躍しています。千代田のサッカー部は昭和三二年に元全日本選手、早大OBの加納孝氏が中心になつて出来たチームで、三菱サッカーリーグに加盟する他、顧客筋の数社と定期戦をやつており、関東実業団リーグには三七年に加入し、同年四部、三八年三部と連続優勝して三九年度二部昇格が決定しています。昨三八年度の戦績は三菱リーグ三位、東京実業団選手権二位、実業団リーグ三部優勝、年間二六試合、十七勝八敗一分の好成績ですが、東大二軍との練習試合では昨年、一昨年とまだ勝てないでい

ます。実業団のサッカーをやりながらつくづく思うことは、サッカーがずいぶん寿命長く楽しめるものだと思います。どのチームにも結構御年寄がいるもので、千代田化工にも御大加納氏（四四才、一橋大OB佐藤氏（四十才）がまだ現役でやっていますし、かくいう私も満三十才にして昨年のチーム総得点四五点中十九点を挙げて千代田化工のエースを誇っている次第であり、少なくとも十年は現役でやってゆくつもりです。千代田化工でやっている他に、現在サンデーキッカーズというクラブチームにも加入しています。このクラブは昭和三二年秋新潟高校OBと東大駒場寮サッカー同好会OBとが中心になって作られたものですが、特定のチームにかたよらず、同好の士を広く集めて日曜のサッカーを楽しもうということをもットーとしており、いわゆるクラブチームの殆どが学校OBの集合であるのに比べて、入会資格に制限のない純粋のクラブチームとして特異な存在であり、自由業の人や、会社にチームのない人など、他にボールを蹴る機会のないサッカー愛好者の入会を大いに歓迎しています。創立初の一戦は武蔵野一中、可愛い中学生に「オジサンガンバレ」といわれながら一対四で敗れ、以後なるべく弱い所を探しては武者修業を積み、昭和三五年からはクラブリーグに加入、三七、三八年と二年連続ブロック優勝を成し遂げています。我がサンデーキッカーズにとってはY.C.A.C.のようにグラウンドとクラブハウスを持つことが夢のまた夢であり、日本蹴球協会さえ専用グラウンドを持たない現状から考えると全く途方もないことでしょ

うが、日本のサッカーも学校と会社だけを基盤としている時代から脱して諸外国のようにいろいろの形のクラブチームが発達して初めて「小学生からサッカーを」という層の厚さに到達できるものではないかと思ひ、このようなクラブチームの芽をなんとか育てたいものだと思います。（千代田化工勤務）

古河電工サッカー部について

昭和三十三年卒 小林 昭夫

私は昭和三十三年に卒業し、三年間、古河電工の現役に籍を置き部生活を送った。会社のグラウンドを持たぬ悲しさから、各大学や公私設のグラウンドを借り求めて、不慣れた練習を続ける状態だったがその頃は補強を受けたとはいへ、都市対抗に初めて優勝し、その後三大タイトル獲得までの、チームとしては昇り坂のムードにあった時期で、切角推せんを受けながら、天皇杯出場を辞退しなければならぬ苦しい現状から見ると、まさに、今昔の感があった。少しオーバーな言い方をすれば、いわゆる良き時代に、日本を代表するような選手達と好きなサッカーを共にすることの出来たのは、私自身に

入替戦 雑感

(三十八年卒) 梅村 洋

早いものです。法大との入替戦に敗れてから一年過ぎました。負けた後の虚脱感から毎日グラウンドと喫茶店とをうろろろしていたのが昨年の此頃です。三年の時なら、何故負けたのか、足りなかった練習は何だったのかと、又次の日からボールを蹴っていたにちがいないのに……又一年の時の入替戦の時は、事実よしとはりきったのですが……うろろろするしか、外にどうしようもない気分でした。

今度蹴球部、部誌を作るということで、それは良い。一つ素的な小話でも考えるかと思っていたところ、余談はあいならぬどうしでも入替戦の事を書けとの、編集子の注文、入替戦経験者はまた一年前の重い気分を筆をとります。

が敗けた経過を書くのも芸がない。といってあの時の精神状態等とは片腹痛い。で得点の説教師調で紙面をうめまます。

今年は日体大、昨年は日大、間に丁度東京大学、えい、いっそ改名して大日本大とでもしたら、……昇格したチームに共通している点は、動きの速さ、と同時に二部では一番動けたチームでした。やはり一部になる為には、又二部で他をよせつけずに勝つ為にも速い動きと、たくましいスタミナが必要ですよ。

他の練習などしなくても、この二点だけで楽に一部になれると思いが如何にしよう。頭では勝てません。コンビネーションなどは、毎日一緒に居るだけで出来ること。それより毎日走り回る事です。一にダッシュ。二にダッシュ。強靱な体力無しに、勝負には勝てないと思えます。

万遍なく色々の技術を身につけ、諸々の練習を、というより、たゞ一つ自信をもてるものを養うことが大切でないでしょうか。入替戦の時の後半のあせりを思いうかべます。ぎこちない攻防をたがいに繰り返した前半、次第にどうにもならない様子が見えはじめた時です。どうしていつものことが出来ないのだ。

もたもたしている法大の足下をスカッと一発やっつてやれ。気もちばかり先になり、十一人が、一つの焦点に仲々しぼれません。あれほど余裕をもってしくんだ試合だったのにと

だが、今反省してみますと、あと一步の強靱さに欠けていたと思っています。成程、良いチームでした。がふてぶてしさは、身についていませんでした。強いチームを目標に練習を続けたのですが、やはり、身につけられなかったこと、それが、強さであり、ふてぶてしさでした。最近のチームには全く無いものです。一人一人づつ筋の通った図太いチームになって下さい。一年、一年と築いて下さい。

負けて泣くならなんとやら——

(勸業銀行勤務)

一年後に思うこと

昭和三十八年卒 高橋 一修

(一)

入替戦で敗れ去ってから一年余り、まだあの記憶は生々しい。運動不足のためか、不眠症になると、天井を見つめながら考えることは、いつのまにかサッカーのことになりはじめのうちは先日から始まったクラブ・リーグの愉しいことなど想像しているのだが、そのうち、あの敗北の場面を思い浮べて、いたたまれなくなり、ますます目が冴えてくる、ということがしばしばである。特に、一対〇で負けて、しかもその一点が自分のミスだと考えると、原罪意識を背負った修道者みたいで、一生心の傷といえは大げさだが、心の片隅の陰として残るのではないかと、思うだけでもゾッとしないことである。だから、昨年度の連中にかけて期待は、単なる一先輩としての応援ばかりでなく、我が心の鎮静剤として勝利を勝ちとってほしかったという切なる個人的願望でもあったのである。なにしろ、我々の時は、梅村が云っていたように二年計画の一年目の捨石だったのであり、しかも昨年度の戦力は我々の時より落ちてないと称せられていたのに、それが……と云いはじめると、歳に似合わないグチになるようだからやめることにする。とにかく、後輩達よ、一人の気の小さい男を早く安眠させてほしいものだ。

(二)

四年間の部生活で何といっても楽しい思い出は合宿生活のことだ。計算してみると、四年間で約百五十日に近い合宿生活を送っていた。昨夏、一応先輩ヅラして検見川へ合宿を見物にいった、何てひどいことをやってんだろうと今さらながら感心したりしたが、そういう苦しいことはみんな忘れて楽しい思い出だけが残っているのは幸せなことだと思う。合宿によって得た教訓と利益はそれこそはかりしれないものがある。たとえば、着物を着たりぬいだりすることが一番遅かった自分が迅速かつ正確になったのは合宿の奇妙な効用だし、世にいう赤本を読むようになり、それもはたの目を気にせず心ゆくまで読むことができたのは合宿なればこそである。(この点は、随分熱心に見えたらしく、皆から笑われたものだが、仕入れて来た本が合宿の後には姿を消すのはどうしてだったのだろうか……)けれども、何といってもサッカーを離れての合宿の一番の効用は、自分の専門外のことも学ぶ者、自分と性格の違う者、年令の違う者とつきあうことによって、いわゆる「類は友を呼ぶ」戒の遊び友達からは得ることのできない若干の教養(たとえば、ある晩、中村から卵には無精子卵とかいうのがあって、そこから買って来た卵を暖めていてもヒョコにならない、ということを教えてもらって、感謝し、同時に恥かいたことがあった。)と、そしてとりわけというもののに關する自己の経験を豊かにし、幾らかなりとも、自己を高めるための糧とする機会を得たことである。

今、考えるのだが、若者が何日間か、一つ所に集って肉体的鍛練を通じてスポーツ的人格を高め合い、一つのこと打ちこんでいたということは何と素晴らしいことだろうか。自分としても、あの入替戦の前二週間程の大学生活最後の合宿生活は、不思議なことだが前に述べた敗北の苦い味とは切り離されて、何かしら充実したものとして心に甦ってくる。あの日から何日間かは、云いようのない挫折感、虚脱感にとらわれていた。けれども、それと共に、二週間のあいだ、一つの事に我れを忘れたあとの、満ち足りた、誇らしいような、少しばかり感傷のまじった気持が同居していたのである。その感情を思い出しては、一人いとおしみ、それを与えてくれたサッカー部への愛着を限りなく感ずるこの頃である。

(法学部 大学院生)

御結婚、おめでとうございます

(昭和三十八年度)

岡野俊一郎氏

実倉千代子様と、十一月十八日、東京会館で、挙式なさいました。恋愛結婚とのお話です。

尚、新居は左記の通りでございます。

文京区竹早町三五 水谷荘

折原 一雄氏

菊地博子様と、三月三日、学生会館にて挙式なさいました。恋愛結婚とのお話です。

名古屋市中種区代万町虹ヶ岡住宅、中一四一
四〇四

原 靖二郎氏

大城谷美左恵様と、十二月十一日学生会館で挙式なさいました。お見合兼恋愛結婚とのお話です。

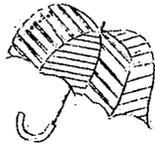
川崎市木月伊勢町二三〇二、富士鉄川崎製鋼所
社宅、二号館二一

西野 宏氏

落合佐興子様と十二月一日、大阪松坂屋にて挙式なさいました。恋愛結婚とのお話です

大阪府箕面市桜ヶ岡四一一

住商桜ヶ岡荘二二号



浜口 幸久氏

岡本加奈子様と十一月十二日、パレスホテルで挙式なさいました。お見合兼恋愛結婚とのお話です

本林 徹氏

畔上いち子様と十月二十七日、東京会館で挙式なさいました。お見合兼恋愛結婚とのお話です。

世田谷区太子堂町 三二

調布市佐須町 九一五

高山 武彦氏

真野恵美子様と、七月五日パレスホテルにて挙式なさいました。恋愛結婚とのお話です。

三浦 二郎氏

今田弘子様と六月二日、名古屋にて挙式なさいました。恋愛結婚とのお話です。

杉並区久我山三ノ一四三（以前と変わりません）

名古屋市北区旅原町 四一五一

梅本荘アパート

佐藤 英夫氏

野沢喜久子様と五月二十五日、光輪閣にて挙式なさいました。恋愛結婚とのお話です。

杉並区上高井戸 四一一九〇四

尚今後御結婚なされる方々、編集係（運動会内）まで御一報下されば幸いです。

安達 良英氏

伊藤文様と九月二十七日、学士会館で、挙式なさいました。恋愛結婚とのお話です。

北九州市八幡区祇園町 三

吉田 二陸氏

森藤房枝様と本年一月五日、広島ライアンス教会で挙式なさいました。見合兼恋愛結婚だそうです。

川崎市下小田中一二五九 麻生末吉氏方

マネジャー雑感

宇尾誠 一

こんな題で書くところまで終りそうであるが、思い出すまゝ気のむくまゝに書いていきたいと思う。

マネジャーというものに関係ができたのは一年の一月、当時のマネジャー齊藤さんより、サブ・マネジャーをやってくれと言われた時からである。次の年も山根さんの下でサブ、そして一昨年の一二月よりマネジャー、丸三年もあきもせずよくやったなあとは思っただけです。ただ残念なのは部員としての練習が十分にできなかったことです。一年の夏すぎより。安達キャプテン、宇尾マネジャーが現在の四年生の暗黙の了解となっており、なんの抵抗もなく宇尾マネジャーが生まれました。このことに僕は全然不満もなかったし、自分はマネジャーという仕事が好きであったし、自分が一番適任であると思っていたので、現在でもこのことについては後悔していません。ただ練習ができなかったことが残念でたまりません。二年、三年のときはサブでしたので、マネジャーを練習のかたわらにできましたが、四年となりマネジャーとなると、練習の片手間にやるということはできなくなりました。時間的に重なるときも多く、又、練習で疲れるとめんどくさくなるため、余り練習に精を出すこともできず、本当に本意な一年間であったと思っています。しかし、そんなこともリーグ戦で勝つことに比べればちっちゃなこと、勝

つためには僕としてはマネジャーとして立派にやれば良いので、練習や、試合では他の部員に一生懸命やってもらおうとひそかに思っていたわけです。しかしリーグ戦では勝つことができませんでした。どうして勝てなかったかを考えてみると、ついでにないから敗けたのだとは少しも感じられませんでした。試合をみても、弱いから敗けたのであり、当然敗けるのがあたりまえだとしか感じられませんでした。二部の中では東大は練習の質でも量でも他校に劣っていたとは思っていません。ただ意欲と気力が足りなかったのだと思います。リーグ戦中の練習でも、練習はやっているのだが、所謂練習のための練習でしかなかったと思います。バックスのクリアアの練習をみても、無理してクリアアする人はまれで、ミスをするのがいやなのか、楽をしたいからか知りませんが、楽な状態でしかクリアアしないので、一応ナイス・クリアアということになります。が、試合となると大切なところで蹴れないということになります。フォワーズもゴール前のここぞという時に逃げたり、シュートをうっても逃げ腰であるためはずしたり、シュートが不可能なときでも責任のがれのためにシュートしたり、回りで見ていても、歯がゆい限りでした。バックからフォードに出るパスは少くとも二部では一番良かったし、中盤では良くボールが回るし、フアールを余りしないし、スマートなチームでした。しかし、ゴールに対する執念は外でみる限り、痛烈には感じられませんでした。バックスはゴールを守ることを忘れ、フォワーズはゴールの中にボールを何としても入

れるということ忘れ、いたずらにボールを回すことで終わってしま
いました。これは一人一人の部員の自覚のなさにも原因があったと
思います。部員数の多いことは結構なことです。秋の一年生の合宿
など、一年生だけで二チームでき、試合ができました。このことは
他の部員数の少ない学校からみると、うらやましいことだと思いま
す。しかし現実とは言えば、部員数の多いこと必ずしも層の厚さに
はつながらず、かえってマイナスの面がでてきました。御殿下グラ
ンド一面では全員が十分に練習することができませんでした。そし
て夏から一軍・二軍に分けて、一軍の人がなるべく密度の濃い、強
くなる練習をできるようにしても、はたしてその目的が達せられて
いたかは疑問です。リーグ戦中の練習をみても腹が立つばかり
で、どうしてレギラーの連中は自分の重責を自覚し、東大サッカー
部のため、又自分達の練習を犠牲にしている二軍の人のために一生
懸命頑張らないのだろう。二軍の人のもっと一軍の練習に
心から協力し、君達の後には我々がついているぞとレギラーをはげ
まさないのであろうか。不思議でもあったし、同時にさびしくも思
いました。各々が東大サッカー部に於ける自分の位置を深く認識し、
自分の役割を黙々とはたしていくことが少かったことが去年の不振
となったのだと僕は思います。そしてこのことについては部員の人
々に深く反省してもらい、今後の踏台としていただきたいと思っ
ています。

今、マネジャーとしての自分を顧みると、『ついていた』と思

ます。いろいろ不都合なこともありましたが、みな僕の希望通りに
いきました。秋のレギラー合宿のとき、まかないをしてもらう人を
みつめることが不可能にも思えたときでも、検見川の合宿所のまか
ないのおばさんの手が空いていたり、又、天候にも恵まれました。
御殿下のグラウンドはサッカー部が独占的に使うことができなくて、
運動会、学校の公の行事のときはグラウンドを空けなくてはならない
のですが、これらの行事が雨でのび、我々の練習にさしつかえるこ
ともなく、一度などリーグ戦も他でやらなくてはならなくなりまし
たがこれもうまくいきました。会計の方も収支がトン／＼で繰越し
てきた赤字も少し少くなりそうですし、基金の方も今迄不明確であ
ったのが一応ハッキリしました。トレーニング・コートも余り良い
ものではありませんが、以外と安くてきましたし、今度は安達の奮
闘により東大蹴球部誌の創刊号もできそうです。そういう意味に於
いて幸せなマネジャーであったと思います。そしてこれは先輩、現
役の方々のご指導とご協力なくしてはできなかつたことで、ここに
安東部長、須賀監督、新田さん以下の先輩の皆様、安達キャプテン
以下の現役の部員にこの一年間の至らなかつたことをおわびし、又、
ご援助に深く感謝の意を表して、この雑文を終わりたいと思います。
どうもありがとうございました。

四年かかつて学んだ事

長 田 綏 男

人が二年でするところを四年かけ、部を追い出されてやっと法学部に進学することになりました。四年間に何をやったかというのと、専ら遊んでいたというのが正しいでしょう。それでは四年も無駄に過ぎたかというのと、他の人がどう見ようとも、僕にとっては貴重な四年間でした。特に部の四年目は、それまでの二十余年に得たものにも劣らない程の経験と思考とを与えてくれました。勉強は決して四年間ですべて終えなければならぬものではなく、短くとも自己の一生、さらにはもっと未来までのものさしで見ると思っています。しかし経験は、それが与えられた時でなければできなく、さらに自分に積極的に与えなければできないもので、運動部生活の経験は、凡そ他のもので置きかえられるものではないでしょう。その経験から何を引き出すかは各人の自由ですが、凡そ引きだし得るものすべて、さらにはそれ以上のものを得たと確信しています。それが何かは、またホラを吹いていると言われそうですので、今後の行動から判断してもらえたら幸いです。沢山得たものの一つだけ挙げましょう。それは実力主義です。実力ある者だけが試合に出、実力の無い者は勿論、普段実力があっても調子の悪い者は出さないということ。上級生も下級生もありません。

しれません。しかし、そのことが運動のように明らかに出来ない実社会に於て、しばしば矛盾することがあると見聞きするのであえて意を強くしたのです。サッカー部を一つの会社に見て考えることがあるのですが、資本の力という大きな或る意味では決定的な力はあるので、会社内では実力に相応した地位が与えられ、さらには真に実力の有る者を集めることがその会社の伸びる力であるべきだし、さらには、日本の会社もその方向になるのだと思います。考えをもっと広げると、各人が実力に応じた所得を得られる世の中にしていかなければならないということにもなります。学歴や閥が物を言うのではなく実力が物を言わねばなりません。個人にひるがえって、不満不平を言う前に自分の力を正しく評価し、黙って実力をつけ、正しく処置しなければならぬようにしむけることです。また同時に他の人の力も正しく認めることです。

このことは、部の経験とそれを土台にして考えながら学びとったもので、もっと勉強すると、特に経済学を勉強すると修正しなければならなくなるとは思います。もっとも世の中が進むと、皆で働いて得たものを平等にわけることがより理想となるかもしれません。しかし、この原則は現在はそのうちがたつたものではないと信じます。まだまだ、もっと大事だと思ふことをたくさん学びとりました。人はすべて信頼し切らなければいけないとか、その他多くを頭の中で概念ではなく、部の体験から学んだのです。しかし、自身の力だけで得たのでは決してありません。同じ鍋のおかずを食った同級生

は勿論のこと、諸先輩及び後輩（但し部学年での）にじかに触れ、話をすることにより吸収したものです。自分というものができるとは、いかにまわりの人や、他の人のおかげをこうむるかはかりしれないものです。何と他の人がすばらしく見えるでしょう。皆自分にはないものを持っているからです。しかし、それに感心してただけではそれだけのことです。自分にも何程かの長所があるでしょう。その長所と調和させながら他の人の長所を積極的にとりいれるように努力することです。そして、さらに自分の長所を伸ばすことです。それにあたっては決して自分の主体性を見失ってはならないということです。

このことはサッカーについて言えば自分の長所を伸ばし人の長所を学ぶことです。いかに人の長所をいれようとしても、そのために自分の長所が生かせなかったり、かえって死んでしまったら何にもありません。しかし、誰にもその人なりの長所があります。足だけは速いとか、フュイントだけはうまいとか、ブレイはさしてうまくないがスタミナは人に負けないとか、それを下級生も、もっと自信をもってどんどん伸ばし、さらにその上で他の人から言われたり、他の人の長所を見て、自分のものに消化しながらとりいれることで自分の長所を伸ばすことは監督の方針と矛盾するものではありません。それどころか作戦をより正確に運ぶことなのです。各人がすべて長所を生かし、そしてもし試合に負けたのなら、何ら悔を残すこととは無いと思います。四年間も、人によっては授業に出ている時間

より多くの時間ボールを蹴るのでから、決して悔いないように時間を使うことを心がけたいと思います。

何を偉そうなことを書くだけは書きよると思う人もあるでしょうがサッカーの記事で埋まることでしょうから、気楽に眺めて下さい。

新マネジャー 雑感

主務 樋口 周嘉

一年の時から何かと世話好きだった。ライン引きも、ボール詰めも、まず自分からやったつもりだった。それが、駒場マネジャーを経て、サッカー部のマネジャーという座に通じる、一本道の出発点だとも知らずに。まあ、一年の時そんな風に過したにしても、そして二年で、駒場のマネジャーをやったにしても、サッカーがうまければ、マネジャーにならずに済んだかもしれない。だから今更こんなことを云うのは、自分の無力さを柵に上げての、愚痴にすぎないかもしれないが、ひと度、世話人づいてしまうと、どうしても抜けられないのが、この世の中らしい。三年の時の一年間は、マネジャー的をことは、一切抜きにして、頑張りたい、という宣

言でスタートしながら、バトンを引き継ぐ段になると、このザマだ。だから……といつては変に聞えるかもしれないが、今の一年、二年の中の誰かを……折角上手になって試合に出てやろうという意気込みの誰かを……来年の、そして再来年のマネージャーとして育てつつ、今年のサブ・マネージャーとして使つて行こうという気が、なかなか起らない、白羽の矢を立てられた奴が、自分の経験からして、可哀そうでならない気がするからだ、かといつて、このままでは、マネージャーとしての自分の仕事が増大する一方だし、ジレンマに陥る。結局は誰かを使うことになるのだろうか……。

一月六日から十日まで 運動会主催のキャプテン合宿に、マネージャーしながら、自費参加してみた。まず第一に、他の部の状況を知るのも大切だと思つたからだ。合宿は、非常に楽しく、有意義なものだった。夜のミーティングも終り、寝る前の一時、ストーブを囲んでの話に、合気道部では、キャプテンの他に、副将が三名、マネージャーが八名いるというのを聞いて驚いた。それぞれのマネージャーの役目は聞かなかつたが、サッカー部では、一人ずつしか居ないといつたら、逆に驚かれてしまい、運動会用、学連用、会計用と少くとも三人は、置いたらどうかとも云われた。なるほどとは思つてみても、そうはいかないのが、現状だし、何でもかんでも一人でやってしまった方が、うまく行くと云つたら、負け惜みと聞こえるだろうか。

とにかく、この一年マネージャーをやることになった。何とかし

て、プレイング・マネージャーを実現したいと思つているし、一試合位は、リーグ戦に出たい、とも思っている。そうでもしなければ、キャプテン合宿最後のクロス・カントリーで、他部のキャプテン連中に、一人を除いては、負けなかつた粘りが泣いてしまふと思うからだ。しかし、今年は、国公立大会の当番校だし、初めて七帝戦に出場するしで、思う様には、いかないだろうが、ただ、常に、我が部が最もやりやすい状態で、練習し、試合ができる様に、頑張るつもりでいる。先輩方、よろしく、御指導、御援助の程、御願ひ致します。

サッカーに関する はしりがきの総括

川瀬隆弘

大学に入った当初は何をやつたらよいのか解らなかつたものである。サッカーをやればよいようなものだったけれどあいく健康をそこねていたから、文化サークルに入つたり自治会を少し手伝つたりしたけれど全て中途半端であつた。文化サークルに「生理的」異和感を抱きながら、自分はやはりスポーツマンなのだと思つたり

した。そのような感覚とならんで、更に、僕の心の中で「サッカー」というものが整理されてなかったということが、総てのことに對して「寄り道」意識とでもいうものを与え、中途半端なかかわらせ方しかさせなかったのではないかと思つてゐる。自分もつとのびのびと楽しくやれることが他にあるのじゃないかという意識である。私にとってそれは、他でもないサッカーであつた。

ユースのための遠征、病氣、団体、インターハイ、受験準備、入学、上京という慌しさの中で、自分にとってサッカーが何であつたのかということ振り返る余裕はなかつた。次々と与えられた目標に對して何つていくだけの生活といつてよかつたろう。病氣になつた時、「高校時代が人生の総てではないんだから」と正當な指摘をして慰めてくれた人に対して心情的に反撥を感じたような自分を懐しく思ひだすことができる。

好きだからやらずにはいられないという段階から、サッカーに對していろいろな事を考えはじめたのは、高三の夏、病院のベッドの中でであつたろう。その時までには、僕は世界の中心だつた。正確には、周囲を自分との關係から切り離しては考えられなかつたといつた方がいだろう。そんな僕にとって、サッカー部が相交わらず活動を続けていくという全く当り前の事実がある種の驚きであつた。いいようもない寂しさをもってその貴重な発見を反趨した。何かが、いや総てが崩壊していくという感情と必死で斗わなければならなかつたのである。それ以来だといつてよい、僕が自分を世界の中心だ

と錯覚しなくなつたのは、

高三の団体、インターハイ予選をもって、僕の「華やかな」サッカー生活は表面的には、終りをつける。しかし、精神的には生きつづけていたのである。それはこの文章の最初に書いた通りである。人が「過去」を回想する場合、不可避的に通さざるを得ない「美化」というスクリーンを、僕の場合にも使うことを許してもらふなら、ある時期に自分を「賭けた」といい得ることは、慌しさの中だけでは決して死なないのである。人間は過去と断絶した形で生きることが多くの場合、不可能である。過去は現在に何らかの形で結びつこうとする。こうして、サッカーは、私の現在に結びつこうとして強烈な自己運動を展開する。もちろんそのことは、サッカーを続けてやるといふような表面的なことをさすのではない。そうであるなら僕は一生、サッカーをやりつづければならない。そうではなくて、経験の内面化を要求したにすぎないのである。人が、経験を意識として定着することによって成長するものである限り、経験の過去と現在への重層化が常に要求されつづけるのである。このことによつてのみ「あの頃は楽しかつた」といふ以上の意味を、「思ひ出」が持ち得ることになる。そのような作業をなし得ない限り、高校時代の恵まれた球歴は、いわばパラダイス・ロストとして僕の逃避所となることによつて、マイナスの影響を与える以上にはなり得ないだろうと思われた。こうして、僕は、もう一度サッカーと對決することになる。といふことはもう一度やってみるといふことに他なら

ない。スポーツとは所詮、考えるだけのものでもなく、鑑賞するだけのものでもないのだから。

僕が大学二年の春、東大サッカーに入れてもらったのは、こうしてである。もっとも、こんなかたくなるしい理由だけではないことも確かだ。それまで僕は、休暇が近づくと真先に帰った。上京以来、喧騒と悲しみの街と思われた東京と違って、広島にはサークル共同体があると思ったからである。思うに、僕のサッカーをやりたいという気持は、他でもないサークル共同体を求めるといふ気持でもあったに違いない。寂しかったのであろう。

入部の結末は夏、京大戦終了後における退部であった。サークル性を求めて入ったことも否定できないにしても、やはり僕は、サッカーに関して、高校の時と同様に、「実力の世界」「勝負への執着」を第一義に考えることしかできなかったようだ。練習ができなくなれば、それは原因がどこであれ脱落である。かくして、僕にとっては退部は文字通りの脱落であった。そしてそのことは皮肉にも、私に、もはやサッカーは過去のものであるという認識を得させることによつて、消極的な意味ではあるが目的を果させてくれた。精神的にもサッカーは終わったのである。もはや、御殿下クラブにおけるサッカーは、いってみれば「余生」にすぎない。

はしりがきの総括と題するキザな文章はここで終る訳であるが、最後に今秋の三ヶ月のリーグ戦の経験から感じたことを語らうと思う。入部の事情はさておくとして、今まででお解りであろう、今秋

は僕にとって、二年の時とは逆に、サークル性を求めること以外には動機はあり得ない。しかし、本来サークル性とは、僕の如く九月から入ってくるというような「異邦人」を排除するところにまさに存在する一つの精神的共同体に他ならなかったのである。何をかいわんやである。僕が、リーグ戦中における姿勢を「勝負」と「力」ということで貫こうと決心したのは、僕のそういう変則的な在り方による。そしてそれを背後から支えてくれたものが、他ならぬ僕がもはや捨ててしまったつもり「昔日」に関する誇りであったとは、二重のパラドックスという他はない。

完

部生活考

二年 平田攻 渡 辺 翼

サッカー部に入って二年、僕等は、もう部の中核になってしまいました。この短かい、然し長い二年間を省て、そして、今後の僕の立場が如何にあるべきかを考えて僕等の問題としての悩みや、希望を書いてみたいと思います。もし、諸先輩が、僕等の気持を理解して下さい、叱咤して下さいさるなり、御教示下さるなりして下さいと、それに過ぐる喜びは、ない訳です。

まず第一に、我々が――先輩の方々も同じだったと思います

――一番悩んでいるのは、勉強をしなけりゃならないと言う事です。理科では成績の如何が、学部、学科を規制しますから、そして、文科では、それが、就職に迄ひびいて来ますから、成績を良くする事も一つの問題ですが、それ以上に、他の学生が夜も寝ないで勉強している時に、我々としては、少なからざるあせりを感じずにはいられません。本当に勉強せずに卒業して、一体如何なるんだろう、と考えるとぞっとします。然し、一方ではサッカーをやる者として

――東大でサッカーをやる者として――何かを犠牲にしなければならぬ事は必定だ、と案外素直に、考えてもいるのです。そして、この犠牲にしなければならぬ何かとは、遊びであり、読書であり、そして勉強でもあるのです。その為には夜の大部分の時間があけられてゐる訳ですが、どうも中々、勉強出来ません。練習で疲れ果てていまずと、麻雀をやったり、酒を飲んだりする気にはなっても、勉強する気には、どうしてもなれない時が多いのです。意志の弱さ――先輩に叱られる前に逃げを打っておきます――、これは、我々が今後、解決しなければならぬ問題でしょう。

さて、第二の問題は、我々が何の為にサッカーをしているかと言う事です。それは一部に上る為でしょうか、確かに我々は皆一部に上り一部で試合をしたいと望み、かつそのように努力しています。然しそれよりもっと大きな事は、我々が皆サッカーが大好きだと云う事です。これはサッカー部 員全部の中で唯一の共通点で

はないでしょうか。好きだからこそ向上心があるのです。唯、一部に上るだけという名目では我々については行けないし、愛着も湧かないでしょう。我々が下級生―特に初心者―に対する時、彼等を上手にしようと思えると共に、彼らがサッカーが好きになってくれるようにと願ひながら接しているのです。

さて話は移りますが、今度この御誌を出すことになった理由の重要の一つは、縦の連絡を緊密にすると云う事ではないでしょうか。即ちもっと明確に云えば先輩と我々現役との間に有機的な繋がりを作ろうと考えての事と思います。確かに今迄、我々は先輩は偉くて怖いものと多分に考えていました。そして先輩と我々との間にいつも距離をおいて考え、その結果、自から作った距離の故に先輩と気楽に話し合えない悩みをかこつて来ました。我々はこの距離を打破る事に依つて、先輩との有機的つながりを可能にしようと思ひます。ただ部誌を出して満足するのではなくて、

ところが、我々が今先輩に対して感じていると同じ悩みが我々同志の間にも在るのです。同学年の間でも、上級生下級生との間でも。現役は現役同志で、学年は学年同志で、同じ利害、悩みを持ってゐるにはちがいないのですが、然し、お互同志、中々、卒直に話し合う機会も持たないし、心の中でも逃れてしまう様な場合が多いのです。これも、我々の内部で解決していかなければならない、大きな問題だと思ひます。

さて大分、いいかげんな事を書いて来ましたが、一応、二人で結

論を出した事を書いて、筆をおきたいと思います。

まず、我々は「自分に勝」たなければいけない、これは、今年一年間のスローガンにしたいと思います。確かに自己に勝つ事は容易な事ではありませんが、努力しだいで勝てると、「信ずる」事が必要かと思えます。少なくとも途中で妥協はしないつもりです。第二に「考えて実行する」と言い、我々が逃れ得ない性格はともかく、「実行に」特に重点をおきたいと思えます。我々はよく考え、よく悩み、よく絶望します。所がこれは反趨し、反趨して、こなれる頃になって、まずいと吐き出す様なものです。我々は生半可でも、消化が悪くても、のみこんで、すぐ実行に移したいと思えます。多少の失敗、下痢は気にしていません。

結局、二人で考えた事は、何か無責任な放言の様になってしまいました。今年も、毎年くり返される悩みを背おって、頑張って行きたいと思えます。どうか、きびしく見守って下さい。

「サッカーとラグビー」

二年 石丸 悌司

○サッカーとラグビーそのものの相違

一般に、ラグビーは「力」、サッカーは「技」という観念がある様ですが、ラグビーに於ては、自分が球を持つと、まず前進して、自軍の最先端とならねば、味方はすべてオフサイドになるので、相手の妨害を、蹴ったり拳で殴ったりしない限り、どの様にしてでも防いで良く、当然、馬力にものを言わせる事になり、サッカーでは、御存知の通り技術がより必要を訳です。しかし、この観念は、レベルの向上に従って、否定されねばならない、と思えます。ラグビーでも、唯ガムシヤラに突進するよりも、策術を用い、連携してプレーした方が、効果が大きく、又能率的な事が再々あり、その為の技術は、決して一概にサッカーのそれよりも簡単だ、とは言えず、特にバックスのそれは相当なものだと思えます。サッカーでも高次になればなる程、シュートやタックル等の決定的瞬間には、ラグビー以上の強引き、力強さでない、決らない事はいくらかもある、と思えます。

次に、今仮りに、サッカーに於て、ハンドリング、プッシング、ホールディング等を許し、前方へのパスを禁じ、ゴール・ポストやバーを取り除き、楯円球としたならば、必然的にラグビーに似たものになるでしょう。

細い点では、走り方が少し異なるかもしれませんが。ラグビーでは、タックルを受けても、倒れ難い様、重心を下げ、腰を低くし、踵を地面につけて走る、という必要性もあるからです。

又、キックの方法も全然違います。ラグビーでは、サッカーで言う「腰の押し出し」をしないのです。自分では、ラグビーの癖は、そんなにっていない積りでしたが、やはり相当影響がある様で、まだ抜け切れません。そもそも、キックをする動機に相違があり、ラグビーでは、地域の挽回か、人がいないで味方又は自分が最も早く追いつけそうな所へ、パンントを上げる位しかせず、味方の足許への正解なパス等、考えられないのです。従って、大体の方向と距離さえ正しければよく、ラグビーも、この点の技術では、問題になりません。

少し実戦的には、サッカーでは、球に味方が二人も三人も集百事は、ゴール前位しかあり得ないのですが、ラグビーでは、フォワードは球への密集が一番の仕事であり、バックスは転開を主眼にします。僕は幸いにも、バックスしかやらなかったので、今でもあまり球に寄百癖はないはずで。

その他、具体的には、種々相違がありますが、同じ球技であり、相手があって、その背後に球を運びこんで、得点とするのですから、根本は同じだと思います。どちらも、持久性、機敏性、柔軟性、パワー、スピードを基礎にし、技術を備え、不屈の精神力を必要とするのですから。その他、全スポーツに共有の、「カン」とでも呼ぶ

べき身のこなしも、両者ともが要求している様に思います。

○サッカー部とラグビー部との相違

先にも述べましたが、東大ラグビー部には二週間位しか関係しませんでしたので、はっきりと書く資格がないと思います。唯、去年の春現在、練習時間が二時間程で少し短く、週六日練習、部員が七十名程、練習後入浴出来る、といった点がサッカー部と少し違うだけで、やはり一年生が雑用をさせられます。

唯、個々の練習内容は全然異り、文字通り砂にまみれてしまします。初歩の間は本当に怪我が多く、東大の場合、初めて始める人が殆んどですから、新入部員も大半以上はついていけない様ですし、ともかく代謝が激しいので、部員の多い事も気にならぬ様でした。下手をすれば死にもする程、体と体とを接触させ、グラウンドにぶつけるので、サッカー以上に健康管理は大切でしょう。その為、シィズンオフも、長くとっている様です。

又、部員の体つきも、ちょっと違う様です。やはり鍛える事によって、人間の体は、合目的になるらしく、ラグビーの方は横巾、厚みがある様ですし、サッカーの方がスマートで、軽快そうです。サッカーは、スピードを非常に要求するからでしょうが。

ラグビーの球は、よく人生に例えられます。これは一度弾んだらどちらに転がるか、予測がつかない、という事なのですが、僕は、いい意味で、サッカーに於ても、球に、もともと執着して、こそぞ、という時には、食いついて離れない位の、ド根性で、やって

ゆきたい、と思っっています。

柔道からサッカーへの転向

草野干夫

中学三年における一年間の授験勉強により、精神的肉体的欠陥を痛切に感じ、浦高に入ってから柔道を始めた。最初の半年間は毎日上級生から床にたたきつけられ全身傷だらけだった。階段を手をつかねばあがれなかったが、それでもなお練習をつづけたのは、心身ともに普通の人に対抗できるものにしたかったからであり、退部することを敗北と考えたからであった。二、三年になって部生活に慣れるに従って、余裕が出てきて気持ちも大きくなり、まわりの猛者達に同化されて、樂天的になってきた。又個人個人のつながりが非常に強く、まったくあからさまに思っていることをズケズケ言うことができた。部の内部には活気と力強さがみなぎっていた。この激闘気の中で高校生活を送ってきた。これとまったく逆に予備校で受験勉強というみじめな殻に閉じ込められて、非常に緊張した毎日を通したため、このうっぶんを大学で晴らしてやろうと考え、特に高校

時代非常にあこがれていたサッカーをやるうと意気こんでいた。しかしいざ大学に入って、数千の学生に圧倒されて、果して自分のうな身体の小さな人間に運動部に入ってやっていく能力があるのだからかと不安感に襲われて、サッカー部に入ることをあきらめていた。だがスポーツに対する愛着が強く、ついに柔道という個人対個人のスポートをやることになってしまった。入部した日は練習を見学していたが、翌日、上級生を投げてやるうと殊勝な気を起して、背負い投げをかけたとたん肩の骨を脱臼して、出鼻をくじかれてしまった。顧問に「君はこの状態では柔道は無理かもしれない。」といわれ目の前が真暗になってしまった。二、三日考えたあげく退部をすることに決心した。憂うつな日が続き、意地でもサッカーをやるうとやるうと思ひ、何となく入部してしまった。ところが入部した時の第一印象が非常によかった。(浦高出身の安達さんがいるという安心感、部員が親しく話しかけてくれた。為に気分一新、黙々と苦しい練習に励んだ。だが普通の人より身体が弱いという考えが頭にこびりついていたので、『このまま皆についていけるかどうか、おそらくついていけない。倒れたらやめよう。』と思っていた。つゆ時に入り胃を悪くし、合宿前の練習でついに一歩も動けないほど疲労してしまった。その時はやめようかと思つたが、やめたらそれっきり弱者の仲間入りだと考え、ついに合宿にも参加してしまった。合宿に入ってからはずこぶる好調(高校の時、柔道の合宿で朝、昼二時間半づつ練習をやり夜は体力のある連中が睡眠の邪魔をして充

分な休養をとらせてくれなかったが、この合宿では充分睡眠がとれたからであろう。)、おかげで部生活を続ける自信がついた。又これとともに不満がでてきた。縦のつながり(各学年ごとの連帯感)は充分感じられるが、学年を越えたつながり(がほとんど感じられない。過去三年間の柔道生活では、こういつた断層は全くなく、完全な一団体となっていたので非常に強く意識される。

はじめての経験

平井邦彦

誠に相済まないことだったが、僕は東大の運動部は全部弱いからサッカー部も例にもれず弱いに違いないと思っていた。高校の時、遊びにサッカーをよくやって好きだったからほんの軽い気持ちでサッカー部に入った。ほんの遊び気分の程度だった。ところが入ってみて驚いた。キャプテン以下上級生は今年こそは一部昇格だとはりきっているし、練習もきついそうだし、同じ一年生を見ても経験者も多く、正直なところ僕は「こりゃあ、えらいところに入った。」と内心恐ろしくなった。この時びっくりしたのをよく覚えていて、そ

れからもうほとんど一年近くなるが、ほんとうに早い。その間にボールつめ、ラインひき、ネット張り、グラウンド整備と一通りの事を人並にやってきた。こんなことは僕にはみんな初めての経験だから珍らしくて別に嫌なことではなかった。でも自分から進んでやるようなことはなかったが、一年近くたってはまだ本当にサッカーをしたような気持ちにならない。

「東大サッカー部で一年練習しました」なんてことは恥ずかしくて言えない。僕の寮でよく「お前、サッカーをやっているんだってな」とよく言われるけど、その度に「いやあ、まだ球捨いですよ」とかなんとか言ってごまかす。「俺はサッカーをやっている」とはっきり言えるぐらい上手に早くなりたい。でも気分ばかりそうで自分の力を見ると全く情けなくなる。一番大切なキックが未だに全然出来ない。ある上級生の言葉によれば、僕のインステップキックは全く見ちゃあられないそうだ。ある時グラウンドでけていたら竹腰先生がわざわざ来てコーチして下さった。僕のキックがおかしくて見ちゃいられたかったのかも知れない。「手をぶらぶらさせずに大きく振れ、あごを引いて胸をはれ。深く踏み込め。足首を伸ばしてバックスウィングを大きくして腰を出せ。」と注意されたが一回ボールをけるのに、これだけ一つ一つ考えてやるのかと思うと気が遠くなった。全くサッカーは難しいとつくづくわかった。それと僕の最大の悩みは鈍足である。最後のダッシュの度に僕は言い知れぬ劣等感に悩み人知れず涙がこぼれそうになる。こぼれたこと

はまだない。

「ああ、もっと早く走れたら」

でも最初に比べたら上手になったと思うから今からも一生けん命練習を続けようと思う。最初入った頃は四年生はみんなどこかのおやじのように見えて恐ろしかったが、慣れてみるとみんないい人で、他の上級生もみんないい人ばかりだ。今まで上級生と親しく話した事などなかったから僕にはめずらしく見えおもしろい。僕ももうすぐ二年生だが、そうなればいよいよ「平井さん」と「さん」をつけてよばれるようになる。「平井さん」だなんて考えただけでゾクッとし何だか恥ずかしい。でもやっぱりちょっとうれしい。聞けば二年生の時が一番大切な時だそう。進学のことや、その他将来な事などいろいろな事が気になりだすと言う。又ある上級生が、二年生の時に上手にならなければ絶対にだめだ。だから僕にもしっかりやれと言ってくれたが、二年生とはそういうものかなあとはいちよつと不安になった。でも今は僕は別に悩み事もないし、これと言っておもしろくない事は何もない。それに今はサッカーが好きだから張り切ってやらうと思ってる。

リーグ戦

三浦 重

昨年は入部以来、故障の連続でまともに練習できず、自分自身不本意でもあったし、チームにも迷惑を掛けたことと聞いています。僣越のようですが試合、特にリーグ戦に出て少くもチームの十一分の一の責任を負いながら練習不足で不調を託すことは許されずまゝい。まして六十人からの部員を擁する我がサッカー部です。試合の度にキャプテンが云われたように、試合は十一人でやるのでなくて全サッカー部がやるものだとしてリーグ戦のことを思い出しながら今、強く感じます。それだけに、故障だとか、まだ一年でリーグ戦は初めてだからとか云う甘さはあり得ない訳で、その点昨年は不本意だったわけです。

結局リーグ戦では対自由学園、成城の二試合に出たことになりませんが二試合とも勝てずに残念であります。成城との試合はともかく、対自由学園戦など何もしないうちに、いつの間にか試合が終ってしまつたようでキツネにつままれた心地です。試合というのはいやである最中は一生懸命のつもりでも後から考え直すと不満が多いもので今と云っては不満だらけの二試合です。最も大きな不満と云えば、これだけのことをすればよいという義務的なサッカーしか出来なかつたことで以後は自分の思い通りのサッカーを自由に出来るようになりたいと思っています。より以上のスタミナと技術の獲得によって

終り

「今年の希望」

見米絃一

先輩から部誌を作るから何か書けと云われた。書けと云われると書けなくなるのは僕だけではあるまい。原稿用紙を前にしていたら小学校の頃の作分の時間が思い出されてきた。出さなければ先生（先輩）にしかられる。

正月のことだから、気分を新たに生意気のようにだが今年の抱負でも並べて責任をはたすことにしたい。ところで今年は辰年、辰は龍で龍虎と称せられ十二支のうちでも最も強い動物？の一つ。別に十支と新年の願いに関係は無いが、今年は何事にも強くなりたいたい。サッカーにも、勉強にも、さらに酒にも、女にも、と書くところ、それでもサッカー部員かとしかられそうだが、御安心めされ小生生来真面目な男で通ってござる。いや失礼しました。本誌を読まれる方々は浅草の兄ちゃん連では無く、立派な紳士諸氏、もっと厳粛にならねばいけない。

強き者、汝の名は男なりで、男はなんといっても強くなければいけない。男性の女性化論吹き飛ばせだ。ところが強くなるためには鍛えねばならない。人間は一面何にでも榮をしたがる性質がある、この本能を理性でもって抑制し、目的達成の為に一次的快感を犠牲にするが、そうすること自身に新たに二次的快感、満足を見出す。ある人はこれを自分との闘いと云い、他の人は理性の勝利と云う。いずれにしても、人間はそうすることによって進歩してきたし、こ

れからも永遠にそうするだろう。時には怠慢が襲って来るし、倦怠も隠れて来るだろうが、それもまたすぐ過ぎ去ってくれる。

今年は全てにもっと情熱をもって取組もう。心は常に熱く、頭は常に冷静で、全ての人に誠実でありたい。そんな気持で新年を迎えた。毎年同じ事を希っているのかも知れない。それでいてできない。がまた今年も新しい希望と目的を心に画いた。さあ、頑張ろう。

一月十二日 記

現役部員紹介

—— 四年生 ——

安達二郎 経済学部 浦和高出身 キーパー以外全て

僕のサッカー歴は中学校一年にはじまる。三年の時浦和市の大会で春秋とも優勝し 県民大会で二位となる。

浦和高では一年の時ハーフセンターを勤めインターハイに優勝した。国体も二度出場した。先ず悔いのない思いである。

東大ではキーパー以外全ポジションを公式戦で経験した。特に京大戦ではR・W・C・H・C・F・R・Hと四回とも異ったポジションをやったのは、対抗戦史上僕だけではないかと思っている。

しかし専門は〇日であるが。兄も四年前主将を勤めた。

以上の経歴からすれば僕はスポーツ狂のように思えるが、実は水泳とサッカー以外は殆んど好まない。野球、プロレス。ボクシングなど全く興味も知識も持ちあわせない。

昔から音楽が好きで、一度でいいから指揮者になってベートーベンの作品を自分なりに演奏してみたいと夢見ている。

ボールを蹴るよりも静かに古典音楽を聞いたり、その中で思索にふける方がずっと好きである。

それでも試験間際になってまでサッカーの本を作りたいと思つて寝ずに頑張っているくらいだからサッカーについて、とやかく言う方が間違っているのだろう。

音楽とともに一生の伴侶である事は間違いない。もう一つ伴侶が増えても人間を大きくしてその穴を埋めていく覚悟である

宇尾誠一

法学部

日比谷高出身

バック、マネジャー

今一番考えなくてはいけないことは、部員数がとつともなく多いということであろう。(このことは選手層を厚くする欠くべからざる条件ではあるが。)そしてこの部員数の多いということにより日頃の練習が充分にできないということである。一年のときからうまいと目されている人はそれでも良いだろうが、それほどうまくなく、これからうまくなる可能性をもった人々

がうまくならない。伸びないということとなる。二部の他の学校は人数が少ないので、一年よりレギュラーにまじって十分に練習をしておき、試合をみていこうまいとかきれいなパスが出るということはないが、一人一人がとも頑張っており、温室

育ちでない頑張りやズブトサが感じられる。東大にはないとは言えないが、なんとか頑張るところが他の学校より少ないのではないか。そしてこれは一軍・二軍という区別がなんか特権階級の見地から自覚されており、一軍としてのきびしさ二軍としてのきびしさが余りないところにも一因があるのでないか。今は丁度一番むずかしいときだと思う。所謂東大の伝統を守っていくのと、クラブチーム的になるという二つの道の分れ目であると思う。部員が一人一人自覚して頑張りのあるチームにしてほしい。

小川 肇

経済学部

教大付属出身

F B

中学時代インナー(目が出ず)

僕は今迄に、二回サッカーをやめようと思った事がある。一度は高校二年の時、他の連中が勉強を理由にやめると云い出したので、僕もその気になった。しかし結局、先輩の話の聞いたりして、続ける事になったが、それで良かったと思っっている。もしあの時やめても実際には、殆ど勉強しなかっただろうと思う。もう一度は、大学三年の春、慢性化していた肉バネが再

び悪化、全く練習もできなくなったので、やめたくなった。その時、僕は本当に再起不能だと思ったのだ。僕にとっては、満足に練習もできず、試合にも出れない部生活は考えられなかった。しかし、その時も夏迄休部して、ゆっくり足を休ませたのが良く、夏からは練習に再び加わる事ができた。

三年の秋のリーグ戦が、僕にとって一番調子の良いシーズンだったとは、今から考えると一寸ヒクな気がする。

とにかく、最後迄部生活、選手生活を続ける事ができて、僕は今、非常に良かったと思っている。

僕は決してうまいプレイヤーではない。人から、一昔前の古いサッカーと云われるが、僕はそれで満足している。僕の体力的条件からは、あの様なサッカーが、僕にとって一番適していたと思う。各人が、自分の力を知って自分に適したサッカーをする事は非常に大切だと思う。

次に皆の練習態度について一言。部員が集ってやる練習だけが練習だと思はないでほしい。自分から進んで前向の姿勢で練習する事が大切だ。一週間に六日練習やろうと、又三日練習をやろうと、与えられた練習だけやっていたのでは意味がない。僕は、中学以来今迄を振り返って、一番役立ったと思う練習は、高二の春、毎朝七時に登校してブレスキックだけの練習をやった時だ。その頃、僕はひどいスランプで、満足にボールが蹴れなくなっていたのだが、一ヶ月以上その練習を続けたお陰でキ

ックだけは自信がもてる様になった。東大に入ってから上達する選手（高校時代から続けていて）が少ないとよく云うが、それは、自分から進んでモク／＼と練習する様な態度が失われるからではないだろうか。僕自身反省して、その様な気がします。

熊沢英男 経済学部 両国高 ホワード 大学の四年経験

四年間練習してきたが短かすぎる。高校での経験が無いのでその感じるのだろう。たいしてうまくならず卒業してしまいうが残念であるが、もうあの苦しい練習をやりたいとは思はない。直接サッカーに関する思い出は少ないが、サッカー部に属していた為に味えた楽しい思い出はとも多い。その主な理由は同年のものが十名を越し、途中で止めた人を合わせて仲良くゆかに毎日を通せたからであると思う。四年間有意義であった。

後藤雅治 経済学部 私立桐朋高校出身 LI

サッカー歴は約十年、その間ポジションは主にF・Wだがいたる所を転々とした。大学に入ってから是一年のリーグ戦第一試合にR・WをやったほかはずっとLIだった。大学に入ってから背番号10以外にやりたいと思ったポジションはありません。僕はインナーという職人になりたかった。そして10番は誰にも渡したくなかった、だから一生懸命に練習もしましたし、ポジションの研究もした。しかし今から思えばこれはあくまで「つもり」

であって先輩諸兄の現役時代の話を聞くと雲泥の差というところでしょう。練習している時はもうこれ以上出来ないと思っていたのだから情ない。高校時代も、中学時代も人数も少なく指導者もないという部で夢中でやって来た時に比べ、東大での生活は立派な先輩良い仲間にくぐまれて、ボールも充分使えだし、専用に近いグラウンドもあったわけですべてに恵まれすぎの感さえします。だけど全然上手になれなかったのはどういうわけでしょう。中学・高校の頃は何も考えずにサッカーだけをやって来た、そういう気がします。時間も一番多くさいた東大での練習には何か雑念が入っていた気がしてきます。サッカーだけを、サッカーだけを考えて、という生活が出来たら、たとえ大学という 学問の府についても とても立派なことだと思えます。入学した時はそれをするつもりでしたし、出来ると思っていたのですが、……自分の出来なかつたことを後輩に夢みるという時が僕にも来てしまいました。

中島宏介 経済学部 小石川高校出身 G. KIMURA

サッカー歴 高校一年より

四年間を振り返ってみての感想。大学に入りたての頃は、これから四年間サッカーができると思うとうれしかった。しかし四年間もサッカーに明け暮れなければならぬのかと思うと、不安でもあった。誰も同じであると思うが、勉強しようか、それ

ともサッカーを一生懸命にやろうかという迷いに悩まされた。現在、後輩の諸君の中にもそう考えている人がいると思います。そういう諸君のために書きたいと思います。大学生活四年間は、どのようなでも過ごせます。しかしどうせやってみるなら、何か一本だけに賭けてみてはどうでしょうか。あれもこれもやるというのでも確かに一つの方法ではあると思います。しかし、それでは、ある物事の全貌を見きわめることがむずかしくなると思います。日常生活のあらゆる行動が、ある一つの目的のために行われるという時程、有意義な時はないと思います。有意義とは言っても、四年間毎日が楽しい日々であったわけではありません。いつ果てるとも知らぬ練習と、家へ帰るまでの腰痛、ななか上達しない自分のプレー、これらが四年間の生活に価値を与えてくれたとも知らず、ただ、毎日、これさえなければ思ったりしました。しかしこのくだらない考えを毎日続けているうちに、これらの蓄積が「何物」かに到達する必然性が生まれて来るのだと思います。その「何物」かこそが、大学四年間の収穫となるのではないかと思います。しかしその収穫物は他の部門におけるものとは質的に異ったものであるから、他と比較することは容易ではありません。しかし、あれもこれにも手をつけて得られるものより堅固であって大きいのだと思います。これからL・Bになりますができるだけ一緒にボールを蹴りたいと思います。

長田 男 法学部 都立戸山高枝

R W

サッカー経験は高校で一年から三年の夏までの二年半、その間にL Wをやり、大学に入ってから四年間R WあるいはR Hをやっていました。将来のことは目下暗中模索といったところ。もう少し勉強してから決められたら決めます。趣味は音楽一切。クラシックから歌謡曲まで広範囲。

八田 洋 工学部原子力工学科 F B 小石川 卒

サッカーは大学入学と同時に始めました。ポジションはF B少しサッカーが分るようになってからは何とかしてF Wがやりたかったです。何も分らない時バックをやらされたのが運のつきで、ついにF Wをやらせてもらえませんでした。それが心残りを云えば心残りです。これからはF Wをやらせてくれるチームでサッカーを楽しみたいと思います。

南 忠夫 工学部建築学科 C F 教育大学附属高校出身

サッカーはもうベテランの部に入ります。大学での四年間を加えると八年間もボールを蹴ったことになりました。その間高校時代には国体にも出場しました。ポジションはずっとF Wをやり、東大入学後は主にC・Fで時々はウイングもやりました。

森 紘一 四年 工学部 精密機械工学科 サッカー歴

中学の時一年・高校の時二年。ポジションはバックス四年間をふり返って。一年生の時サッカー部に入ったが、はたして勉強と両立するかどうか迷ったものだった。又夏休みが終ってから自分のやりたいことをする為にサッカー部をやめようとも思った。しかしこの時期を切り抜けてしまった後は、学校に行きその後グラウンドでボールを蹴ることが一種の義務感となり、気がついてみたらもう自分は四年生であり、しかも卒業を真近にひかえているといった状態である。そして今はこの四年間にはなかつた解放感を味わっている。僕は始めはゴールキーパーとして、後にバックとして練習をしたが、結局はレギュラーにもなれず、一軍と二軍との間を上ったり降りたりする状態がこの四年間を終わってしまったのは、本当に残念でした。もう一度一部に復帰しようという願いを持って、この四年間チームはやってきたのだが、その願いも数にかなえられなかつた事も心残りである。東大サッカー部もその人数の点に於て、僕の一年の時と四年になつてからを比べると、実に二倍にもなつて。それだけ上に立つ人は大変だと思つて、ここで二、三年の人に言いたいのは、たゞ練習時間だけ、練習をしたのではだめだといふことだ。特に東大では大学に入って始めてサッカーをする人が多いので、こういう人は特に練習時間外の練習をやらしてもらいたいと思うのです。まとまりのない事を書並べたが、三年生以下の諸君、これからもがんばって下さい。

山浦絃一 経済学部四年 小石川高校 サッカー歴

高校一年の夏入部、三年春まで。ポジション、サイドハーフ
四年間をふり返ってみて、一年から四年まで、いやが応でも或るグループの成長発展の主体となって来た。とくに数も多くな
って来た事が重って、サッカー部はますます分業体制が整って
きた。(僕は学年による仕事を分業とみなすので、そこで学年
は大体実力を示すだろうという前提に立った区分目標で逆でない。
)その分業の中を一年からやってきて、結局全ての部門を
経たことになった。特に一年生にある時は四年生は不可解なる
ものでなかなかその行動、言葉を理解できず、四年になって、
なるほどこんな気持だったんだと遅まきながら共鳴すると同
時に、人間は自分以外のことは本当にその立場に立たぬと理解
できないもんだなあと、当り前の事に感動したものです。特に
運動部の場合、練習試合で相手の動作から相手の気持を読むの
が大切と言われている事は自明の事だから奴も知ってるだろう
と置いて以外に意志疎通の感が結果からありました。「あれたのむ」といわれて「あれ」がなんだか解ってるのが仲間同
志の定義にする傾向があったのかもしれない。サッカーの面
についてもこんな音信不通の状態でしたから(これは話し合う
機会のあった時によく発露されました。)他の生活面に於ては
宣しくプライバシーを守り、良い意味で大人になっていました。
サッカーの扉は開いているが第二の門でストップの信号が鳴っ

ていました。それ以上進むことはタブーの空気がありました。
そのためサッカー部の仲間が本当にサッカーのみの結びつきに
徹してしまいました。青年の付き合いから一足跳びに大人の付合
に跳躍していたのですね。

吉田慶次 経済学部四年 新宿高校卒 サッカー歴 高校で

二年半。大学四年。ポジションなし。四年の時は笛吹役
部生活の想い出。一向にうまくならない僕にも一応練習の事を
想い出すことがある。特に苦しかった時の事ほど。入部早々の
強烈なラン・パス、上級生相手にコチコチになり、かえってチ
ョンボした事。二年ではボールの後ばかり追回して疲れてし
まったゲーム。一軍で練習できたこと。三年では態度の悪い部
員だった。それでも引張っていったくれた上級生と同輩には感
謝してます。入替戦のくやしき、あれで一段と部員意識が高ま
った。四年になっての笛吹役、以前の自分の行動を考えると羞し
くなる。僕には重過ぎる荷だったかもしれないが、妙にふるい
たってくる。チームのスランプの時もどかしき、全知全能の
コーチがいてくれたらなあ。が実際は諸先輩、監督、コーチの
アドヴァイスを僕らが充分に消化しきれなかったからなのさ。
結局僕は元より、多勢の先輩、ファンの期待を実現できなかったが、僕らとしては一生けん命やったつもりだったんだ。残
念なことといえば、全般的に学生らしき、若々しさ、ガムシャ

ラさが不足してたと思うことです。僕個人としては部生活という一つの事に熱中できたことを今になって幸せだっただと思つてます。もちろん毎日毎日丁度逆の生活で、抵抗を感じることの方が多かったです。強力であった諸先輩にとつては不肖な僕らでしたが、後輩諸君が再び強力なチームを造つてくれると、僕の鼻まで高くなることを期待して、山の上から声援することになります。

——— 三年生 ———

石光 豊 経済学部 広大附属高 ハーフセンター

広島という所が、知る人ぞ知る。かのサッカー王国なのであります。市内に住む餓鬼は、小学生の頃からボールを追いかけ回し始め、広大付属の有名プレーヤーに絶大なる尊敬の念を抱きつつ、いつか僕もあんなプレーをやってみたいと心に願うのだそうであります。「そうであります」というのは、私がサッカーなるものが存在することを識つたのが市外の片田舎から付中に入学した中学一年の時であり、それ以降ボールを蹴ることの面白さにとりつかれはしたもの、小学一年からやっている連中の心中や話を聞けば解らぬというわけです。それにしても、自分の膝小僧の辺までもあるボールを器用にあつかいながら、単身数人を抜いてシュートをきめている友人（彼は全日本にも選ばれました）の姿を初めて見た時の驚きと興味は私にとって相

当のショックであつたらしく今でもその場面をありありと思ひ浮べることが出来ます。中学二年の時サッカー部に入つて以来、現在に至るまで、高校と大学との間の二年半のブランクを除いては、ずっとボールを蹴ってきたのでありますが、今もって私の記憶にある、あの超人的な彼のプレーは、私の努力の目標であり理想であります。これからの一年間、学生サッカーの最後の一年間、私の頭の中にある諸イメージを追つて、それを実現させていきたいと考えます。

大田直幹 法学部一年 湘南高卒 キーパー以外

中学高校を通じてサッカーの経験は全くありませんが、高校時代は応援部で活躍しました。スポーツが大好きで、野球、相撲を始め、なんでもよく知っています。ある人曰く、「彼は解説者、アナウンサーにむいてるね」。またスポーツマンとして当然のことながら、体のこと、スポーツ医学に詳しく、皆んなの役にたっている。また、ある人曰く「奴は、ハンサムで、趣味がエレガントときているから、一諸にいと、やになってしまふね、奴ばかり、もてるんだからね」。これで僕のこと大体おわかりでしょう。

サッカー経験は、中学二・三年の一年間、高校の同好会で一年間、高校の同好会で一年間、大学に入ってから三年。ポジションは中学高校の時はCFとL・I・でした。大学ではL・Wです。忘れられない感激は、新人戦とリーグ戦初出場の対農大戦です。今シーズンの抱負といえば、練習することであり、試合に勝つことです。先輩方々へのお願ひといえば、グラウンドに出てきて、大いに叱咤激励して下さい、ということ。す。

生れつき非常におとなしい性格であるが、高校時代ふとしたきっかけからサッカーをやる気を起した。サッカーの面白味が増えるようになったのは最近。一年生の夏頃、退部する寸前まで心が動いたがズルズルと残っているうちに、サッカーが面白くなり秋頃からは、サッカーを止めるなどということは、全然頭に浮ばなくなった。今では勉強を少し犠牲にしてもボールを蹴ることに意義があるように思えてきた。しかし部員が余りにも禁欲的になりまるで殉教者のようなせっぱつまった心境でサッカーをしたのでは強くない。丘の上にガールフレンドを並べてその声援で頑張る位の子供っぽさ、若々しさがあっても良いのではないだろうか、一部に復帰しようという考えだけでは、それがいつか焦り、また緊張も破れて目的に達することは

出来ないだろう。部員が無心にサッカーを出来る状態になれば、部も強くなると思う。ただ十一月の末に涙を浮かべながら部屋への階段を下りることは繰り返したくない。

運動をしない生活の味気なさを二年間つくづく味わって後入部したのが、昨年の四月、やる気は充分だったのですが、技術の差を如何ともしがたいまま、昨年を終えてしまいました。しかし昨年の生活は僕にとって非常に貴重なものだったと思えます。なぜなら多くの面でうまくいかなかったからです。最も痛切に感じたのはサッカーの難かしさと勝負のキビシサでしょう。素質、練習量、練習内容等の条件が長年にわたって満足された後に初めて一人のプレーヤーができるという自明の事がよく解りました。チームについても同じことがいえると思います。

「勝つ」という一言が何を意味するのか。大松監督の「俺について来い」を読むとあだおろそかにこういう言葉を口に出せないと思うと同時に、自分の甘さが痛切に感じられる。サッカー以外の面でも同学年の諸兄のお影で色々得る所が多かったのを感じています。運動部の生活に対する考え方は色々あるでしょうが、僕はそこで運動することだけが全てではないと思っています。従って今迄より以上に、学年内、学年間そしてできれば先輩との間にも自由な意志の疎通がされることを望んでいます。

今シーズンは多事多難なことと思いますが、僕がサッカー部内でおかれた位置を認識してできるだけやっていこうと思つてます。

畔柳信雄 経済学部三年 教大付属高卒 フォワード

サッカー歴は国体準決勝その他です。

中学より高校を経て、ずっとサッカーをしています。高校を出た時は、もうこんなサッカーのようなしんどいものはやめようと思つてましたが、また大学に入ると大変やりたくなり、サッカーを続けています。考えるに、長くサッカーをやつていた結果、ボールを蹴るのが本当に好きになつたのだと思います。中学、高校ではやはり地区大会に優勝したこととか、東京代表で国体や全日本に出たことが印象に残っています。今年こそ二部で優勝して一部に上がり大学時代の良き思い出としたいと思つてます。

樋口周嘉 工学部航空科 学習院高校卒 インナー

名前はチカヨシと読む 小学校からずっと学習院である。

サッカー経験は、中学三年からはじめて高校三年の夏までの三年半ばかりと、東大に入ってから三年間。

この間、思い出になるのは高三の時、創部三年目にして初めて教大附属と引き分けた事、更にこの時、春のリーグ戦で小石川

高校にも四一〇で快勝してブロック優勝をとげた事だ。

ポジションは高校大学を通じてインナーとウイングだが、自分としてやりたいのはインナーである」。

ところが生来運動神経の無い男、ついに見放されて、今年はマネージャーをやる事になつてしまった。

——二年生——

安藤 毅 原子力工学科 都立小山台高卒 F.B.C.H

ボールを蹴りはじめてもう六年。背が高くて、鈍くて、よく空振りをするバック。

高校のチームは十一人集まるのがやっとで、何の大会に出ても、東京都の予選の一、二回戦で敗退という情ない状態でした。東大サッカー部に入つてまず人数の多い事、練習時間・日の多い事に驚きました。ところが今シーズンは一部に上るため週六日にしようという意見もあるそうで、又々ビックリしています。東大が強くなるには練習が第一ですが、部に理科生が多いという事も考える必要があると思います。理科生に限らず部員の勉強面における犠牲が大いからです。「部員であればそんな事は当然だ。」と言われればそれまでですが、試合に勝つには、私の愚説ですが、フォワードの人が味方のバックのパス待って攻めるより、相手のバックのボールをカッサラッて攻めた

らどうかと思うのです。その方がズツとズツと来たと思うのですが。

石丸悌二 法学部 灘高校卒 フルバック

中学・高校に於ける経験なし、二十才・趣味は、食う事、寝る事、旅行へ汽車に乗っているだけでも楽しい。目下チョンガ中だが、これもサッカーの為か?とすらまれてならぬ。サッカーよ、お前は自分を恋人にして欲しいのだろうか?

父は大正末年頃東大在学、現在神戸で判事をしていますが、僕は、そういう方面にあまり興味なく、それでいて、法学部進学予定なので、今、悩んでいるところです。元来、末子でノンビリ者ですので、まだ確固とした職業観がありません。唯将来、あまり非凡すぎる生活だけはしたくありません。

生活信条は「己に勝つこと、全力で物事に対する事」。目下の目標は、学業では落だいたいしないこと、サッカーの上達のみ、最大の悩みは、チョンガたる事。

河井良彦 工学部応用化学科 灘高校卒 レフトインナー

中学三年より高校三年まで、四年間、サッカーをやり、現役で東大入学、長男で、一人息子で、家長なので、色々忙がしいうえちかごる遊びごとは何でもし、ボーリング・ガールハント等々をやります。音楽はポピュラーでもクラシックでも好きです

ザル碁を多少やります。昨秋、頑張って自動車の免許をとりました。今後いろいろな面を利用したいと思います。家も日吉の方に移る予定なのでなお好都合です。中尾ミエの『可愛いペービー』の歌以来『ペービー』と言われています。この前足の関節を痛めて以来少し練習を休んだのでスタミナがおちていますが、よくなりましたのでせいーバイ今後がんばるつもりです。

河島洋征 工学部船舶科 北野高校卒 フォワード

卒業後は造船会社に就職するつもりであるが具体案は未定。

サッカー歴は関学中学部時代三年、北野高校時代三年。ポジションはフォワードなら一応どこでもやったことがあるが、中学時代はインナ、高校時代は一年のとき左インナ、二、三年のときセントフォワードをやった。現在は左ウイングの穴うめの様な役をしている。もしクラブを続けるとすれば、右インナをやりたい。力強いプレイヤーになりたいと考えている。キープ力のあるプレイヤーに、シュート力のあるプレイヤーに。先達諸氏に対する不満、クラブのあり方に関する不満は殆んどなく、立派な友達に恵まれたことを感謝しています。将来も何かとお世話になるかもしれませんがよろしく願います。

昭和十八年九月四日生れ。身長一六八センチメートル・体重六七キロ。サッカーをやるには少し太りすぎ。高校一年から三年の五月まで終始CH。東大ではバック全般。現在はFB。サッカーの技能について言うと、キックは飛ぶことはあっても正確。ボールコントロール、ドリブルは全然だめ。スタンディングヘッドはできるが、ジャンプ力がないのでジャンプヘッドのせり合いは弱い。足は普通位だが、機敏さには欠ける。こんな者でもおいてくれるのだから東大サッカー部は有難い。現在の悩みの一つは部員数が多すぎることらしい。そこで提案二年の時のリーグ戦が終ってもものに成りそうにない者には退部勧告を出したらどうだろう。勧告を出す方も出される方もつらいがその方が部の為にも個人の為にもよいように思う。下からの盛り上りのなんのと言っても人間は弱いもので、試合に出られる見込が全然ない時に自分を苦しめることを長期間続けられるものではない。もし続けられる者が居れば現在の東大位なら二年で準レギュラー位にはなれるだろう。サッカー部員であるからには、試合に出なければ意味はない。出るからにはそれだけの技能とプライドを持たねばならぬ。プライドはとにかくとして技能を身につけるには練習しなければならぬ。試合に出られるだけの技能を持たない者、即ち練習の足りない者やサッカーするに必要な素質を持たない者が部をやめるのは、全く部にも

本人にも結構なことではないか。大学生たる者、サッカーをやるだけが能ではない。各々自分の才能を伸ばして、サッカーをやる者は名選手に、勉強の好きな者は学者の卵になれば、東大の内容は増々充実してゆくに違いない。

中岡智信 工学部土木工学科 日比谷高校卒 フォワード

昭和十八年六月二十七日生れ。高校時代に部生活約一年、広大附中・高時代は遊びといえはサッカーだった。将来は建設関係。親兄弟に東大関係者なし。昨季は新人戦後八月まで休部した。練習の為に授業を度々休むうち勉強がスタスタの状態になっていくらがんばっても追いつけなくなった事、体力的にも疲労は蓄積し気力も衰えた事等によって永く迷って居たが新人戦を機会に退部を決意した。しかし先輩方の御意見を聞いてもう一度がんばるべく復帰したが問題は未解決のまま残っている。今後理科生も増えるだろうし文科生の中にもサッカーと自分の勉強とのジレンマに悩む者が多くなるだろうがこれらの人々を正式な部員として迎えるならその取扱いは色々の問題が生ずるだろう。時間についてはお互いに考えてゆかねばならぬだろう。昨年は他にも同じケースで多くの部員達が退部したがそのやめ方が不明朗なままの者も多かった。お互に誤解や立場が在るだろうけれど責任者はもう少し思いやりと弾力性を持ってもらいたかった。

野村晋作 法学部 広大附属高校出身 インナー

駒場キャブテン。高校の時、遊び時間を利用してサッカーに興じましたが、部生活は経験していません。現役で合格し、かねがね望んでいたサッカー部にこの身を投じ、以後やりたいこともおさえてサッカーに打ち込んで来ましたが後悔はしていません。今春、家を東京に移したので、尙一層の努力をしようと思っております。

映画が好きで、特に日活の吉永小百合さんの、ほのぼのと心をあたためるような清らかな美しさに言い知れぬ魅力を感じていますが、後藤さんも、彼女が好きだそうで、涙をしながら先輩にゆずりました。今は東映の三田佳子さんに傾倒しています。あの人が出た「海軍」と言う映画は忘れられません。あの人の美しい女学生姿が今も目にやきついています。まだまだすばらしいものをもっと持っている人で次の日本映画界は彼女や佐久間良子などが背負ってたたなくてはだめだと期待しています。音楽はポピュラー、歌謡曲が好きでギターをかんでながら歌っています。言い忘れましたが、赤木圭一郎が好きで、部誌にもそのペンネームで時々書いています。

容姿端麗にして、色は小川さんと争い、足の長さも僚友の注目の的です。また、私の兄が、三、四年の時、当サッカー部に、二年間居りました。今度の家は、国立音楽大附属高校の前に移りカワイ子ちゃんがいるので、大いにハッスルしています。

平田 攻 法学部 広島国泰寺高校卒 サイドハーフ

中学時代から球けりをして遊んだ。部経験は中学の時ちょっとやり、高校の時はバスケットに転じた。大学で再びサッカー部に入った。二十一才で一浪。趣味はサッカー、と釣りだが、東京では行きたくても行けないのが悩み。帰省中は必ず釣りをする。今のところサッカーボールが恋人がわりをしてくれている。将来の方向としては、家の連中は官吏になれと勧めるが僕は嫌いだ。サラリーマンになって、平凡な平凡な生活の中に自分の本当の幸福を見つけないと思うが、性格上どうなるかは？
現在「六法」に悩まされている。

広瀬英雄 農学部林産学科 都立戸山高校卒 G・K

キーパーは高校時代二年半やって、一浪の後大学に入学。東大ではキーパー以外させてもらえなかったし、又、今後もやらせてもらえないので、中学時代、遊びにフオワードをやったのが、今はなつかしい思い出です。身長が一、七七米と言う事より体重が七十五キロあることの方が有名です。でも二年間に十キロ以上も減りました。趣味は、試験前に多少ともする勉強程度で他に何もありません。又、体重が重いせいか、走るのが苦手でマラソンは最もきらいな種目です。いつもムツツリしていますが、ゴンゴンといたずらするのが好きです。又言葉使いに對して厳しく、今問題の国語問題審議会の役員に選ばれるべき

だと自負しています。家が埼玉で遠いので練習して帰ると疲れます。朝、目をさますのが面倒でよく学校に遅れそうになることもありますがまだ遅れたことはありません。

藤井俊治 応用化学科 都立小山台高校卒 ウィング

サッカーは東大に入って初めてやったので、ズブの素人です。練習がきびしいので、いつもフウフウ言っています。趣味は、ポピュラー音楽が好きで、読書は未だ濫読の段階です。その他にハイキングが好きで、特に女の子とよく出かけます。僕等の町で後輩を育てるために、塾の様なものを開いています。僕等のおかげで、ウイスキーボンボンや、ビスケットを合宿の時、差し入れてくれる女性の友人が出来ました。その為、サッカー部の友達とつき合う時間がなくて残念です。

水沢雅武 工学部機械工学科 教育大付属高校卒 ハーフ

趣味は汽車に乗って遠くへ旅行し、そこでバカな事を考えたり言ったりしてその実現性を考えること。サッカーは高校在学中に、一年生の四月から三年生の五月まで二年間やった。最初はボックス要員だったが後にはハーフセンターのみ。大学入学当時、入部予定であったが、ヒザの故障により、サッカー不能の状態であり、又その他にも種々雑多の理由により断念した。ヒザは八月頃には完全に直ったが、そのまま安逸な生活を楽しむ。

一年たつてその虚しさに気づき、改めて厳しい練習を求めて入部決意した。体に故障が多く、満足に一シーズンを終える事が出来ず、今シーズンこそと自分に言い聞かせている次第です。次に先輩及び上級生及びコーチに対して自分の意見を述べてみようと思います。

一、これからのサッカー部は時間的に余裕の少ない理科生が多くなる。理科生が正式の体育会蹴球部に所属し、その上重要な役割を果しているという事実をよく考え、将来、部を強くする為には、今の部員構成、練習体制に体質改善が必至と思われる。二、今の一軍と二軍とに分ける制度は、下級生の成長の芽を止め、いたずらに目前の成果のみを追っている様に思われる。三、自分もその一人だが、一般的に先輩、上級生、下級生相互の意識がしっかりしていない様に思う。だから技術、マナー等の指導に欠ける面が時々顔を出す。以上の事について、自分には問題点がわかって、その改善策や改革策はわからない。又この様な事は、問題があまりにも大きく、つかみ所がない。その上、ある現象を、ある一面から批評したところで、何にもならない。それぞれの人はその人の立場で、各々が違った意見を持っていると思うから、もっとみんなまでフランクに話し合いたいと思う。バカ話ばかりでは楽しんでも進歩がない。もっとみんなまで話し合おう。

渡辺 翼(たすく) 農学部水産学科 函館東高校卒 バック

中学校二年の時からサッカーを始める。それよりも僕の父は、明治の昔、樺太と言う外地でア式蹴球なるものをやって、足の骨を折っている。サッカーと骨折の気は相たずさえて遺伝したらしい。高校二年迄、サッカーをやり、あまり上手にならない内に受験勉強の為に引退、それから二年半のブランクの後、東大サッカー部に入る。他のスポーツは、スキー、スケート(冬)水泳(夏)を多少やる程度。大学のサッカーを始めてからの悩みは、二年半と言う長いブランクの故に、サッカーに対する考えが固まってしまった事、今でも、その破壊に大きな時間をとられる始末、趣味はと聞かれたら、音楽はワグナーとモダンジャズ、文学はバルザック、他無しと答えるであろう。今迄、僕は偶然に甘えずぎていたきらいがある。それからあきらめが早い、人の目を気にしすぎると言った欠点がある。勉強は嫌い、サッカー部の事を考えるかと言われれば、肯、と答えるであろうが、突発的で、論理性が無い。いつも考えているというポーズをとりたがる愚者。又、人にたのまれると否とは言えない気の弱さがある。その為、部生活に熱心だと言う、はなはだ、いまわしい偏見を仲間からいだかれてしまった。もっと自分強くならなければと思っている。

—— 一年生 ——

小川司朗 理科一類 灘高卒 ハーフ

灘中学二年の頃からサッカーを覚え今日に至る。秀れた先輩や環境にめぐまれてはいたものの、それを十分に生かされずに大学へ入ってしまったことを残念に思っている。小さい時の大病がたたって、体が細く外見はキャシャアはあるが、意外と強堅でバネも割合ある方だから、それを生かして将来に賭けたいと思う。部並びに先輩に対する希望は特にこれといってない。

沖 邦雄 文科二類 東京学芸大附属高卒 RI RW

サッカー歴。小学校の三四年の頃、父に連れられて神宮競技場で東西対抗サッカーを見たのが最初。自分では、小中学校では遊びながら蹴っていた。高校ではサッカー部に入ったが、我々は部員が十一名いない時もあつたくらいで、東京大会のベスト8には一度もならなかった。

卒業後のことは未定。先輩、部に対する不満は特にない。ただぜいたくかも知れないが、もう少し良いグラウンドが欲しい。父は東大サッカー部昭和十二年卒。

草野千夫 理科二類 浦和高卒 RW

高校時代は柔道部に入っていてサッカーの経験はない。東大のサッカー部に入っただけの感想は高校の柔道部の方が連帯意識(自

分が部の一員であるという感じ)が強かったように思う。紳士
的ではあるが反面良い意味での荒さが感じられない。先輩に対
する希望としては、レクリエーションのためにグラウンドで練習
されるのだろうがもっと個人個人に対する指導をしてもらいた
い。

熊谷貞俊 理科一類 灘高卒 LI

サッカーは灘中高時代を通じてやった。高校では実戦を中心と
して基礎練習は十分積んでおかなかったので、基本的なミスをし
て犯すことがある。この点についてはこれから精進を重ね一刻も
早く是正したいと思っている。大学入学に際しては勉学がサッ
カーかのジレンマに陥り込んだが、一度覚えたサッカーの魅力
には抗しきれず入部の決心をした。これからはこの初心を心に
刻んで一生懸命やりたいと思っている。部、先輩に対する希望
は特別にこれといてない。

小柳 理 理科二類 小石川高校卒 バック

高校一年から始める。高三の七月まで続ける。ほとんどRH。
思い出..下手ながら関東大会三位になったこと。その原因には
くじ運と、みんながよく走りやる気があったことだろう。
大学卒後はまだはっきりしていない。東大蹴球部に入ってから
感ずることは、部、先輩に対する不満より自分に対する不満が

著しい。高校の時はずっと自分を疲れさせず事ができたが、今は
疲れると何だか力を抜いているように感ずる。現に人からも、
上達していない。以前はもっと元気だったといわれる。

東大の練習に望むのは、練習時間は長くならず、集中した練習
をというのであるが、虫がよすぎるかも知れない。が現状とし
ては、勉強の方も大いに時間をかけなければならぬ所である。
おやじは東大出で五十八才。サッカーの話になると、大学時代
山中湖でキャンプしていた時、竹腰さんが一人でボールを蹴っ
ていたと話す。

坂井忠昭 文科一類 修道高卒 キーパー

高校二年も終りに近いある日、僕は突然、伝統ある修道高校サ
ッカー部に籍をおくことになった。それは、新しいチームに
ゴールキーパーがいなかった為、新人戦だけでもと熱心に勧め
られたからであった。まったく突然であった。それまで僕がサ
ッカーと無関係だったわけではないけれど、なぜ僕だけが選ば
れたのか今でも分らない。機会があれば尋ねてみようと思いな
がらとうとうそのまゝになってしまっている。それまでサッカ
ーの経験といえば、休憩時間よくやったという程度で、しかも
ゴールキーパーといえばまったくの素人であった。

中学一年生の時、修道高校サッカー部は全国優勝を成し遂げ、
威風揚々と市内をパレードした。全校生徒は市の繁華街に陣取

って我々の名譽ある選手達をむかえ、勝利の喜びを分かち合った。その時の興奮は、サッカー部と何の関係もなかった幼ない僕の胸にも、はっきりと感じられた。僕もサッカー部の選手になってこのように紙吹雪の中をパレードしてみたいという単純で、幼稚な考えをいだいて、サッカー部に入ろうとしたことが一度あったが、その練習を見て、一度にそんな考えを吹き飛ばされてしまった、確か二日か三日位でやめてしまった。

そんなことがあった位だからこれから学校の代表選手として多くの生徒の前でプレーすることを考えると身震いするくらい怖い気がした。初めて部屋に案内され、あの一種独特な臭いを感じた。その瞬間僕は体中から熱い血がどどん湧き出るような興奮をおぼえた。型通り部員に紹介され、二日後から練習に来るよう言われた。新人戦だけということだったので、スパイクもストッキングも何もかも借物であった。初日から皆と一緒に練習を始めた。たゞもう夢中であった。勢いよく飛んでくるボールにがむしゃらにつっこんでいった。やっと一日の練習が終わった時には、体中血だらけになっていたが、別段痛さは感じなかった。他の者が皆心配そうに「坂井、大丈夫か?」といっても「うん」と平気な顔をうなずいた。そのあと、ミーティングの時、下村コーチが「坂井はプレーは下手だが、今までの部員にない真剣さを持っている。皆、彼の真剣さを見習うべきだ」と言われたが、僕はちょっととれくさい気がしただけで下を向

いたまゝだまっていた。帰宅すると疲れが一度に出てきて、すぐ床についた。翌日、目がさめると大変であった。体中がピリピリと痛くて歩くのがやっとという有様で、学校の階段はとうてい上れなかった。友人に手助けをしてもらってやっと教室にたどりつくのであった。

そのような日々が一週間程続くと次第に体もなれてどうやら練習も苦痛にならない程になった。そうして一週先にせまった新人戦めざして毎日汗と泥と血にまみれてひたすらボールにしがみついていたのである。下村コーチも、あまり難しいことは言われず、とにかく確実にキャッチすることだけを心がけていくようにしむけて下さった。いよいよ戦い始まり、キックオフの笛がなった時、僕は足の震えがとまらず、どうしようもなかった。初めてやってきた平凡なボールを僕は大きくファンブルして、敵方からワイワイとやじられた。そんな有様であったが、幸にも他の十人が頑張ってくれて、どうやら決勝戦まで駒をすゝめることができた。相手は山陽高校であった。当日は絶好のサッカー日和で、両校応援団も総勢二千人、笛太鼓のとどろくうちに試合は始まり、一進一退の攻防をくりひろげたが遂に後半、得点を重ねて、勝つことができた。すぐに下村コーチを胴上げし、応援団の前に立って校歌を聞いていると思わず目からの熱くなるのを感じて、ずっと下を向いていた。試合後、祝勝会が開かれ、皆がよい気分になっていく頃になると、もう体

中のすり傷が痛くて、仕方がなかった。でも、とにかく勝つてよかったですと何度も何度も心の中でくりかえして、勝利の喜びに酔った。責任をはたした満足感は僕をこの上なく快い気分にしてくれた。運動部のよさがその時初めて分ったような気がした。運動部の意義というものがとにかく議論されるが、僕は何といっても勝つことに最善をつくすことから生まれる種々の事柄につきると思っている。極端な言い方をすれば、スポーツをやるからには、勝たなければ駄目だということだ。今、新人戦のことを思い出すとつく／＼そう感じるのである。

その後、いくらか調子の波もあったが、秋田における国民体育大会、西宮における全国高校サッカー選手権大会と輝く連覇を成し遂げた。それまでの五年間、一度も全国大会へ駒をすゝめることのできなかつた修道高校サッカー部もここに一躍、その名を全国にとどろかすことになったのだが、それ等のことを書いてみると次から次へと思いがつきないので、この辺で筆をおくことにする。

坂口 理科一類 戸山高卒

大学に入るまで、サッカーの経験全然なし。高校二年まで神戸高校にいたので、プレーは随分観た。先ずもって体力をつけて少々なことでは参らないようになりたいと思っている。部に對する希望は、もう少し時間を短かくして、練習の密度を高めて欲しいこと。先輩が実に丁寧に教えてくれるので感謝しています。

島田厚二 理科一類 日比谷高校卒 フォワード

俺は信州浅間山の麓の小諸にてキヤーと生を受けて(猿年のため)十九年これといった真理も発見せずして、唯体ばかり大きくなって来た。東大とかいうキチガイ大学の理一というところに、これ又キチガイ高校であるが、日比谷高校に巣くっていた関係で何んとなく入れさせられたケチな野郎である。そのキチガイ高校でサッカーとかいうキチガイスポーツをやっていた関係でキチガイ大学でもなんとなくやることになってズルズルと今日に及んでいる。オヤジ(島田三郎)が経済学部、オジ(高見沢二郎)が法学部を昭和十年前後に出たらしい。

島原光憲 文科一類 小石川高校出身

サッカーは高校入学と同時に始め、その年の秋ごろから試合に出る。最初はC・H、二年になってR・Iを引き受け三年の一学期末の引退迄続く。大学一年間、ずっとF・W・I・N・N・A・Y・S・E・N・T・A・I・をやって来たが、ここひと月ばかりW・D・I・見習い。将来このW・D・Iをなんとかものにしたい。

卒業後の進路のこと。大学に入ってから正直のところ益々混沌として来た。卒業後の社会のことは、ここでははっきりと切り離して、大学というものを考えたい。先輩方にお願ひ。ただ一つ現在の時点に立って比較判断していただきたいこと。父は昭和十二年経済学部卒。サッカーは全然経験なし。

七海耕一 文科二類 浦和高校卒

不肖の後輩

未経験の僕がどうしてお荷物としてサッカー部に入ったかというのと、勉強もしないのに不可にビク／＼し、キャンパスを右往左往してノートを取り、一人前に性欲に満ちた妄想にふける規格品のような散漫な生活に嫌気がさし、自分を表現し、確認しようとして、浦和高校時代最高のスポーツと、決めたサッカーに、自己逃避の疑惑をふりきってとびつきました。現在、安達先輩の遺訓「現在を犠牲にし、将来を楽しむ」のように、日々是ボールを独語の先生の頭や、優しい彼女の頭に瞥え、ある時はインステップキックし、又ある時は胸でソフトにトラップし、将来、精神面は及ばずとも体力だけでも先輩諸兄のようになり、経済を出て、会社の企画部のようなところで仕事をしたいと思っています。僭越ながら最も新米の僕が上手になれば、我が東大のレベルも上がるものと秘かに考え、縁の下に入り込んで練習しております。

橋本 泰 文科二類 開成高校卒

サッカー歴…中三より高二迄九三年。ポジション…(高校時代の)インナー及びセンター)。身長…一米六六。体重…五十八キロ。足の大きさ…十文半。将来の進路…せんせいというあだ名がついているようですが、今の所は先生になる予定はありません。

せん。サッカー部についての感想…いろいろの点で、東大サークルの中で、最高のサークルに入ってしまったと思います。

サッカー部への希望…現状ではぜい沢かも知れませんが、駒場にも、部員の溜り場が欲しいと思います。上級生への希望…希望より、上級生へお礼したい気持です。これからもよろしく御指導をお願いします。東大関係者…父、信(昭和五年卒、法)。

平井邦彦 理科一類 修道高校卒 フォワード希望

昭和十九年五月二十七日生れ。身長…一米六五。体重…五十五キロ、大学に入って初めてサッカー部に入りました。体は小さいし足もおせいから、一人前になるためにはうんと練習しなければと思っています。僕の高校はサッカーが盛んだから、よくサッカーして遊んだけど、やはり運動部としてのサッカーは遊びと違ってずい分きびしいものだということが、よくわかりました。早く上手になりたいと思っています。

本間正男 理科一類 立川高校卒 バック

高校へ入って初めてサッカーというスポーツを知った。以後練習をするにつれますます面白くなり生涯徒然の友にせん(?)と心にちかかったものである。だが大学に入り学業が犠牲になるにつれ学業にいそむべきかひたすらサッカーにはげむべきか大いに悩んだ。時に打算的考えがまさり練習をさぼったことも

あった。現在もそんな疑問をもちつつ練習をしている。

大学へ入ってはや一年をすぎ部へも不満を感じるようになった。まず練習だが、変化に乏しいように思う。一週間同じ内容を同じペースでくりかえしておりちょっと気を抜くと惰性で練習をしているみたいでその間の練習がまるで意味のないように感じられる。それだけ個人がしっかりしていなければいけないのかも知れない。

三浦 重 理科一類 教育大附属高卒 R・I

中学で三年間、高校でも三年間、計六年間サッカーを続けた。僕の夢多き少年期の大半はサッカーで占められたが、それだけにサッカーに対する愛着も強いと自負している。部の為、サッカーの為なら如何なる犠牲も払う気持すら持っている。プレイの方はまだまだだが、与えられたチャンスを生かして自他ともに誇れるサッカーマンになりたいと思っている。部、先輩にはこれといった希望は無い。

見米 紘一 理科一類 教育大付属高卒 R・H

サッカーは高校時代からやっている。一時変な色気を出してウイングをやるうと思っただが、やはりバックが一番僕に適していると思うから今後はハーフとして活躍しようと思っている。キック力をもっともつつけるのが今後の課題だ。ロシア文学

特にドストエフスキーが僕の最も好きな作家で、第二外国語にロシア語を選んだのも、ロシア文学に引かれたからだ。音楽も静かな曲が好きで、内に激しいフアイトを秘めても、いつも静かな落ち着いた態度を取っているが、酒を飲むとこの激しいフアイトも出て来て僕もおもしろい人間となる。今後勉強とサッカーを両立させるべく努力する積りである。

吉田 茂男 理科二類 日比谷高卒 バック

高校入学の時、武田さん(2年)にこやかに入部を勧められたのがサッカーとのくされ縁のはじめ。創立以来日も浅く、部員も少ない部のため、満足にボールも蹴れない内に試合に出場し、レギュラーとなった。又二年の時には部を継続するという事だけに追われ刻々高校時代は何の技術的進展も見ずに終わった。唯高校時代にサッカーという素晴らしいスポーツの存在を知ったことだけは良かったと思っている。大学に入ってよいよ本格的にやるうと志を持ったものの時既に遅く今日に到っている。これからも東大サッカー部員であることを誇りとして部の発展の為微力ながらも協力したいと思う。

東京大学ア式蹴球部後援会基金報告

収 入		支 出	
32年度	539,300	合宿所建設費	625,000
33年度	75,000	通信費など	4,470
34年度	1,527,500		
35年度	59,000		
36年度	581,550		
37年度	45,500		
38年度	236,650		
計	3,034,500	計	629,470
差引き	2,435,030円		
内わけ	ボンドオープン		2,000,000
	振替貯金		4,327
	預金(第一銀行、横山さん名義)		91,546
	預金(第一銀行、宇尾名義)		260,150
	37年度部費会計の方に 貸しているもの		45,500
	岡野さんがあづかっているもの		50,000
	計		2,451,523
差引き	16,493円は利子として部費の方へ		

卒業 年度	氏名	昭和 32年	33年	34年	35年	36年	37年	38年	計
昭 5	安東新午	20,000				3,000	5,000	5,000	33,000
	竹乘重丸	5,000				5,000			10,000
	森富丈夫	50,000							50,000
昭 6	大脇大五郎	5,000						5,000	5,000
	小川忠篤	4,000	3,000			3,000			10,000
	中野島実	4,000			2,000			6,000	10,000
昭 7	篠田秀雄	50,000	4,000	1,000		50,000			100,000
	高田輝一郎	5,000							5,000
	手出三幸	30,000						10,000	30,000
昭 8	浦村久規				5,000	10,000	20,000		35,000
	桑村富久					1,000			1,000
	木村久規					5,000			5,000
昭 9	桑田英信	5,000				50,000			55,000
	芝山地					1,000			1,000
	高山和一	5,000				5,000			10,000

卒業 年度	氏名	昭和 32年	33年	34年	35年	36年	37年	38年	計
昭 10	大田 博太郎					5,000			5,000
	片山 甲子男					5,000			5,000
	八川 直三				3,000				3,000
昭 11	川島 三四					1,000			1,000
	菊池 武美					2,500			2,500
	森 茂	10,000							10,000
昭 12	渡 弘		1,000					1,000	1,000
	稲 達弘								1,000
	大横 弘	50,000							50,000
昭 13	大横 佐蔵					1,000			1,000
	秋 義典	3,000	3,000			2,500			2,500
昭 14	後田 保					2,000			2,000
	大田 藤三	1,000							1,000
昭 15	大田 三忠	5,000							5,000
	大飯 栄徳					2,000			2,000
昭 16	大飯 栄徳	3,000						5,000	5,000
	大横 陽憲		5,000						5,000
昭 17	大横 憲				5,000				5,000
	大横 三子					3,000	3,500	3,500	10,000

卒業 年度	氏名	昭和 32年	33年	34年	35年	36年	37年	38年	計
昭 18	大谷 四郎 島田 哲八 近原 重田 原 天柏			1,000.00	3,000.00	100,000.00		5,000.00	103,000.00
昭 19	野木 池美 菊 澀加 加 須賀 須 藤賀	300.00	5,000.00 2,000.00	2,000.00	1,500.00	2,000.00		1,000.00 3,500.00	1,300.00 12,000.00 5,000.00
昭 20	岡高 須賀 須 賀賀 賀 賀賀				5,000.00	5,000.00	3,500.00	5,000.00	18,500.00
昭 22	高遠 村高 遠 村高				5,000.00			3,000.00	5,000.00
昭 23	高遠 村高 遠 村高	2,000.00		1,000.00		5,000.00			5,000.00
昭 24	後馬 三真 遠 直大	3,000.00	5,000.00			5,000.00 1,000.00			4,000.00 50,000.00

卒業 年度	氏名	昭和 32年	33年	34年	35年	36年	37年	38年	計
昭 25	海老原 純 山 樹					5,000		5,000	5,000
昭 27	石川 晴 菊 井 維 三 輪 嘉	5,000			1,000	1,000	2,000	2,000	4,000
昭 28	吉 井 裕 石 井 正 海 老 原 朗 柴 沼 明 坪 田 規 川 辺 行 金 井 夫 立 石 也 中 倉 知 新 柴 雄 柴 沼 三 深 沼 晋 藤 井 本 一 藤 井 本 彦	3,000			3,000	2,000			7,000
昭 29	正 弘	5,000				1,000			5,000
昭 29	正 弘	2,000				2,000			4,000
昭 29	正 弘	5,000				1,000			5,000
昭 29	正 弘	5,000				2,500			7,500
昭 30	正 弘	2,500				2,000			4,500
昭 30	正 弘	3,000				2,000			5,000
昭 30	正 弘	5,000				2,000			7,000

卒業 年度	氏名	昭和 32年	33年	34年	35年	36年	37年	38年	計
昭 31	雄 肇	2,000		3,000	2,500		2,500		5,000
	雄 郎							4,000	5,000
	吉 一		1,000				2,000	2,000	5,000
	藤 宏				3,000				4,000
	裕 彦				2,000				3,000
	夫 郎	5,000		2,500		5,000			5,000
	一 清					5,000			1,000
	男 樹					5,000			5,000
	久 郎	5,000				1,050			5,000
	紀 修			5,000			5,000		5,000
昭 32	雄 肇								6,650
	雄 郎								
	吉 一								
	藤 宏								
	裕 彦								
	夫 郎	1,500	1,500		2,000				5,000
	一 清	1,000							2,050
	男 樹			5,000					5,000
	久 郎								2,000
	紀 修								5,000

卒業 年度	氏 名	昭和 32年	33年	34年	35年	36年	37年	38年	計
昭 33	名 取 西 野 浜 口 極 本 高 山 長 崎 佐 藤 高 長 野 田					2,000 3,000 5,000		1,000 2,000	2,000 3,000 5,000
昭 34	幸 武 充 充 芳 芳 宗 宗 元 元 富 富 泰 泰 幸 幸 博 博					5,000 5,000		2,500 2,000	1,000 2,000 2,500 5,000
昭 35	伊 小 野 野 山 山 田 田 谷 谷 川 川 村 村 場 場 島 島 沢 沢					1,000 5,000 2,000 2,000	1,000		2,000 3,000 2,000 2,000 3,000 5,000
昭 36	松 高 高 高 野 野						7,000		7,000
昭 37	直 伸 量 量 一 一 平 平 享 享 郎 郎							1,000	1,000
昭 38	藤 達 隆 二 史 郎							5,000	5,000
昭 39	内 安							5,000	5,000

基金について

昭和32年より集めてまいりました基金もかなりの額になり、基金利子のサッカー部収入に於ける割合は大きなものです。一時基金の状態があやふやとなり、先輩の皆様にご迷惑をおかけ致しましたことを深くおわび致します。現在は寄付と基金の二本立ではなく、基金一本ですし、又毎年マネジャーがしっかりひきついていけば問題のないことですので、どうぞよろしくお願い致します。

サッカー部の会計の方は諸物質の値上り、部員の増加などにより、年々支出が多くなります。そのためには毎年少しづつでも基金を増していくことが最善策だと思っております。基金は全OBの1/2足らずの方々から出していただいておりますが、残りの方々のご協力により、かなりのものが集まると思います。先輩の皆様それぞれ御事情があると思いますが、よろしくお願い致します。又この部誌の費用も基金の方より出していただくことに正式ではありませんが、決まっております。その意味からもお願い致します。

昭和38年度マネジャー

宇 尾 誠 一

東大了式蹴球部昭和38年度決算

収 入

逡 勳 会	128,000
学 友 会	80,000
基 金 利 子	163,783
部 費	80,350
先 輩 貸 金 返 済	4,050
蹴 球 協 会 よ り	3,000
雑 収 入	6,960
計	466,143

支 出

加 盟 費	7,000
ボ ー ル 代	293,700
ユ ニ フ ォ ー ム	74,000
口 ひ も	87,000
文 通 費	2,380
通 信 費	15,911
合 宿 補 助	53,720
京 大 戦 費	16,580
治 療 費 補 助	6,565
弔 慶 費	3,000
諸 品 代	28,026
雑 支 出	3,970
キ ー バ 手 袋	1,300
ス ト ッ キ ン グ	8,600
計	456,852

差引き 9,291円の黒字

37年度より繰越赤字 75,457円

38年度黒字分 9,291円

よって39年度への繰越赤字は 66,166円

昨年7月の37年度決算は一部誤りがあり正しい赤字は75,457円となりましたのでどうぞご了承下さい。

決算について

これは38年度の本決算です。前マネジャーとの引きつぎがうまくいかず、38年度の決算がでて、はじめて37年度よりの正式な繰越し赤字が分かったというわけで、先輩には申し訳けないことだと思いと同時に、はっきりした引きつぎをしてもらえなかったことに対して不満を感じます。

今年度の方針としてはなるべくしめて、引きついだ赤字をなるべく少なくして次にわたしたいということでした。幸い京大戦が東京であったためもあり、一応健全財政となり、わずかながら赤字を少なくすることができました。その一方昨年よりは部員の負担することが多くなりましたが、これは仕方がないことだと思います。来年度は京大戦が京都ですし、七帝戦にも初めて参加することになっていますので、今の予算規模から大分はみ出すと思います。ですので基金をなるべく多く集め、今よりも利子を多くすることに努力したいと思います。先輩の皆様、特に未だ基金を出していない方よろしくお願い致します。

昭和38年度マネジャー

宇 尾 誠 一

編集後記

○この部誌は安達なくしては絶対できなかつた。安達には「御苦労さん」と言ひたす

○又、サッカー部々員の一人一人が協力してできたことも疑いない。つまらない仕事を黙々とやった人々にも「御苦労さん」

○この部誌をつくる時、一番大切なことを忘れていました。費用をどこから出すかということ。今のところ基金の方より出していただけそうです。こんなことに基金を使うことには疑問をもつていらしゃる方もあると思いますが、僕としては、先輩と後輩、そして先輩どうしの交流の場としての部誌ですので、基金から出していただきたいと思います。

○先輩の方々にお会いするのは楽しいことです。現役の皆さんは暇をみて、先輩をたずねるべきです。

○この部誌の用紙を全部出して下さった三菱製紙の奥野さん、出浦さん、広告を出して下さい下さった宝酒造の田中さん、どうもありがとうございました。

○なにしる創刊号ですので、右も左も分からないうちに終ってしまいました。いろいろ不ゆきとどきのところ、間違つたところ、ぬけているところがあると思います。何かございましたらサッカー部までお送り下さい。

○準備を始めたのが昨年十二月の十日過ぎ。暮と新年のプランクもあって、今日一月二十三日、約一月でどうやら準備は完了した。

来年こそ勝ってほしい、東大はこのままではだめだ、日本のサッカーも、などと心に湧いてくる気持を基に計画をたてたが、期間も無く、皆それぞれ多忙で、僕の気持も理解されそうになく、結局僕一人で編集方針、内容を決めてしまった。これからも永続する、一本筋の入った系統的な内容にしたかったのだ。不眠不休で頑張ったが果してどんなものが出来るやら、一寸心配である。

○でも吉田、長田をはじめ皆が雑用を快くひき受けてくれたのが本当にうれしかった。最後には皆で作った皆の努力の結晶となった。○それにしても宇尾は偉い奴だ。僕と方針が異つても、一番面倒な一番報れない仕事を黙々とやる、基金会計、名簿等彼がいなかったら、今年のような画期的な報告は不可能だったろう、一諸に仕事を始めて初めてマネジャーの苦しさや心の内が解つたような気がする。プレーヤーよりどんなにづらいかしのない。

○森のニューブルーバードも役に立った、昼休みは殆んど毎日彼が連絡、運搬係をやってくれた。心から彼と彼の車に感謝します。○四年間同じ釜のメシを食べ、苦楽を共にした我々四年生は、その最後を勝利で飾れなかつたくやしさと、はずかしさと責任感を胸に秘め、凡を合せて、費用からその他一切を皆で分担し、ともかく部史上はじめて、部誌を創刊する事が出来ました。

これから先、いつまでもいつまでも、このくやしさとうれしさは我々十二人の心の中に同じように強くやきついているでしょう。今後一層の発展を心から祈っています。

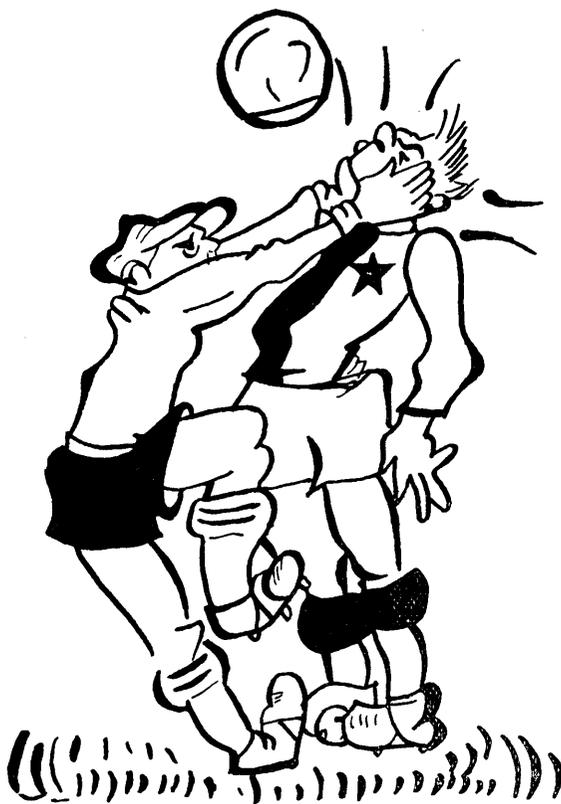
(安達)



国際・国内大会
使用球

ミクニビクター号
ワールドカップ号

サッカー.....
服装も.....
.....ミクニ.....



球技用運動用品全般
株式会社 ミクニ商会

代表取締役 梶田房次郎

東京都千代田区神田金沢町10番地
電話 神田(251)4933・9819番

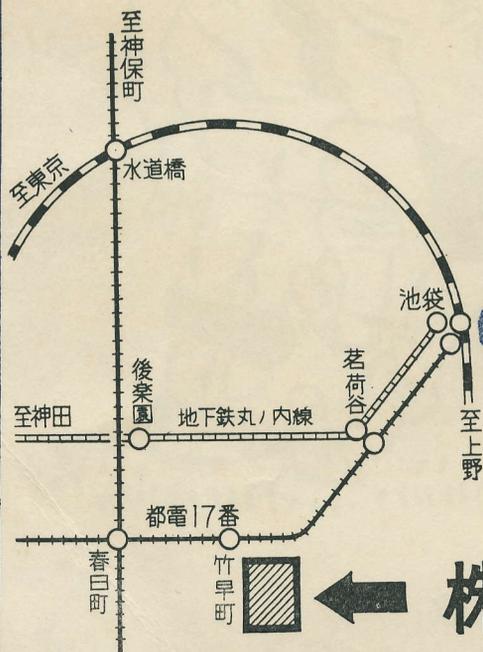
御一報しだいボール
靴・ユニホーム・カタログ
をお送り致します。

優れた技術

輝く伝統



安田の
サッカーシューズ



株式会社 安田

(都電竹早町又は清水谷下車)
(地下鉄茗荷谷駅下車)

東京都文京区竹早町36
TEL (813)5761 (代表) (811)2548